

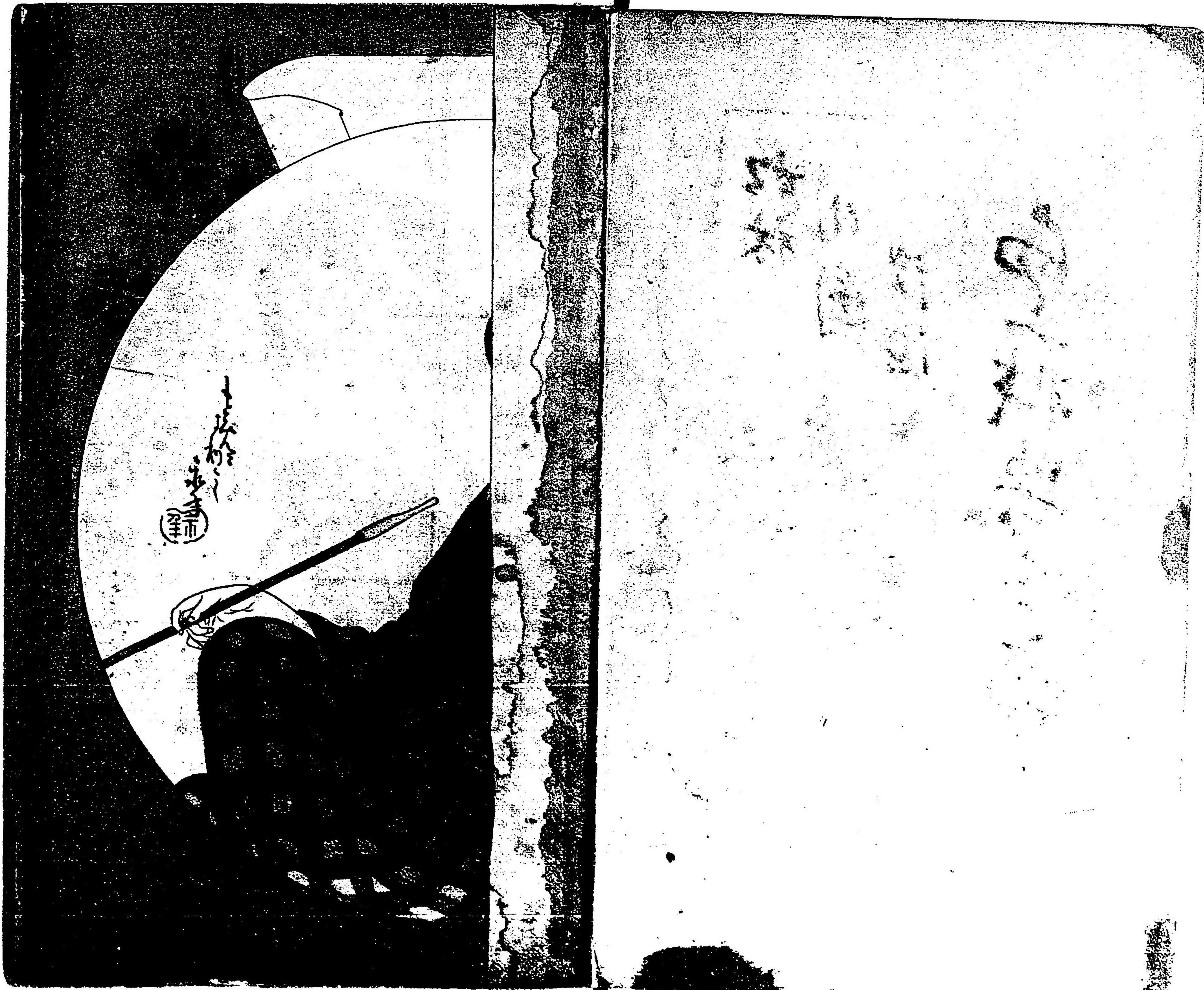
75 特8

857



白牡丹  
清園







188  
839

内 巻 三 郎

# 向疵與三郎

## 第一席

松林伯回講演  
今村次郎速記

今を距る百餘年前徳川政府御繁昌の時、北町奉行依田豊前守殿の裁判に相成りました與三郎の傳で御坐います、抑も起り立つ所は寶曆二年の頃兩國横山町三丁目鼈甲問屋伊豆屋喜兵衛と申しまして大した身代で御坐いました、其の伊豆屋の一人息子に與三郎と云ひ其頃二十二身持放蕩になりましては生れ附ての美男でありますから之が反つて害となり近所の娘子供を戀着せしり、或は柳橋の藝者が焦れ死に死んだの、往來を通る御殿女中鼈甲屋の店に居る息子の顔を見て即死をしたのと正送然んな事も有ります



いが横山町の今楽平と異名を取りました實に色男の巨魁と謂つべきで在り  
 ます、兩親は手の内の玉と頼りに寵愛を致し我儘勝手次第で有りますから  
 放蕩に身を持ぐつし、或時は品川に遊びて港に月を詠み、又は洲崎の雪景  
 色、芳原の櫻時と遊廓を浮れ歩行て居ります中に寶曆二年三月四日の事神  
 田川の旅館屋渡世下田屋と申します是も可なりの身代、其の息子で茂吉  
 と申し與三郎とは遊び仲間、年齢は二十四五に相成り折々此兩人相違立て  
 遊歩等に出でます、丁度此の四日の日も隅田の花見から芳原へ廻り眺め  
 の茶屋は面倒で往かぬから新規の茶屋から一層面白い樓へ往て見やうと未  
 だ一度も遊んだ事のない中萬宇屋へ登樓して與三郎は九重と云ふ花魁を  
 買ひ茂吉は雲井といふ第二等の花魁を買ひました然るに前縁陳べます運  
 り與三郎は美男で傾城殺し、藝者泣せ、娘即死と云ふ位ゐの前置のある好  
 男子で有りますから此の九重と云ふ女も少しく逆上た氣味で、されば閑居  
 も一層面白き事でも有りましたらう、是れに反して茂吉の方は氣障で生意氣

で色氣があつて狡猾で餘り金を遣はない吝嗇家、言ふ事に刺があると云ふ  
 ので雲井の心持では、九重さんのお客は大層良い人だが妾は何の因果で同  
 なじ二階に居て此な氣障な奴に出たらうと、此ふ思ひましたから茂吉は其  
 晩事の美事にふられました、川柳の悪口に「傾城にふられて歸る果報者」  
 と云ふ事があります、夫は道理に於ては然うでも有りませうが今日大切な  
 る金銀を費ひまして愉快を極めやうと思ふのに其の肝心の媚妓にふられて  
 かはう者と云ふ事は有りますまい、金を使つて一夜の春を買ひます以上  
 は何事も浮世の事を忘れて充分の快樂を盡さなければ詰らん者で御坐いま  
 す、去れば茂吉は夜曉方から騒ぎ立ちまして、女郎屋で振られた奴が起し  
 番と云ふ比喩の通り甚オイサア伊豆屋の息子さん、與三さんサア出掛やう  
 く、斯な家に居たつて仕様が無い、サア出掛やう」與三郎は面白く婦人  
 と夢を結んで居るので有りますから屏風の中から聲を掛けて茂吉さんま  
 だ早いヒヤアないか、マア緩くり歸るとしやうせ」敵娼の九重も丸雲井さ

んのお客さんちやア有んせんか、未だお早いのでありませう、寝くりと夜が曉てからお歸んおまし、お前はんは懸知らずだよ」茂吉は是を聞てムツと致して羨懸知らずだか懸知りたか知らねエが大切の商家の息子さんだ、遊びは遊び、歸る時は歸る時は歸る時、確と刻限を間違はずに歸らなければ乃公が年重で親達にすまねへ、サア與三さん宜い加減に歸らう」と聞て與三郎も歸らずば面倒と思ひ、不承く衣類を着換え、楊子を使つて居る處ろへ漸やく茶屋の使ひが來たれば與三郎スエくと茂吉と共に中高字を出でましたが九重は名残を惜み、雲井は重荷を下したやうな心持、大層な相違で御坐います、借諺々敷き事は言はず、明て五日の曉に芳原を出で日本堤を山谷へ來りせすると茂吉は憤氣で飲た昨夜の酒が未だ醒ませんから兎角に與三郎に何か苦情を並べる、けれども大人しい息子でありますから風の柳に受流して參る、彼是する中、山谷堀の澤瀉屋と云ふ馴染の船宿へ來ますと丁度今女房が表戸を明させて居る處ろオヤ離郎かと存じまし

たら伊豆屋さんの若旦那大層お早く、定めて昨夜も芳原で御坐んしたらう……若旦那御船で御坐いますか異然うサ屋根でも宜いが願はくは氣が晴れて宜いから小船を一艘出して貰いたい女ハイ異こまりました、若し一寸仙太郎や……仙太郎や」二階で男「オイ」と返事をしたのは船頭の仙太郎玄仙太や仕事だよ……兩國まで小船が一艘出るよ仙「オイ……」眠相な面をして仙太郎下へ降りて參る仙是はお客さんお出でなさい、大層お早うけすねえ玄仙太郎私の家の大事のお客さまだから能く氣を付けてお出で」仙太郎は是から河岸へ參つて小船を拵へ布團を二枚に焙火を持って參る、與三郎と茂吉は小船へ乗移り、船頭も舟へ乗込む澤瀉屋の女房何の爲にも成りませんが棧橋から小船の港板を取て玄御機嫌克う」と突出すも一つの愛嬌、山谷堀を離れて名にし負ふ隅田の大河に出で、夫に此程の雨で大川は餘程水が増して居ると見え波も高う御坐います、仙太郎は仙何卒旦那方へ、大人しく乗て居てお呉んなせエまし、些と水氣で御坐エまして其上に朝霧が降りて

先が些とも見えません、どうぞ神妙に乗てお呉んなせエまし」神田川の茂吉は酔て居りますから茂何を吐しやあがるんだ、神妙に乗るも大人しく乗れもあるものか、初めて船に乗アしねエ田舎者ぢやア無エよ、此う見えても江戸子のチヤキナキだ、利いた風な事を云はねエで黙つて舟を漕げ」  
與三郎は與「ア、茂吉さん然んな事を言はぬが宜いと宥める、船頭も聞かない氣の奴と見えて仙船を漕ぐのは此方の商賣、漕でる中は此方の船だ、お客さんぢやアあるが然う訝しな乗やうをされちやア船が漕げねエと云ふのだ、大人しく乗りなせエ茂ナニ……お客に對して巫山巖た事を云ふない仙ハ、お客が聞て呆れらア、飛脚見たやうな面をして……茂此の船頭イケ巫山巖た奴」と立上ちうとする、與三郎與「ア、茂吉さんお前小舟の船頭と喧嘩をしても仕様がな」と漸々押え付け、早や吾妻橋を越えて彼是れ左りに見えるが多田の薬師、右手は名におふ首尾の松の七八間手前まで来ると茂吉は餘まりたくくするから船頭も仙旦那少し氣を付けてお呉ん

なせエツたら、夫ぢやア船が漕ねエ、お前さん先刻田舎者ぢやア無エと云ひなすつたが小舟へは初めて乗んなすつた子と訝う冷評されて酒の上の愚い茂吉で御坐いますから茂此の船頭は先刻から黙つて居れば巫山巖た事を吐しやアがる」と突然立上つて與三郎の止めるも聞かず拳を固めて船頭に打て掛るを船頭もハツと思つたから楳を掴んだまゝヒツリと體を替すと、茂吉は我と我が足元が狂つたから名におふ水中へトプーン……、與三郎はハツと驚ろき流石の船頭も仙オヤ是は飛た事をした」と驚ろいたがけれど渡世柄として首尾の松の柵へ小船を舫ひまして仙旦那一寸待てお呉んない、私が探しますから」と素裸身になつて水中に飛入りました、與三郎は只だ一人で小船の中、何うなる事と心配して居ると頓て今の時間なれば十五分間餘經つて仙太郎は波間から小船へ乗り移つて仙オヤ怖い水瀬だ、水底はから遠州灘も及ばねエと思ふやうだ思ひました知れたか仙どうも知れせん奥知れないエ、夫は大變だ、船頭さん知れないと云つて此儘では

濟まない、那れも一家の立派な息子で、どうもユン殺しては親に濟まない  
 仙若し旦那濟む濟ないと云つてもどうも仕様が御座エません、私も命懸で  
 大抵心當りを探しましたが名にしおふ此の水瀬で御座エますから最う水代  
 の方へ疾くに出て仕舞たものでありませう、時に若旦那エ、幸い今朝は朝  
 霧が降て居て往き合ふ解も朝霧りの屋根船も摺れ違ふのも解りません、何  
 と今朝の始末は私共は固より黙つて居て和郎が何にも言なかつたら、百年  
 経つても知れる氣遣はありますまい、私共は山谷の澤渡屋へ歸つたら一人  
 りの客人は酔て居て吾妻橋から揚つたと既魔化しませう、和アは又た人に  
 聞かれたら芳原へは一途に往たが歸りは別々だと云つてお仕舞ひなされば  
 決して知れる譯は有りやせん、然うなさいまし奥どうも仕様が無いから夫  
 ぢやア然うしやうか」と茲に於て與三郎は心ならずも朋友一人を溺死させ  
 て噫々濟まん事と思つたが仙太郎の勤めに従ひ其まゝ小舟を急がせて御橋  
 へ参りました仙若旦那柳橋へお船が着きました、ぢやア先刻云つた通り私

の身體にも拘はる事で、和郎は大事の伊豆屋の若旦那様迂廻り云つてはど  
 んな事にならうも知れませんが夢にも云つちやア往ませんよ」と小聲で  
 云ふ、與三郎は色青ざめ奥どうか仙太郎さん、お頼み申す」と懐から金を  
 五兩取出して奥は少ないが仙太郎さん口止めだよ、極内々だから宜いか  
 よ仙へエ、是はどうも多分の御心付け、有難く御坐エますどうも誠に相濟  
 ません、御機嫌宜しう……」是から船は山谷へ歸り、與三郎は横山町の自  
 宅へ歸りいつもの事とて家中誰の氣にも付きません、扱夫から三四日経つ  
 と神田川の茂吉の家から種々問ひ合せに参りましたが與三郎は曖昧の事を  
 云つて置きました、其内に人の噂も七十五日彼は一月計り経ちます、與  
 三郎も當分は遊びにも出ず、往來を修業の坊主が通りましても悪く呼んで  
 布施を遣り、此う云ふ心の出るといふのも朋友茂吉を心の中でホンの追善、  
 時に彼は四月の上旬から致しまして與三郎の處ろへ彼の船頭の仙太郎が度  
 々呼出しては無心を云ふを身の錆ゆるに據るなく必らず十兩又は五兩と彼



が望みに任して金を持たして歸します、其の年の夏も経ち、秋も過ぎ、早や十月の下旬相も變らず度々来る仙太郎、與三郎は番頭の善右衛門と云ふ者に當三月五日の朝首尾の松の變死一件を密かに物語つて夫が爲に船頭せんとうの仙太郎に附込まれて無心を云はれるのであると云ふ此の情實を細かに話を致しましたから番頭の善右衛門も大きに嘆息をして言ひやうも和郎が那な破落戸のやうな奴に時々金を遣るのは不思議と思つて居ましたが、是は中々何年來るか極つた者ぢやア御坐いません、今度來たら私が掛合つて二十とか三十とか纏まつた金を出して替附の一本も取て再び最う來ないやうにするより外に仕様が御坐いません」と善右衛門も大層心配をして居りました、何う致したか夫つ切り仙太郎は來ない、其中に丁度十一月の中旬に成りますると與三郎は少し風邪氣でありますから宅へ風呂が立ちまするが薬研堀の角に良い薬湯があると申しますから與三郎は其の薬湯へ往うと思ひましてアラト夕方宅を出て入浴も畢つて丁度暮れ六つ頃今の六時過ぎ

湯の門口を出て横山町へ曲らうとすると大層積であります温泉の原湯を入れて参つた明燈の陰に照んで居た煩冠りを目深にした怪しい奴男ア、若し伊豆屋の若旦那與三さんぢやア御坐エませんか奥ハイ與三郎ですがお前は誰だエ」手拭ひを脱て男私ちで御坐エます奥オ一仙太郎どんか仙エへ與三さん仙太郎で御坐エやすよ、大層長エ湯ぢやア御坐エやせんか、先刻から此處に待つて居りやした」聞て與三郎吃驚りして、又候無心かとギョッリ胸に答へましたが畢竟仙太郎何やうの事を云ふか、

第二 席

仙若し與三さん又も此な事を云ふなア定めしお前さんも思だらう、私ナも來たかア御座エやせんか仕様が無エから参りやしたが、此う云ふ譯だ、一つ聞てお呉んなせエ、私ナに一人の母が在りやして此母が煩つてる、喚アは産後の日立が悪し、四才になる餓鬼が馬牌風で、十一にある惣領の奴を

或るお店の丁稚に出して置くと此奴が因果と抱瘡で家へ歸つて来る、何にも此にも仕方が無エんで、平常の様に博奕の資本や酒を飲んだり然らぬ事に費ふのぢやア御座エやせんが、金と云ふ愛嬌者に兼はれて貧乏神に取附かれ、仕様が無エから身は泣き、縁のあるお前さんの處へ御無心に來やしたが、最う是ッ切りです、チー若旦那眞正に是ッ切りだ、どうぞ百兩貸して下さいまし奥、エー百兩エ、仙若旦那何ですネエ、叱驚りするにやア及ばねエ、高が只九百兩斗り、お前さんの御身代で百兩や二百兩は氣に入つた乞食にもお遣んなせいでせう、何も驚ろくにやア及ばねエ、夫とも頭を振んなさるかエ」奥三郎も呆れ返つて仙太郎の顔を見て奥仙太郎さん夫はお前餘まりだ、此の三月の下旬から何だの彼だのと云つて来る度落更ら忌な顔も出來ず、少し宛でも貸してる金、積つて見れば七八十兩、繰るなく番頭の善右衛門にも譯を咄し、今度お前が來たら澤山の事は出來ないが二十か三十の金を上げて、是きり來ないと云ふ證據に判でも貸つてせうか

人に此事を云はないやうにしたいと實は相談中で有りました、夫はお前も困るからでも有らうが二十や三十の金なれば今夜中にもせうかしやうが、私は部屋住み息子様、百兩といふ大金が何うして今出來ませう、何うも仕方が無い愛嬌のないやうだが出來ないと云ふ返辭より外にやア何にも云ひますまい、夫で悪けりやアお前勝手になさいまし仙何だ、く、く、大層度胸の宜い事を云ひなされるねエ、出來ねエと云ふより返辭が無エ、夫で悪けりや勝手にしるとエ、勝手にしやう、オ！サ勝手にしやせうよ、マ！能く聞け、後學の爲だから言つて聞せるが先刻咄した乃公の困難慈しい娑婆に苦勞をして居るよりは傳馬町の御半内へ往けば半の方でも巾の利く男と疊一疊一國の領主二番役とか三番役とか役名が付き小舟乗も千石積の仙太郎、兄イとか親分とか立られるから娑婆より餘程半が宜いが扱悪い事を今しなけりやア往きてエと思つても往れねエのが御半内、仕方が無エから月番の町奉行所へ恐れながらと訴へ出て此の三月の五日の朝神田川の旗籠

り合になると面倒だ、何か女の出入だらうと然うたらうよ」と彼は果し  
 の無い處ろへ最前よりの様子そば黙つて居りました年輪四十ばかりに  
 相成る其の人物は醫者か擊劍家か但しは易卜者か何でも武士の浪人にて袖  
 の羽織に木綿の衣服一本差して湯歸りと見え淺黄の濡手拭を提げて兩人の  
 中へツツと這入て酒與三さんカエ興ヤ貴公は先生で御坐いますか酒ハイ何  
 か様子には知らないが一寸端緒を聞て見れば何しろお前の迷或筋、此所は往  
 來追々の人立ち、双方餘まり聞かれても能くない譯だらうから何しろ私の  
 家へ來なさい、悪いやうにはしませぬから」興三郎は地獄で佛と心得ま  
 して興先生どうぞ願ひます酒承知しました、ユノ對手の若い者、是は私が  
 大事な地主の息子だ、乃公の家はツイ伊豆屋の地面内一途に來て下さい、  
 話を付て遣りませうから」仙太郎はシロリと見て興三郎へ、貴公は何  
 う云ふ御身分か存じやせんが話を付ると被仰るからにやア何處までも往  
 ませうが詰り百兩といふ金が出るから夫を承知で口を聞くのでありませう

屋渡世下田屋茂吉といふ者を入水させた一條を明白に名乗て出で關へを受  
 て牢屋の住む、然うなれば今云ふ通り娑婆の苦難を見ずに済みやす、然う  
 と私には覺悟したけれども、然うなる時には據るなく其時の合客は横山町  
 の三丁目居附地主の龜甲屋萬兩分限の伊豆屋の息子と迷れつこの無エお前  
 の名前、喋舌て退けた曉にやアお前も牢屋の道連れだ、暗工所でお目に懸つ  
 て娑婆の話でもしやしようよ、マア然う思つてお出でなせエ……若旦那お  
 別れ申しやす」左も惡體に仙太郎、興三郎は涙ぐんで興ア、仙太郎さんお  
 前は情けない事を云ふ人だ私の弱身に附込んで言ひ度いままの口から出次  
 第どうぞ明日の朝まで……仙三郎だいく」と此兩人の問答より何時か聲高  
 に相成ると、所るは名におふ藥研堀横山町の横町ゆるぎ界々人と人立がし  
 て往來の見物口々に里何だくく〇エー何だか知らねエが、夜目で明と  
 は解らねエが好い男の息子風の人が破落戸上りと云ふやうな奴に籠られて  
 居らア、可愛想に誰か口でも聞てやれば宜いに」一人の奴が四止せく

子通オ一カ人の争いの中に這入り扱ひを入れるからは百兩だらうが千兩だらうが金づくには恐れあり、其氣で話をしませうツイ仙オ一然うですか、大分大仰の事を被仰いますす、宜うがすマア兎も角も御同道致しやせう」と先に立つたる件の浪人、跡に與三郎仙太郎横山町三丁目伊豆屋の裏まで這入つた家は手跡素讀の指南昔の手習師匠關其介と云ふ夫婦暮し、即ち件の浪人體の人の住家で御座います、元來此の人は武州川越の藩士に致して十年前朋友と争ひを生じ餘義なく人を傷め本藩を放逐され、夫婦で江戸へ来て伊豆屋の地面内を長々借受け彼方此方の童男童女を築り武部源藏然たる手習師匠、富めると云ふにはあらねども又た貧しきと云ふでもなく節儉廉直にして俗に清貧を樂しむと云ふ君子の風が有ると云つても宜い人で有りませ、且那お歸り遊ばせ、御連れで御座いますか其ア、地主の息子さんに最ラ一人りは御連の人だ、貴様は今の内入湯して来るが宜い」妻君は素直の人と見えて然うで御座いますか、夫ぢやア餘まり寒う御座いますから御

湯へ這入つて参りませう、與三さん御免なさいよ……お前か許しよ」と流石根が武家の妻、挨拶をして其夫の持ち歸つた溜手拭を直ぐに携へぶら提灯を提て表へ出る、主人の關其介は門口をヒキと締め火鉢の傍へ兩人を呼び寄せ其マ一全體何ういふ譯だい」と聞かれて與三郎仙太郎は前回に述べたる始末を殘らず物語るを聞終つたる其介は其成程然ういふ事か、是は仙太郎が宜い種をつかまへたと横山町三丁目へ金の生る木を植ゑた氣で時々無心に來ると云ふのも随分其方等の社會には有りうちの事だらうけれども與三郎さんの身に取ては大層の迷惑朋友一人が誤まつて入水をしたとて何も手を下して殺したと云ふでは無く真正の天下の法に照して見たから別段罪にも成るまいと思ふが何しろ夫れ丈けの事を三月から十一月まで内々にして置たといふが一つの誤り、併し今となつちやア仕方がない、其處で以て早い話が仙太郎さんお前百兩の金を取りさへすれば最う再びねだりに來なからうのう仙夫は先生何ば私ちが碌でなしでも然んな氣遣ひは御坐

エヤせん其夫ぢやア宜い、乃公が其の百兩立替へようから與三郎せんは家へ歸しても宜らう仙「エー夫は宜う御座エやすが玉を遊して仕舞つて跡でお前さん……其イヤ然んな卑怯の事は致さん、疲せても枯れても武士の浪人一旦口外した者は反口にはしない安心しろ仙「エ有り難う御座エやす其夫ぢやア與三郎せんお前は兩親も案じて居らう、何で此なに湯が長いかと思ふから家へ歸るが宜い、萬事此の良介が胸にあるから悪い様にはしない、何れ明朝咄すから此んな事を家へ歸つてお言ひでない奥有難う御座います、何分御座申す」と與三郎は良介先生に任せて安堵して家へ歸る跡に良介は其扱て仙太郎せん此んな茅屋へ住んで居ても浪人者だがせん災難があるまい物でも無い、其時には金より外に仕方はないと乃公も年來心懸て些とや小との貯へ金もある其内お前に立て替へて百兩渡す積りだが……仙有難う御座エやす、何分どうぞ其マア待なさい其金は今夜には無い、火事早い江戸の市、殊には此邊は盗人の多い處るお前のやうな連中が打交つて居

るから……仙先生是れは御挨拶で私ちは是れでも盗人ぢやア御座いません其マアサお前は盗人ではないが用心しなければ成んからそこで乃公の貯へ金は預けてある今から取りに行くのは如何にも難澁と云つて外の者では渡ささいから今夜は此うして呉れ、乃公の處るに汚ない布團が有るから是を引掛て明日の朝まで寝て朝になつたら乃公が行くから仙先生誠に御苦勞さまですが此な事は今夜の中に済して仕舞た方が宜いと思ひやすがどうか其金のある處ろまで御一途に願ひ度う御座いやす其夫は貴様の方でも些とも早く金が欲しからうが今夜は寒くて往ない、明日の朝にするが宜い仙全體先生其の金を預けてお置きなすつた先は何處で御座エやす其飯田町だ仙飯田町……譯アない先生どうか一つ是非御同道願ひたいもので其夫ぢやア仙太郎せん一途に行くかへ仙「エー参りやすとも、どうか何分願ひます、金を頂戴ば御禮に何か奢ります其馬鹿を云へ貴様達ちに何を者つて貰う奴があるものか夫ぢやアどうも仕方がない今つから出掛やう仙「エー御新造さんは

馬ナニ留守でも宜い盗人が道入ても此所には何も取られる物がないから安心だ」茲に於て關其介は戸欄から澁紙包を取出したる覺えの一瞬、十年以前世にある時に新調したと云ふ羅紗の合羽を上に着て無印の眞鍮の小田原提燈を點けて馬一丁出掛やう今しがた小便に往て見れば雪が霏々降てるやうだが仙太郎さん仕度にしたが明日にしたら何うだ然んな事を云はす今夜どうを願ひやす、カ一先生御提燈を持ちませう」と仙太郎は小田原提燈を下げ跡に續いた關其介横山町三丁目を出で、是より紺屋町を横切り今川橋を左りに見て神田皆川町へ掛り、護国院ヶ原院其頃の一番原へ差し掛りまする其中に雪は次第に強くなつて見る／＼四方銀世界と相成り、霰も淋しき此の道で往來途絶えて四方は只だ寂寥たり仙先生燧燭の掛換は御座エやせんか馬一丁で宜からうと思つて掛換は持たなかつた、宜らう雪明りで仙左様で御座エやす」是から雉子橋を横に見て九段坂の下から直ぐに飯田町へ差掛らんとする御堀端仙先生飯田町の何と云ふ家へ貴公の御金が預

けてあるのですへ馬ウム中阪—上の萬屋と云ふ大きな酒屋がある那れは武家の時分懸意にした家では是へ千兩ばかり預けてある仙へ、然うで御座エやすか、大したものですね」彼是れする中に關其介あたりを見ると云ふと犬の蔭さへ見えぬのを是れ幸いと後るから何にも云はず、抜打に油断をして居る仙太郎の右の肩先から切付けました仙、アお前之を殺す氣だな馬一丁罪の事ではあるが仕方がない、己れのやうな悪黨を生して置ては其民の妨げ天に代つて誅伐する覺悟をしる」と又も再び切り付けるを流石悪黨の仙太郎も二太刀あびて苦しみながら仙人殺し……」と聲揚るを足下に踏えて立たせもやらす仙太郎の止めを差し止りましたが因果應報遂々悪人は爰に滅亡致しました、關其介刀を雪にてスツパリ洗ひ鞘へをさめて伴の死骸は傍らの御堀へトブン……向も彼れに持たして置た眞鍮の小田原提燈、後の證據になつては往かんと拾つて袂へ入れ其儘横山町を指して立歸りました、其夜は妻にも程の宜い事を云つて前の始末は物語らず其翌朝に至つ

て關其介伊豆屋の家へ來り主人喜兵衛に面會して何様の事を云ふて是れより與三郎木更津行の御話に移ります

### 第三席

横山町三丁目鼈甲問屋伊豆屋喜兵衛、即ち與三郎の父、此の家の奥の隠れに主人と關其介の差向ひ密々話し、聞く度ごとに喜兵衛は大いに驚るる、話し畢つて後ちに又扱先生、貴所は武士の浪人で被爲入いますから、是はどまでの御奮發、悴の爲に昨夜のお働らき、親も及ばぬ今度の始末、有難う存じます、併し假りにも貴所は人殺し、此事露見いたした時には……其成程堅氣のお商人では然う思召して後思を御案じ下さるは御尤もで御坐います、が拙者はどうせ世捨れ人、十年以前川越で朋友一人を殺めどうで歸の付た身體でありますから昨夕人の爲めに悪人一人を切害せしとて滿更ら天の憎みもあるまい、萬々一露見をすれば夫までの事、決してお氣遣ひは

ない夫よりは今お咄し申した與三さんの身體、兎角神田川の茂吉の事といひ今度の始末と云ひ當分人の目に立たんやう拙者の考へではどうか田舎に御親類でもあるなれば其方へでも一年と半年お預けなされて置た方が宜しいかと存じます、が御主人お考へは付きませんか、喜兵衛ハムと小味を打て、其先生の仰せ御尤もで御坐います、丁度私に一人の舎弟が海を渡つて十三里、上總國木更津の仲町に監問屋を致して居ります、田舎の事ゆゑ傍らに質物などを取りまして豊かといふではないが可なりの身代になつて居ります、則ち監屋源右衛門と名乗ります、折々江戸へ商法の爲め出掛ましたには立寄り甥の與三郎にも些と田舎も保養がてら宜いから泊り掛けに来いとなどを申して悴を愛して居ります所、別に此の不始末は言はず當分何となく與三郎を木更津の監屋の家へ預けました方が宜しいかと存じます、其成程夫は丁度宜い好都合であります、夫ぢやア然うと御決心なさいませ、其ハイ夫を先生には又た追々私しも御禮も致すやうに……其イヤ然んな御

心配あつては却つて困ります只だ御子息さんの是から先を案じまして夫ゆゑ一寸お咄しに來ました」と何氣なく關頁介は己れの家に立廻り、跡に喜兵衛は獨り言、喜花は櫻木人は武士ア、薩張りとした者であるナア」是から與三郎を呼んで委細を話し、上總の木更津へ飛脚を出し、其の飛脚の口上に、與三郎男振りか些と宜過ぎて江戸へ置ては女が着纏くてせんな道まぢがあるまい者でもないから當分其の地へ預けると云ふ口上、又書面にも書いてあり、源右衛門大きに笑つて運成程此の木更津へ來れば對手がないから大丈夫、一刻も早く息子どんを遣すが宜いと誠に見事の返事が來ましたから茲に於て與三郎番頭を供に連れて旅の支度も其處へ上總國木更津を差して出立を致しました、只今されば越前廻りから端た錢で小蒸汽が通ひますから些か一晚で行く事の出来る處も其の頃はひでありますから中一日泊りまして翌日上總の木更津へ着しました源右衛門夫婦も我子のやうに與三郎を可愛がり運、運、與三郎親父の處ろから云つて遣したぞ餘り男

ぶりが好いから、娘子供や女郎や藝者が貴様に迷つて夫が爲めに外へは出せない、此まゝ一二年貴様が江戸に居れば兩國邊の人の女房まで戀れ死をする大變と親父が此方へ預けたが一年でも二年でも貴様が此地に居る間は對手の女といふ者がなく、化物見たやうな女ばかりだから辛抱が自然と出来るだらう」與三郎は笑ひながら與、エ伯父さん御申儀ばかり、親父の思ふはどでも逆正ありません、マア此方に居て學問でも致しませう」と是から二階の一室を與三郎の部屋と定め一生懸命學問をしたり、時々は店へ參つて帳簿を附たりするのを狭い處ろでありますから忽ち木更津中の評判となつて此頃藍屋の見世に坐つて居る息子さんはいゝ男ぢやア無いかと男さへも惚る位、況して近所の娘子供は、那んな男は此の木更津では見ることが出来ない何しろ往て見やう我れも往う彼れも來いと懇々藍屋の店へ通人連が入れ替り立替り覗きに來るといふ始末、主人の源右衛門は鼻高々と店に出でまして運、運、近所の姉さん達、私の處ろへ江戸の客を見に來た



のか、錢は取らないから緩くり見なせエ、お前方の後學の爲だ、併しお氣の毒だが惚れても無駄だよアソマア伯父さん忌の事をいつて……」と娘子供は顔を赤くして皆な馳出して行く、與三郎も己れを責められるのであり、悪い心持では御坐いません、斯くする中に昨日と去り今日と過ぎて九月十五日となりますと此の木更津の鎮守の神吾妻大權現と云ふ今日は其の神の祭禮でありまして前日から致して此の地一般の騒ぎ、尙は近郷近在より祭禮の當日は、躍り舞臺、練物等も出来田舎に稀な賑はいであります、抑も此の吾妻大權現と申す神は本跡は何で有りませうかといふに日本武尊の妾橘姫を祭りました神で御坐います、日本紀にも最行天皇の皇子日本武尊父帝に代つて東夷征伐の爲め此の地まで御發向に相成り東夷悉とく平らげ愈々此の浦邊から武藏國へ御渡海に相成らんとせし時に此地の民が日本武尊の御衣の袖に縫り、君の武徳を以て賊徒平定すと云へども君此處ると去り給へば再び賊徒が蜂起致し申すべし願はくは千萬年も君此處ると

去り給ふな、君去り給ふなと御袖に縫つて泣たといふ、後世此處るを君去らすの浦、君去らすの濱と唱へましたが何日か字音改たまり、木更津と唱へるやうになりました、扱日本武尊命は數多の兵士と共に海上遙かに順風に帆を揚げ玉ひて武藏を差して御渡海に相成ると如何なる事でありましたる俄かに激風起り己に尊の御船は海底の藻屑ともならんとせし時に橘姫、日本武尊に代つて身を犠牲となし玉へ海底に身を沈め給ひしに依つて龍神の感納をしましてか忽ち波平らかになり命の御船は難なく武藏國神奈川といふ處ろへ着致しました、是より此の邊を總名袖ヶ浦と稱へます、或は海の形ちが衣類の袖に似て居るからとも云ひ又たは橘姫の片袖が流れ付たと申します是より命は道を遙々武藏國、只今の本郷臺へ御上りに相成り此邊を總名吾妻山と稱へます、また此の山の名もない太古の事で御坐いました、迥かに小高き所に登り玉ひ東南に見える蒼々たる海上を見渡し玉ふに最も小さき港の見ゆるに彼の海上の難風に依つて最愛の妾橘姫を失はしめ今は

海底の藻屑と化したるならん、妻戀しやと流石の命も御衣の御袖に御涙を止め玉ひしにぞ供奉の人々命の御心を押置り、共に鏡の袖を濡らし、妻戀しやといふ御言葉を取て此の處ろを妻戀の坂と稱へ、又た妻戀の吐といふ此に一の神社が出来ました扱此方は上總の濱邊に於ては昨日の難風に命は御別状なけれども橘姫の入水し玉ひじ事を聞さ、海岸へ出で、空しく海上を打眺めて居る中に携へ玉ひたる處ろの槍扇の類ひ又は御衣裳の端などが波のまに／＼流れて参りましたを取上げて之を神體として命が宜ひし吾妻といふを取りて吾妻大權現といふ神を安置いたしました、即ち九月十五日が例年の祭禮で御坐います、斯る由緒ある貴とき神なれば此の祭禮の折には人々何れも奔走して土地に稀なる躍り家臺小車などを出だし又娘子供に躍りに迫々江戸から師匠をば雇ひ入れ、など致し江戸勝りと云はれるを樂しみに大層祭りには張込みまする處ろで御坐います、與三郎は藍屋の家に見居つて太鼓の音を聞て居りましたが與伯父さん私も今日はお祭りを一つ見

物に出掛て参つても宜しう御坐いますか、運夫は往くなれば往ても宜いが此の土地でこそ吾妻權現の祭りだがお前方杯は天下の御用祭と云ふ山王や神田明神の結構の祭りを見て居る目では此んな處ろの祭りは何でもないマア往ない方が宜い位ならう、運夫でもマア話の種だからとんない運夫だか往て見たう御坐います、運夫はどに思ふなら往て見なさい、併し成丈け立派の扮装をして往くが宜い」と是から藍屋の妻即ち伯母が世話をいたし當世様の派手小袖、唐摺摺ひですつかり美装して與三郎持物其他何一つ言ひ分のない拵へで與伯父さん往て来ます運夫が案内を……與、イエ最う昨日今日と半年も居りますから大體知れましたから一寸往て見て参ります」是から外へ出で、土地の賑いに押されて那方此方と見物いたして歩行くと成程伯父の云つた通り此の土地の者は江戸勝りと自慢するか知らんが與三郎は心の中に何だ難かトソソカンだと冷笑致して餘りの群衆でありますから雑沓の處ろを避けて往來の少なさうの處ろを撰て散歩して居ると向ふから来る

一群は何れも揃ひの拾を着て土地の若い衆と見へて七八人色氣もなくトヤ  
くとか何か戯言云ひながら来る中に一際目立つ山櫻、今を盛りと開き初め、  
咲きも残らず散りも初めぬといふ二十四五なる一人りの美人、派手な小袖  
に黒緇子の帯、實に男子を惱殺せしむるといふ中年増、すれ違ふと與三郎  
ツツとして心の中で思ひますには半年餘り此の地に居てツイツ見馴れぬ那  
の年増、全體那れは何だらうと思はず途中に立って見送り彼の婦人の方でも  
跡を振返つて物思はし氣に立留るを若い衆が若くは姐御浮れちやア往ませんせ、  
サア〜鶴屋の家へ往ませう、姐御茫然りしちやア往ません女アイユ、茫  
然りしやアしない、何だらう那の男は若くは那れは野判の藍屋の家に居る與三  
郎といふ江戸から来て居る客人です女然うかエ、夫ぢやア娘子供が騒ぎ立  
て居る藍屋へ江戸から来て居る好い男といふのは那れだち若くは姐御さん惚ちや  
ア往ませんせ、浮れちやア往ません女浮れた所ろが此んな婆アぢやア仕儀  
が無い」と云ふは是れ何者ぞ、是ぞ如何なる悪縁か茲に情を纏き留める抑

も與三郎が方向を過りまする原因の即ち横櫛のお登美で御坐います、此の  
お登美は元來江戸生れ不幸に逢つて親の爲めに深川仲町の藝妓務め一時美  
人の聞えも高く引手数多の身でありましたが五年以前の此の木更津の願役  
に其名を赤馬源左衛門、一年江戸へ遊びまして勝ち積けたる勝負の鉢先さ  
紀文大盛も三合を避ける勢ひで金にあかしてお登美を手に入れ故郷の木更  
津へ連れて戻り最初は妾にして置きましたがお登美が死しての後ち改めて、  
本妻に直し今年二十五で木更津第一の美人、流石の赤馬源左衛門も夫が爲  
めには鼻毛を糺られ常に涎の絶へないと云ふ程の尤物で御坐います、今日  
圖らずも途中に於て伊豆屋與三郎に逢つて茫然として若い者に連れられ本  
町の鶴屋といふ料理茶屋の二階へ上り女だてらに男を對手にドン〜酒宴  
を初めたが兎男與三郎の事忘れかねて居ります處ろへ思はず隣り坐敷の話  
し聲も若し若旦那さうでげす、此の祭りに些とは貴郎の御氣に入りました  
か、土地の者は大變に自慢をして居りますが御同前に江戸の祭りを見た目

には子一些とばかり……奥「親方然んな事をい前云ふものでは無い」と云ふ  
てる其の若旦那といふは彼の與三郎、今一人は髪結の江戸金といふ男、今  
日は仕事休みで祭りの見物に出掛た途中、計らす遇つた與三郎と一途に連れ  
立ち来た見へます實にや遠くて近きは男女の間柄、お登美は連れ若の  
者に向いまして登一才四郎公、松公……奥「エー、姐子何で御座います登一才  
妾が覗いて見たが先刻遇つた伊豆屋の息子といふ好男子が髪結の江戸金と  
一途に隣り坐敷へ来て居るよ、然うでげすア、へエー姉御早く御氣が付き  
ましたねエ、」源次といふ奴が通、ヤイ、早く氣が付く筈だ、姐御は先刻  
茫然として釵兒の落ちるも知らず見惚れて居たぢやア無エか、馬鹿をい  
いでない、親分の耳にでも聞へるとアノ甚助だから八ヶ敷い、けれど何  
日とは違ひ今日は祭りの日だから彼の江戸金へも一盃飲まして遣らうぢや  
ア無いか、傍らに海松食の松といふ是も子分の一人り、姉御江戸金に一盃  
飲ましてやつて息子に近附くといふ計畧かね、又た松公が然んな事を云ふ

よ、兎も角も親分は旅の留守、姐御の機嫌を損じては成らないから何  
しろ一つ呼んで来ませう」と子分が一人ヌツと往てがると唐紙を開け  
「オイ床場の親方金、是は赤馬の子分衆で御座いますか、松ナニ親分は姉御  
から上總九十九里の方へ往てまだ歸つて来ないが、姐御が今日祭りを見物に  
来て親方の居る事を知つて一口飲ませやうと云つて居るんで、どうか此方へ  
来て呉んなさらんか、金有難う御座います、御撥換には出ませうが私も今日  
は江戸の若旦那の御供をして来ので、どうか姐御へ宜しう松、オイ江戸金さ  
ん、お前江戸の若旦那とやらを一人りか残しましたは何だからお掃ひが無  
ければ一途にお連れましてはどうだ、エ、金、エ、若旦那は御迷惑で御座いませ  
う、肌が違ふから松、肌が違ふだらうが人間には違ひない、木更津の道樂者  
でも取て食はうとも云はず一口に呑うとも云いねエ、若しお客さん」與三  
郎も若爾り笑ひまして奥、まだお目には懸らぬが私も一緒にお隣りの御座  
敷へ参つても宜う御座います、江戸の若旦那の方が餘つ程開けてお出でな

さる「是から髪結の江戸金が與三郎を連れて隣り座敷へ来る、おとみは莞爾り笑つて登、オヤ金さん、能く今日は出掛だねエ金エ、姐御今日は天気で結構で御座います若旦那是は木更津で名の高い赤馬の親分の奥方で登美さんと被仰います、一寸姐御へお近附きに……奥左様で御座いますか、私は江戸から参つて居る與三郎と申す者で御座います、何分御心易く願ひます」おとみは莞爾り笑ひ登、お婿は伺つて居りましたがまだお目にも掛りませんで、先刻一寸お見掛け申して……奥左様私しも何處のお方かと思はず見惚れて居りましたが……登、ホンに私アはお口前が宜い事ねエ、見惚れて居たと被仰いますは沖の國で御座いませう奥、どう致してお笑くしい内儀さんと此う存じて居りましたが……」と之を聞て居る若い者一同「此つは願動になりさうたせ、海松食の松は登馬鹿を云ふな、姐御には赤馬の親分てエものがあらう」と兄イがつて他の者を制し、是より打快寛で酒宴に時を移しましたが遂にお登美と與三郎は如何に人目を忍びましたか何時か別な

き中になつたが是れ男女の情態己むを得ざる事でありませう、尤も之を周方ますのはお熊婆あといふ此の道に素早き婆アがあつて其のお熊の家を中窓といたしました事で御座います、猥褻の恐れがありますから此の邊は細かに辨じません、扱てお登美の良人の赤馬源左衛門は木更津を立て姉ヶ崎十九里の方から銚子から水戸領の方へ賭博の爲に出掛ましたが十一月下旬に立戻つて参りました、川柳にも「旅の留守家にも胡麻の蠅が付キ」と云ふ理言の通り何にも知らず立歸る赤馬源左衛門是より木更津の大騒動を惹起すのお咄し餘り長くなりませうから次席と致しませう

第四席

俠客赤馬源左衛門は六十日ふりに木更津の己れの家へ立戻りました、おとみは心中に面白からずと思ひましたがおとみは女才ない女でありませうから姿を見ると飛出だし親分何處へ往てお出なすつた、大層選いちやア有りませんか、

家の女房が待焦れて居るのも知らず浮々と面白き事をして夫で歸りが遅くなつたので有りませう、眞正に男といふものは邪慳のもので有りませう」と  
既に見やる目元の愛嬌赤馬魂ひを蕩かさんと致します、鬼を欺く伎客も  
忽ちちにデロリとなつて返博奕を打て歩行くのは乃公が家業、随分今まで  
三月も四月も家を明けて歸る事もあるが然んなに何も怨みがましく云ふ事  
はない、責様を除けて詰らない旅女郎や田舎稼ぎの藝者などに鼻毛を讀ま  
れる様な源左衛門ではない、決して心配には及ばねえ、歸り早々涙を拭し  
て怨みを云ふには及ばないからアア「機嫌を直すか宜い」と草鞋を脱いで  
足を洗ぎ上へ昇る、お登美は泣き笑ひ罵餘まり待惚れたから悲しいやら  
悔しいやらでツイ怨みを云ひましたが斯うして御無事のお顔を見ると嬉し  
くツて最う何にも言ひませせん、親分當分何處へも往くと聞きませんと返  
前が然んなに留守を氣にすれば最う何處へも往くエよ登さうぞ然うして下  
さう」と口では云へどお登美は心の中に、眞正に然んなに長く居られて耐

るものかと思つて居る、知らぬが佛の源左衛門子分の者に向つて吾ヤイ野  
郎ども汝等も留守中は色々世話であつた「一子分の海松杭の松蔵を初めと  
して一同言葉を描へまして松親分また御挨拶も申しませせん、姉御が嫉氣で  
泣たり笑つたりしてお出なさるから其の痴話の中へ私等が色氣もなく口  
を出すも無遠慮と控へて居りやしたが先づ御無事で御目出度う御坐います  
跡から大勢の子分子登御目出度う御坐り升進久しぶりで故郷へ歸つたから  
今日一杯汝等にも飲ましてやらう子登夫はどうも有難う御坐り升進  
杭の松蔵は松親分今歸の貝が鳴りました最う湯が出来たさうで御坐ります  
から何と一風呂這入て勞れを休めちやア何うで御坐ります、脊中でも洗つ  
て上げやせう然うか最う湯が出来たか夫ぢやア松一途に往て呉れ、夫か  
ら赤馬源左衛門湯衣を下にきてらを着て松蔵を連れて洗湯へ出掛ました(因  
みに申す、其の頃は木更津もまだ田舎でありましたから午前はまだ洗湯は  
出来ませせん、愈々出来たといふ知らせる竹罾を吹きます、今も尚ほ片田舎

には此の風が残つて居ります、下情を知らぬ看客怪しみ玉ふべからず、お登美は海松杭の松蔵と一寸顔を見合せ目で知らせる、松蔵は承知したといふ風をして、親分の跡に尾て松の湯といふ洗湯へ参りました、湯屋の亭主は幸、や、是は親分お歸りで御坐いますか、何日お歸り………送、今、つて来た、ア、然うで御坐いますか、御相變らず御繁昌で御目出度い、幸、有難う御坐います、お蔭さまで追々御客様も殖へまして御坐います、何、伺しる結構だ、ア、コレ、お徳や親分がお出でなすつた、湯屋の女房とくとく、オヤ親分さんお歸んなさい、お、ア、暫らく………支度は宜いか、幸、宜う御坐います、是から風呂へ道入て宜い心持に子分の松蔵に脊中を洗はして居る中に、親分、ア、ウ、ン、松蔵も居ませんから一寸話をします、が、何だ、松蔵、即決して私、の云ふ事を疑つちやア往ません、送、訝しな事を云ふぢやア無エか、何も乃公が疑々る氣遣へは無エ、松、夫ぢやアお話し申しますがお前さんが可愛がる大事のお登美さんには虫が付きましたせ、赤馬は之を聞て、送、ナニおとみに虫が付たと、夫は

何といふ虫が付た、此、だか、蜂、だか、蚊、だか、蚤、だか、虱、だか、知らぬ、エ、が、目に餘るほどの虫が付て居るなら松、汝取て選つて呉れたつて宜いぢやア無エか、松、親分然うませつ返しちやア往やせん、虫といふのは如才も無エ、虫、御には色男が就て居やす、送、エ、ア、おとみに松、ハ、イ、お留守の中に金指の付た色男が出来やしたよ、一度は驚ろいたが源左衛門苦笑ひいたして、送、松、鹿、な事を言へ、エ、マ、も宜い加減に摺て置け、是が外の女なれば亭主の留守に男を引入れ道に背いた事も仕やうがお登美に限つちやア大丈夫だ、乃公が受合ふ、何故といふに那のおとみは江戸藝者では随分鳴らした女、就、中、深、川、七、堀、所、で、音、にも、聞、え、た、横、櫛、お、登、美、其、や、藝、者、の、勤、め、だ、か、ら、些、と、や、小、と、浮、氣、も、し、た、ら、う、が、此、の、赤、馬、の、妾、と、な、り、足、掛、五、年、本、妻、に、直、し、是、ま、で、送、を、思、な、麻、も、耳、に、入、ら、ず、乃、公、の、留、守、に、は、男、猫、で、も、膝、に、は、載、せ、ぬ、と、立、派、に、乃、公、に、も、言、ひ、張、て、汝、も、知、つ、て、居、る、通、り、先、刻、歸、つ、て、來、る、が、早、い、か、何、に、も、言、は、ず、怨、み、の、縁、言、畢、竟、亭、主、を、思、ふ、か、ら、六、十、日、が、千、年、も、會、は、ぬ、や、う、な、氣、が、す、る、か、ら、乃、公、に、

對して愚痴の數々、留守に男を引摺り込み、悪い事をして居ながら何で乃  
公に愚痴を言はうぞ、マア此等から考へて見ても分る、夫ア汝の言付口此  
の赤馬は信用しないてゐるエ登親分其つア悪い事を云ひました、夫ぢやア此  
の海松杭が胡摩摺りのやうになりすから最う止しませう、成程鼻毛を延  
してお出なさるお前だから然う思ふは尤も至極、私ナが悪かつた、返ヤイ  
く此の野野野な事をいふな、鼻毛を延して居るとは何だ馬エー親分鼻毛  
を延ばしてお出なさるから然う云ふのです、他人なればイヤ知らず親分子  
分の間柄で私ナは悔しひから云ふので……海松夫はど汝が云ふなればさん  
ざら證のない事はあゝめエがシテ對手は誰だエ登止しやせうと親分、何を  
いつてもお前さんは姐御にだらけてお出なさるから、真正に聞されぬ日  
には詰らない罪作りだ返イヤ然うでよい弘法にも筆の誤り君子の一失とい  
ふ事があると何日やら説法で聞たがお登美と雖も心得違ひがないとも云  
はれん、汝の言葉を疑ぐりやアしねエから真正の事を云つて聞かして呉れ

松夫ぢやア親分申します、お前さん御存じでせう二三年跡から此の木更津  
に來て居る藍屋源右衛門の處ろの客人で江戸で有名の好男子横山町の魁甲  
屋とやらの息子今栗平の與三郎那れが姐御の虫ですよ返エー、成程色の生  
ッ白い女を殺しさうな那の與三郎どうしてお登美と……登サア親分丁度御  
留守の六月の中旬吾妻權現の祭りの當日遠くて近いが男女の人情、互ひに  
見染た縁の端、何處を何うしたか那方此方で出遇ひをして、私ナ等が家へ  
往ねエ其の時は随分麻間へ引摺り込み巫山戯た真似もした様子、心は羨え  
て堪らねエが若し二人に悟られて互ひに手を取り道行と玉を失して仕舞つ  
ちやアお前さんがお歸んなすつてから私ナを初め子分の者が申譯が御坐エ  
ませんから胸を摩つてお歸りを待て居ましたよ返然うか、宜し是から一分  
別なくちやア成らねエ、松何しろ湯氣に上るから風呂を出てからの事にし  
やう」と赤馬は尙ほ眞赤に相成りましたから紅と變じ海松杭の松と兩人水  
舟の處で頭から水をザブ／＼掛て是から風呂を出て、途中ながら松原と何



か密々隠やいで素振りにも見せず源左衛門は程なく歸る我が家、お登美は酒肴の支度をして心に濟ぬが顔にも出ださず親分大層遅いお湯で在りましたねエ、松さん大きに御苦勞、カアお前も此處へ来て親分と一盃の飲り親分今日はお氣に叶つた肴が有りませんよ再イヤお登美折角汝の待遇ゆゑ一盃飲うが一寸此處へ來い登ハイ何の用エ再先刻歸る早々乃公が途中で何か女でも拵らへて夫で歸りが遅いやうに汝の城氣は有難へが併し長脇差の乃公の世渡り歸るかと思へば相撲取りと同じ事で宜い話があれば又た出掛なければ成らねエが今風呂で浴合つた姉ヶ崎の藤助が丁度宜い處で親分に遇つたが是から午後與助船に乗て江戸の小網町へ往て江戸に思ひの外宜いのが出来てるから一儲け儲け、丁度時候は顔見世時三芝居が大入だから芝居でも見て十日程江戸に遊んで來やうから親分一途に往かねエかと藤助に誘はれてツイブツと往く氣になつた供は差づめ松の野郎、此奴も江戸を見てエといふから一寸一盃やつたらば乃公は是から江戸へ往て來るから

おとみ最う十日ほど辛抱して呉れる」と云はれてお登美は心中に天の助け嬉しい事だと思つたが乃は色にも現はさず美しくい顔に八の字を寄せて赤馬をシツと見詰めて涙をポロリと翻して親分澤山然うかしなさいよ、何ば女房が古くなり家に居るのが思たといつて二月は家々を明け歸つて來ると間もなく朋友に誘はれたとか何とか云ふて江戸へ往て仕舞ふとは眞正にお前さんは邪慳でありますよ女房の心も知らず、長しやお交際で江戸へ往くにした處ろが直ぐに往かずと宜いぢやア有りませんか、隣りの髪結の娘が浚つて居る那の淨瑠璃而も太閤記の十段目初菊が怨みの縁言せめて今宵はといふは女の情親分酷いよお前さんは「海松杭の松は傍らで登姐御の初菊は粹な年増の初菊だが親分の十次郎は受取れないねエ再イヤ松何を吐しやアがるんだ、おとみマアく宜いワ、然んな事を言はずとも、マア江戸を見物して緩くり歸つて咄をしやう登親分一途に妾を連れてワお呉んなさいナ再イヤ朋友が一途だから然んな譯にも往かいマア留守をして居るよ

と云はれてお登美は最う大丈夫と思ふ中に赤馬は酒を飲んで是从から彼れ是れ次類などを取出させ支度をして留守中小遣ひの金を預け松も同じく旅支度長刀を腰に打込んで丁度其の日の八ッ下り此の木更津の家を出で薩かに濱邊へ往た様子、茲でお登美は安心してホッと一息胸を展つて獨り官軍折角與三さんと言ひ交し未だ相談も就かぬ中歸つて来た那の赤馬月に霞雲花に風と思つた處ろへ又た候江戸見物に出掛るとはホソに粋な藤助さん能く誘つて呉れたねエ、殊に海松杭の松蔵は風の悪い奴であるから二人の様子も悟つて居るから時々金で口留めをしマア安心と思つて居たが何かに付て氣障な奴、彼奴も一途に供をして江戸へ往て仕舞ふとは二人の中には月下氷人、若し然うでもない與三さんが亭主の歸つたを知らずして浮々遊びにでも来ると悪いからお熊婆アに留めて置たがドレ又たお太鼓が運入たら一筆書いておぼさんに使いを頼んで持たしてやらう、思ふ亭主に引替へ今夜與三さんと積る話をするが娛しみ、妾も風呂へでも往て来やう」とい

ッく喜こよお登美與三郎戀は曲者其の身の仇、是で與三郎の身の上の一大事とは知らずして贈る書面に待つ返事今夜の遇ふ瀬を楽しみに日の暮るゝのを待て居りました

第五席

却説藍屋の店には與三郎が帳場を預かり茫然と夕暮、邊りに人の居ぬを幸ひ、獨言亭主のあるを知りながら不圖した事で那の女に馴染んだが先刻お熊婆アの知らせには突然亭主が歸つたから迂闊り来ちやア往なへと知らせに大きに落膽したが又今遣した那の手紙、歸る間も無く朋友に誘ひ出されて江戸行きと頼しい首尾になりましたと知らせ遣して是非今晚遇つて話がしたいと云ふ事、兎も角徐々支度をして出掛やうか」と帳場を仕舞つて與三郎羽織を引掛け出やうとする、伯父の藍屋源右衛門與三郎やお前何處へ往なさる興伯父さん一寸髮結の江戸金と約束がしてありますから將

茶を差に往て参ります。夫ア夜遊びに出るのも若い者の事だから決して野暮は言はないが、聚茶も宜い加減にしたら宜ろう、尤も此の木更津に来て二年越しお前達の耳には聞く程の寄席もなし又見る程の芝居もなし何か就けて不自由の田舎、江戸で馴染の那の髪結談が合つて遊びに往くも悪い事は無からうが此頃世間で訝な風聞、マア今夜は宜いが餘まり夜は出掛ない方が宜ろうよ、然うして今夜は成丈け早く歸つて来なさいよ、宜いかへ」と何氣なく云ふ伯父の意見も是を親身の問柄、逆せ上つて居る奥三郎耳にも留めずソコ、此家を出て、裏町傳ひおとみの家へ忍び込みました、流石年増のおとみの手段、二三人の子分には金を與へて飲みに出し表の方の締りをして裏口一方明けて置き、奥三を引入れ己れの居間、積る話や痴話口説、冬の夜の長きをも悔ひ真夜中頃、突然裏口がらりと開け、隠り込んだる大の男、最早や逃るに道も無く、ソツと驚ろく男女二人、別人ならぬ其人は是ぞ赤馬源左衛門、積り子分の海松杭松、お登美は此時度胸を据

へ登親分マア濟まない事をしました、奥三さん早くお逃なさいよ」言はれて震へる奥三郎麻衣のまゝで駈出すを赤野郎逃やうたつて逃がさうか、松其野郎を……合點で御座ます」と海松杭の松が節立腕を以て最も細弱き奥三郎の利腕取て拾倒す、赤馬は聲を掛け赤縛つて仕舞へ合點だ」と準備の細繩取出し奥御免なさい」と誤まる奴を情用捨も荒々しく傍への柱へくしし付ける、おとみは此時逃げもやらす麻衣のまゝで蓋かしき前を合はせて躊躇り登親分最う此うなつちやア仕方が無い、貴郎の顔を見ました、お留守の中に奥三さんを引込んだに違ひない、併し向ふは迷或がるを女の方から無理耶理に引摺込んだ、妾の科決して奥三さんに罪はないどうぞ親分スッパリと妾を殺して此の方を助けて上げて下さいまし、御慈悲であります親分」と兩手を合せるお登美の風情、セ、ヲ笑つた源左衛門、何を吐しやアがる、密通をしがやつて己一人で罪を被て男の方に罪は無い助けてやつて呉れるたア、エー忌エましい事を吐しやアがるナ、夫

はど密夫が可愛いなら己が目前の面當に今宜い事をしてやるから何にも言はず黙つて見て居る、今野郎を先きへ懸り殺し夫から己が身のをさまりは皆な赤馬が胸にある、乃公のする事見て居る」と腰に帯せし長脇差、メヲリと引抜く物凄サ、何うなる事とお登美の心配赤馬は件の一刀を縛つてあつた奥三郎の目の前へ突付て運ヤイ野郎、成程好い男だあア、見れば見るほど楽平とは能く云つた汝が面體、是ぢやアお登美を迷はしたは尤もだ、ヤイお登美見る、此の野郎の目付の可愛らしさ、是で汝迷つたか」と情用捨も荒くれ男、無惨や奥三郎の右の目元を頬へ掛て三寸ばかり、刀の突先で切り下る、アツと驚ろく奥三郎鮮血滾々と迷はしるを運此の口元の可愛い所で殺し文句を並べたか」と口の廻りを一二寸運此の耳で口説き聞いたか」と耳の附根を一二寸懸り切りに切り阿なみ、美男の姿は忽ち紅を被つた人の如く、苦痛に堪へ兼ね奥三郎ア、ユレ赤馬親分間夫をしたは私に誤り殺されても仕方がないがお前も上總木更津で人に知られた大親分

つて置いて、懸切り一寸二寸と阿なますと男らしくサツパリと一思ひに殺して下さう、せめての慈悲に源左衛門殿どうぞ一思ひに殺して下さう」と云ふを赤馬は聞き取て運何だ一寸試し五分試しは苦痛から一思ひに殺して呉れと……どうで息の根を留るんだが一思ひに殺しちやア其方の都合は宜らうが此方の都合が些々と悪い、まだくく此んな事ちやア止られねエ、暗松藏然うで御坐エやすとも、是からは身體中チユイくチユイく傷を付け急所を除けて苦しませ、酒の肴に、チー親分然うよ、野郎の苦しむ體を見て一盃飲むのも一興だヤイ、お登美面ア上る、どうだ死ぬはど惚れた色男も此の顔色ちやア治まるゆエ、紅で書いた達磨も同様、おとみ見る耳ハイ……」とお登美は此時に至りまして運奥三さん、お前の苦しむのを見て妾一人りが存命の心はさらくない、妾も是から死にますからどうぞ往く處ろは同じ處ろへ往て下さう」と現在目の前に奥三郎の苦しむを見て氣の毒さにお登美是より赤馬の隙を見てヒヨリと庭に飛出たすを運ソレ

遣ては」と海松杭が跡追掛る、其中に切戸を明けて裏町傳へ濱手をさして  
バク／＼と海松藏逃すな合點だ」と松藏は尻引からけて追掛る、一生  
懸命おとみは風を生じた如くに飛出し、口には念佛を唱へ、與三さんと一  
緒に那んな姿になつて死んだなら冥土へ往て閻魔の魔の調へも面倒だらう  
から一層羨しは此の海へ飛込んで死なう」と人なき濱邊へ來りました打  
寄する處ろの白浪の中へ身を躍らしてトブーン、一潮煙りと踏共に遙かに  
沖中へ引かれてお登美の影は忽ちに見えずなりたり、海松杭の松藏は息噤  
切て波打際までは飛び來たが間に合はず、今一足早かつたら……エー  
残念の事をした、親分に言譯がない、捨賣にしても百兩の代物も無けれ  
ば往掛けの駄賃に乃公が一番手込みをして日頃の思ひを晴す處ろを何しろ  
惜い事をした」と口惜がつたが仕方がなく再び赤馬の家に引歸し元の坐  
敷へ上つて來ると四苦八苦斷末間の苦しみにて與三郎は奥ウム、ウム  
……といふ迂鳴聲最う虫の息、血刀を疊へ突通し大丸座を掻いて煙草くゆ

らせ源左衛門松の歸つたをじろりと見て赤松松へエ赤女はどうした松親分  
濟みませんが、一生懸命追掛たが海の深みへ飛込ました何だと、夫ぢや  
ア女郎は入水したか、野郎を存分に鞭り殺し苦しむ體を見物させ味で宿願  
へ叩き賣らうと汚ねエ仕事もホンの腹癒せ充分にやらうと思つたに氣の短  
けい女ツ子だなア、マ、松仕方がねエ、併し相手の野郎の體を見るい松藏  
程親分宜い體で御坐エやすねエ、姐御を誘かしやアがつて好の事をしやア  
がつた其曉、此の體は拜めない體で御坐エやすねエ赤鬼も角今までは愚痴  
を云つて居やがつたが面から身體急所を除けて五十餘ヶ所チユイ／＼十  
イ／＼切てやつたから最う熱も覺めたと見え囁言も止んで仕舞つた、ヤイ  
野郎今で命の切迫際、此の赤馬が此世の引導渡して遣らう、今海松杭の松  
藏が云つた通り女の行衛もしら浪の底の水尻となるからは望みの通り六道  
の修羅の街へ道行筋の山の腰掛茶屋枕園子が澁茶のとぎかがらの杖に蓮  
華の笠、冥土の旅に餞別にどう延鐵でも渡してやらう」と立上つた赤馬が

已に留めを刺さうとすると思根越しに聲あつて「モシ親分暫らく」と入り来りたる者こそあれ、是れ何者か第六席に説きませう

第六席

赤馬は聲を掛け誰だ、何か用か、誰だ、モシ親分私で御坐えます、少しお待ちなすつてお呉んなせエ」と縁側へ飛上つたは隣家に住み髪結の江戸金太、ヤアお前は床場の親方金左様で、夜遊びから歸り掛け、今家へ進入らうとしたら妙な聲が聞へるから夫でお宅へ飛込みやしたがヤア親分お氣を落付て下せエやし」海松杭の松が傍邊から登親分此の江戸金も日頃は隣家づからだか此奴も矢ッ張り與三の野郎と仲宜しで事に據たら姐御を周旋した仲間の内かも知れやせん、此うなれば破れかぶれ、親分此奴もハッしてお仕舞いなせいまし、赤馬之を聞て赤成程松の云ふ通り飛で火に入る夏の虫、劍の中を永知で来たか、與三郎の朋友と聞いちやアどうも用捨はならねエ

のう、ヤイ江戸金覺悟をしる」江戸金の前へ突出す赤馬の血刀、此時江戸金少しも願がず金、モシ親分此の上總にて名の高エ赤馬親分とも云はれる人が罪も報ひも無エ私チを譯も聞かずに殺すのかへ、嚇しに見せる血刀ならマア少しお待ちなせエ、成程與三さんは江戸での馴染、不圖した事で此地へ来て始終頭は結いやすが森夫の周旋までは致しやせん、大層の事をいふやうだが剃刀一挺持ち歩行日本中を渡つて暮せる私の身置、お密に對つて世辭追従は弱い稼業の當然、横に曲つた事はしやせん、今夜の譯を知つたゆゑ留めに来たのは世間の交際、見ても居られぬ此場始末、留めを刺して仕舞つたら懸一文にもなりません、息のある中監屋へ持込み金にするのが當世だ、長脇差でも俠客でも荒いばかりが能ではない、子分の手合も同なし様に傍で海松杭の松藏さんだ了簡が若からうせ「松は馬へ、ン飛だ一段目の由良之助だ」赤馬は始終之を聞き赤成程江戸金早まつた、乃公の腹切は許して呉んなせエ、何ば姦通した野郎でも殺して仕舞へば人殺し、夫

よりお前の云ふ通り……松物置に俵があるから中へ桐油の古いのを敷いて  
此へ持て来い松親分何しするんで赤何うしても宜いから持て来いと云  
ふ事よ」と言い附られて松蔵が俵に古桐油を持って来る赤俵の中へ桐油をビ  
ツヨリ敷いて此の野郎を中へ押込め松「エー此の半死人を赤何うと松何うす  
るんです「何うしても宜いから入れる」虫の息ある與三郎の血だらけにな  
つてる身體をば俵の中に押込まする松親分是から赤大義ながら汝も最初ッ  
からの悪り合ひ、骨折は充分還るから公乃と一途に藍屋の家へ往て呉れる  
松之を背負てかへ赤何うと松此つア辛いねエ赤馬圖く云ふなら」退が親  
分の言附け仕方がないから松蔵が不承く「に彼の血だらけの俵を背負い  
松ア、氣味が悪い、ボツリく生温たかい血が身體へ垂れる心持の悪さ、  
オ一耐らねエ赤我慢しるく」赤馬は血刀を押し、箱へ納り、羽織を引  
掛け淨手鉢にて手を洗ひ赤江戸金さんお前の庇蔭で分別が付きやした余親  
分然うして下さりやア何よりの善行、逆も助からねエ此の人の命だがせり

て伯父御の手許にて臨終をさせるがまだしも親分お前さんの功德にもなり  
ますから早く往て話を付けてお遣んなさい」と胸に一物江戸金が涙を拭い  
て己れの家へ立歸つたが是ぞ江戸ツ子の氣性であります此方は濱手町藍屋  
の家をトクく、店の者が寐入鼻、中仕切の處るに寝て居た主人の源右  
衛門源ハイク、ユノ店の者や何公か門をお叩きなさるじやアないか若  
い」と若い者が目を覺して若何方様で御座います」源右衛門が逆能くお名  
前をお聞申してから門口を開なよ若異りました……エー何方様で御座いま  
す……何方で赤ハイク、エー藍玉の荷が着きましたして御座います、江戸から廻  
しになりました阿波の徳島の藍玉の荷が着きましたからどうぞお店をお開  
なすつて下さいませし若ハア然うで御座いますか、旦那江戸廻しの藍玉の荷  
が着たさうで御座います赤ア、然うか」と家業柄奥より主人源右衛門も起  
出で、通熾燭を點るく、大きに御苦勞さま」門口を明るを待てヌイト入  
り来る源左衛門、續く海松杭松蔵が血潮の満たる俵を背負い、店へドツカ

ト腰を掛る、驚るく主人に若い者吾ア此の俵の中から江戸の藍玉が血だらけになつて……」云ふを主人の源右衛門一目見て驚ろいたが腹を摩つて赤何方かと思ひましたら赤馬親分でありましたか赤ハハ旦那一つ土地に居りまして百年年中旅稼ぎ、家に居るなア稀な私チ、掛運つてお目に掛りません、御商賣が御繁昌で御日出度う存じやすシテ旦那夜が更けて居やすから藍荷が着たと云つて偽してお起し申したは是は私チが偽りだ實は此ういふ藍玉が不斗した事で手に入りやしたがお前さんの感より外に往ちやア用の無エ品、夫で態々持て來やした實に置くといつたらは又た受出すといふ事もありませうが鼠ッ食い、虫ッ食ひになりさうな品は利が嵩むなどいふ愛いもあるから一層ハツツリ賣こかしてエものだが旦那此の俵積りの藍玉を百兩でお店へ賣てエが奇麗に買ちやア呉んなさらねエか」源右衛門は之を聞き適宜う御坐います、此の代物は成程外へお持なすつても買人もなければ質にも取るまい、是は私がお買ひませうが、少しお待ち下さいませ

せ、ユレお茶でも上る、オハ然うか最うお茶もあるまいな」と奥の間から源右衛門取出す百兩、赤馬の前へ据ゑました適左様なれば親分數檢ためてお受取を赤ハハ檢ためずともお店の事、間違ひもありませうまい確かに受取やして御坐エやす、夫ぢやア旦那俵のままでお渡し申します、確かにお受取下せエまし適併し親分是から先きに若し此の藍玉を萬々一手入をして物の役に立つやうにしました時に入用だから何ぞといつて……赤ア、若し藍屋の御主人、私チも赤馬源左衛門子供の約束ぢやアあるめえし、欲くなつたから又戻せと然んな卑怯は申しやせん、貴所の方で生して使ふも殺して使ふも御勝手次第ア今夜は是で、お暇を致しやせう、サア松出掛やう運是は夜中お茶さへも差上ません赤イヤ大きにお露ましろ」と言はず語らず男と男、言葉固めて赤馬は表へ出る、海松杭の松が松親分旨まぐ往きましたねエ赤旨くもねエが江戸金が短氣は損氣と意見をして留めを刺して仕舞へば第一文にもなるめエと言はれたばかりで少なくも百兩で賣こかした



が汚れた面の此の赤馬最う此の土地にも居られぬ、松明日は高飛をしな  
けりやアなるめエ、持た家財も二足三文、汚れた家を叩き賣り、汝を連れ  
て膝栗毛松一つ氣を變へやう茲エ、其の方が宜う御座エませう、親分人に  
顔を見せるのもお前さんも辛からう、夫ぢやア然う」と其の翌日頃、木更  
津の土地を離れて行衛知らず、之を長脇差刺客の身の上では土地を賣ると  
申します、即ち影を隠すといふ事、話變つて藍屋家では家中俄かに目を覺  
し騒ぎ立るを押鎖め、徐かに中庭へ布團を敷き、俵の中より引出すと轉げ  
出したる興三郎身體四十八ヶ所の創、幸ひと急所を除けて切られたが見る  
も無惨の其の有様、藍屋の妻即ち興三郎の伯母はツナク震へ、物も手に  
付ません、源右衛門は涙を翻し逆背に意見を聞かしたる虫が知らせて云つ  
た事此程より確とは事も分らぬと人の噂に對手が悪い藍屋の客人は似寄  
の縁ではあるけれども長脇差の女房ぢやア間違ひにならなければ宜いがと  
夫と聞せる人の口、聞ければ俄に夜遊びを留めたら水の出鼻の若い者無分

別でも出してはと思ひ遣りがツイ過ぎて今夜限りと免したが此方の誤り、  
野暮だ不粹だと云はれても家を出さずに置たなら此な事にもなるまいに情  
けない姿になつた」と勇氣に見へても老の愚知、家内の者も口々に赤馬の  
惨酷を惜み興三郎の不仕合せを悲しみましたが其頃富國佐賀の城主安部山  
城守の藩士にて和蘭陀流の名醫柳寛齋といふ此の醫者を招きますと早駕  
籠にて來つて門弟立會の上先づ創を檢たり残らず洗い深い處は針で縫ひ  
浅い處は鎗膏薬に兩三日は附切りで介抱致し七日ばかり経つと漸々粥湯  
が喉咽へ通る、モ一ぱたと醫者の言葉に力付き夫より跡は半月餘り最早や  
醫者も手を引きました、此の翌梅では大丈夫と聞て一同安心して此時江戸  
へ知らせました、興三郎事少々間違ひを致し創を受ましたが其の後は是々  
の醫者に掛て全快致しました、御安堵下さい、さのみ心配無之やうにと此  
う申して遣はしました、扱て興三郎も漸やう人心地が付て後ち伯父に對す  
る不幸の罪、此の身の科を謝しまして夢現幻で口の中で陳べて居ました

相手の女は海へ飛込み行衛知れず、又た己れは赤馬に已に留めを刺される處ろへ江戸金が来て此くいつて之を止め此の身體を金に換へよと赤馬に勸めたは全く留めをさへせぬ了簡、シテ見れば我が身があへなき命を存らへたも一ツは伯父さんの御丹誠又か金の威光、二ツには江戸金が赤馬を救き助けて呉れたのであるからどうぞ江戸金にお禮をして下さいと初めて聞た藍屋源右衛門尤もの事だと、江戸金に厚き禮などを贈り茲に於て簡に乘せ變る姿の與三郎江戸の兩親も屢々遇いたがるゆる差かしながら郷里へ歸る、廻る因果の車の端、死んだと思つた横楡おとみ玄治屋にて出合する此の隣談の三のさき第七席に解きませう

第七席

伊豆屋の與三郎は上總木更津に於て俠客赤馬の爲に非常に負傷を致し既に一命にも及ぶべきを良醫の手當と云ひ運強くも其の創の癒えて實家横山町

の伊豆屋の家へ立歸りましての後も、兩親は昔に變る我が子の姿に其の四五日は涙にのみ咽んで居りました、與三郎も與心得違ひにて御兩親から頂いた大切な身體を此の様の姿になりお目に懸るも面目なく命を捨てとは思ひました、夫では愈々不孝の上塗り、差を忍んで歸りました、此上は何卒當家へ外々より立派な養子を遊ばして私は坊主になつて衣を着し六十餘州を廻國致し度う御坐います、どうぞ御兩親様此事をお聞届下さい」と素より悪人と云ふに非ざれば悄然として此願みをなします伊豆屋喜兵衛は涙を拂い、夫は飛だ心得違ひ、是が役者か藝人なれば容貌の醜くいと云ふ事もあるが商人の身の上、假令顔色が傷だらけだらうとも商賣の出来ぬといふ事はない、親の口より言ひ悪いが横山町の業平と異名を取た其方ゆる女の爲に思はぬ災難、どうぞ是から心を改め家業大事に此の家を最と大きくして呉れ」と云はれて與三郎幸抱しんと被仰らんでも此の顔色では構い人も御坐いません、夫ではお心に從いまして一生懸命に家業を出精致し

ませう」と其後は外出もせず一間の内に引籠り算盤の稽古や學問のみ致して居りましたが餘りに氣鬱の時なれば晝は人目を厭いますから夕暮から遊歩に出掛る、往來にて摺れ違ふ人が喫驚りして「アノ傷だらけの人は何だらう、怖い貌ではありませんか何うしたんでありませう」と人に指を差される時、羞かしい思ひをして後は手拭で腕を隠す怪しい風情を尙々見て取る往來人、中には知つた人も居て「アノ傷だらけの若エ息子は横山町の鼈甲屋の息子、何處か田舎で長脇差の女房と悪い事をして、其の亭主に半殺しにされたんだといふ噂を聞たが死んだ方が増したらう、邪んな面になつて何を樂しみに生てるだらう」と又た口々に言はれる度に興三郎は「ア、生甲斐もない身體」と夫よりは餘り外出も致しませんが謙言ふともなく鼈甲屋の興三郎を切られ興三郎、又た向ふ純の興三郎と自然と異名が付ましたから何となく悪黨らしく世間にも聞えます、夫に付けても人の面といふ者は肝心のもので、さのみ内心は悪人でも顔が謙悪である時は

若しや悪黨ではないかと人も油断を致しません、況んや需めて傷を癒り見ても恐ろしき面體となつたるなれば人の驚るくも理りなる事でありませ、實に若い御人は注意しなければなりません、夫は扱置き昨日今日と思ふ中木更津から歸つて後ち丁度三年目時は六月十日餘りに二階に閉ぢ籠つてる我が子をば不憫と思つた伊豆屋喜兵衛は女房に向ひ弄伴を一寸呼びなさい弄何ぞ御用で御坐いますか弄用ではないが此のムシノ、暑いのには背から飲帳の中に這入てるも可愛想だ今夜は幸い藥研堀の金比羅の縁日又た兩國に花火が揚るさうだから些と伴を保養にでもやりませう弄夫は貴方宜い事で御坐います、嘸興三郎も喜こびませう」母は二階へ參つて母興三や親父さんが御用があるからお降りなさい弄ハイ」と答へて下へ降り慰慰に父の前へ手を突き興何ぞ御用で御坐いますか弄イヤ外ぢやアないが餘り家にはばかり居たら定めし氣が鬱るだらうから今夜藥研堀の縁日だから兩國の花火でも見て來な此處に小遣いが十兩あるから大黒屋で饅でも食て夫から御儀

へ往て藝者でも揚て些と保養して来るが宜い、泊りたエ所るでもあるなら  
叱言は云はんから泊つて来て宜い」子に甘いのは親の常、不具の子はど  
尚は可愛いと世の比喩にもある通り慈悲の深さに興三郎涙を閉して興親父  
さん有難う御座います、イエ最う此な顔色で外へ出ますと猶は笑はれます  
からマア家に……葦イヤ然んな事を云はずに往なという事、癆症でも出た  
ら何うします、娘ッ子ぢやア無し男だ、何んな顔色でも然んな事を差るに  
やア及ばない」と父の勤めに辱れも共々勤め新らしい薩摩飛白の單物に其  
頃流行の茶博多の巾廣の帯、暑いから羽織を着すと宜らう」着流しにて父  
の呉れたる十兩の金を紙入に入れ興左様なれば親父さん往て来ますア  
遊んで来るが宜い」立出るを店の若い者が若旦那の其の御姿を鑑る  
から見ると昔しに變らぬ色男、藝者殺し娘泣せ、粹な御風俗で御坐います  
興三郎は苦笑ひをして興成程後ろから見たら粹な姿かア知ねエが正面から  
向はれたら愛想もユッも盡る此の姿、面目ない」と水浸資の手拭を取らだ

して我家の門口から頼冠りを深くして夫から兩國へ着て花火を二三本思た  
が身に愛いのある時は何程面白い物も目に止らず彼是れする中に夏の間夜、  
今なれば九時ころの事、薬研堀の縁日の植木を紫見し、来るとその中縁日  
の参詣人も次第に薄くなつた時に思はず興三郎獨り言ア、江戸へ歸つて  
兩親の厄介になつて居る其上に遊びに往けと十兩の金まで下さる親の慈悲、  
氣に入ら女房があれば持たして遣ると被仰たが其の女房で思ひ出す三年跡  
に木更津で別れたお登美は底の薬房、假令姿は變つても同なじ様に生て居  
たら又た楽しい月日のあらうものを對手は死んで乃公獨り生甲斐もない此  
の姿、愚痴の事だが最う一遍どうぞお登美に遇ひてエもの、遇いてエとて  
姿はないが濃の武帝といふ王様は李夫人といふ女に別れ戀しい餘りに反魂  
香を薫くと其の李夫人の姿が煙の内に現はれて世にある人に遇ふ心地、聊  
か心を慰さめたいといふが然ういふ香でもあつたならば一さし薫いてお登美  
の姿を最う一遍見たい者だ、惚然んな詰らねエ唐の小説を思ひ出し、ア、

我ながら愚痴の至りだ、此んな面をして柳橋へ往ても化物が来たと取り合つては呉れまい、家へ歸つて寝る方が宜い」と十兩の金を一文も遣はず、已に横山同朋町まで来ると何やら植木を一鉢持て與三郎と摺れ違つたる一人の婦人、梅花の馨り身に染みて思はず與三郎は彼の婦人を一目見て振返り、不思議の事と立留まる、婦人は何の氣も付かず、見返る此方に顔冠り、顔は怪しい傷だらけ、女は思はず薄氣味悪く口の中で去思な奴だね」と云ひながら植木鉢を持て急いで往く、跡見送つた與三郎も今反魂香の事を獨り言をいふと摺れ違つた彼の女をうしてもお登美に違ひないがお登美は此世に居やう筈はなし、之は不思議の事だ、往來中で香も薫かず、思しといふ乃公の心を狐狸が附込んだか、夫も山の中ぢやアなし野の末でもなし、横山町の裏町通り然んな事のある氣遣ひはないけれども、他人の空似にしては餘まり能く似た那の女は人違ひには知れて居るが如何なる人の女房か、又は妾か知らないが年増盛りの蘇の阿嬌者、何者の手活の花か知

らないが何處へ這入るか跡を尾け少し心を慰さめやう」と基なき本を樂しみに婦人の跡に見え隠れ尾さ來つたる村松町、橋を渡つて左りに這入り、女の跡を浮々と思はず來る玄屋店、ア思はず來たが此處はエー何處だらう、ハテナ粹な新道だ、ア、玄屋店か、此處等は着處か圍い者、然ういふ人の住むばかり、ハテナ何處へ這入るか」と尙も跡を尾て來るを足を早めて來る婦人一向に氣が付かず、偶ある格子透り左りの方には船板辨談ひを見越の松、鎌倉槍が二本といふ贅澤の住ひ、女格子へ手を懸けて去オヤ最う繕りをしたのかへ灘や、お灘や、お前お湯にでも往たのかへ、取られる物もないけれども物願だアね、オイおたさや、最う寐たのかい、留守をするに困つた者だねエ」(トソク、トソク)と格子を叩く、此の裏の九尺二間の鉛賣のおかくが、御新造さんお歸り遊ばしましたか、アノお女中のお滝どんは淺草の御母さんが俄に雀亂で死にさうだから是非來て下さいと急に使いが來ましたから御新造さんがお歸りがあつたら能く申上げて下さい外の

事でなく親の死に目少し御暇を頂いて往て来ると今しがた締りをして出て  
おいでになりました、鍵は私が預かつて居ります、上げませう」と溝板を  
ガタ／＼おかく婆アは出て来る、門口で「鍵はおたきどんから預かつて  
居ります」婦人は之を聞いて玄オヤおかくさん大きに有難う、然うで御座い  
ますか、可愛想にたきも關心配で御座いませう、お婆さん今夜は暑いから  
宵からも寐られますまい、些と遊びにお出でなさいな、ハイ後程上りま  
す、お淋う御坐いませう婦人は錠を開けて家へ這入り那方此方がらく／＼開  
け明燈掻立て玄ア「暑い晩だ」と云いながら着て居た白縮みの單物、唐織  
子の帯と共に脱ぎ捨て、サツパリとした浴衣を着、緋縮面のシヨキをザル  
／＼と巻き後れ毛の髪をかき上げて火鉢の傍へ片膝を立て朱管の煙管で煙  
草を喫みながら今夜は旦那も御用があるから最うお出があるまいし、たき  
は歸らず、困つたもの、夫に付けても思ひ出す、先刻横山同朋町で出遇た  
男の那の有様、此暑ついのに手拭で顔を隠して歩行くは曲物、覗いて見れ

は傷だらけ、願にも大尉傷がある、ア、那の傷で思ひ出す、丁度當年で三  
年跡不活した事から馴染めて悪いと承知で與三さんを咬のかしたは妾の科、  
可哀や其夜與三さんは赤馬の爲に鬨り殺し、目前男の苦痛をば見て居る事  
の辛なさに海の深みへ世を捨てたが存命へた今日まで心にもない此の身の  
上、嘸や與三さんは冥土の旅で妾を怨んでお出だるう、今の旦那の知らぬ  
やうにと密と拵らへた主のお位牌、せめて今夜は誰憚らぬ旦那の居ぬ間に  
位牌を出して回向を致しませう」と云ふも小屏の口の中佛壇へ點る燈明、  
鈴を叩いて位牌に向ひ玄南無阿彌陀佛、彌陀佛」と唱ふる聲の殊勝さを密と  
表てに立聞く與三、其の縁言は小音で判然とは聞へねど時々聞取る女の縁  
言、扱はかすみであつたるかと尋く胸を押静め思案に暮れて居りましたが  
抑も是からがお待兼の玄治店、妾宅の場、淨瑠璃なれば三の切りであり升

第八席

處へ二人の破落戸風、一人は年齢四十格好、最も粗服を身に纏ひ、横顔へ一這に緋は編融、其の異名を蝠蝠安、此の遊シ荒す無宿の悪漢、横いて一人は三十ばかり、丈の高い罽栗頭、目玉の富と異名のある奴、彼の妾宅の戸外に立ち寫、オ一蝠蝠兄哥、此間から目を注て置たなア此家だよ、些とはあるだらう、何しろ一番押込んで凄味を見せて些とばかり小遣錢にしきさやア成らねエ空、オヤ、富や待たよ、誰か一人り煩冠りをした奴が門口に立てるせ窩然うか讀賣たるう空イヤ何も喋舌ては居ねエ、寫盜賊ぢやア無いか安、然うでも無エ様だ、けれども六月の十日に煩冠り、どうせ潔白の人間ぢやア無エ、家を伺つてゐるのは此方等の仲間で無くモサぢやア無エか寫、何しろ歸り口でも食ちやア見ツともねエ、小陰へ呼んで様子を見たりやア無エカ、打捨ツとは、モサだつて何だつて構う者か、此方等は白頭頂面清淨潔白の遊人だ、然んな野郎に構ふな寫、然うてねエツてる事よ、空、夫ぢやアママ呼んで見や、オ一兄さん、煩冠りの兄さん」と呼ばれて與三郎

我が身の事と心附き與、ハイ何で御坐います寫一寸此處へお顔をお貸しなすツて……」與三郎黒板塀の傍へ來ると寫、エー御見それ申しやした、兄イ失禮ながらお前さんは那所の家へ何を御用があつてお出でなさるか、此の番いのに煩冠りで顔を隠してお出なさるは言はずと知れた其所其れ、御商賣の御邪魔アしやせんが私等は、へ、エ破落戸で僅かの錢を貰ひに往くんで御座りやす、どうで私等が仕事をした跡でマンマリ本職にお掛んあすつてお呉んなサエ、決して御邪魔アしやせんから」云はれて與三は何の事だか解りませんが乃は伶俐の息子ゆゑ與、ハ、ア解りました、お前さん方は今那所の美くしい女一人りで居る處るへ強詐にでもお出でなさるか寫、モン人聞の悪い強詐なんつて然んな者ぢやア御座りやせん與、ア、然うで御座いますか、夫ぢやア騙りですかへ寫、尙ほ悪いや、強詐騙りなんつて大袈裟の者ぢやア御座エません、今云ふ通り柄の無エ處るへ柄をすけて那所へ錢を貰ひに來るピーツツで御座エやす與、ハ、ピーツツさんと被仰るお名

ですか、いへ名ぢやアありません奥夫ぢやアア早く云へば那の女の處へ往て何か嚇して錢を借りやうと此う被仰るんですか、左様で御座えます、お前さん見たやうに然んな大きいのぢやア御座りません奥イヤ私とても何にも怪しい者ぢやア御座いません、成程此の器いのに煩冠り然う思ふのは尤もだか悪事をして人の物を竊なぞといふ盗賊ぢやア御座いません、災難ゆゑに此んな顔色に姿を人に見られるのが忌さに夜るばかり歩行く化若で御座います、お目に掛ませう」と奥三郎新しい淺黄の手拭を脱つて見せる、目玉の高い蝙蝠安、アお前さんは確か横山町の籃甲屋の若旦那か目には懸りやせんが噂の高い好男子、姿が變つて三年此方切られ奥三と息子株で凄い緯名の付た噂の高いお方で御座りますか、奥然う仰せがあれば隠すにやア及びませぬ如何にも其の奥三郎で御座います奥、其の又奥三さんなら女ゆゑに聞けば上總で御災難、咽喉元越れば暑さを忘れる、又た格子戸の中を覗き、宜い事でもなまる所るを飛だ懸路の邪魔をして相濟みませぬ

奥然ういふ譯ぢやア御座いませんが今那の女の跡に附て奥三郎から來たし九が少し心當りのある女が中へ這入て夫かあらぬ、尋ねやうとは思つたが若し人違ひである時は外分の悪い始末と篤と實否を見届けやうと表てに立て家の様子密と覗いて見て居ました、何と此うしちやア下さらんか、お前さん高が錢貰ひにお出でなされるなら此の奥三郎を同類と拵へ込みお連れ申しちやア下さらんか、然うある時はお前方が話の間に驚くりと家の様子も見、夫かあらぬか女の實否を見届けて後私か談判したう御座いますか、連れていてお呉んなさらんか之を聞た蝙蝠安、此つや成程面白い御趣向、夫ぢやアモシ若旦那を顔の傷を幸ひに貴郎を一番立者に拵へ込み後ろの方に煩冠りをしたまゝで座り込み、前の私等が口を開いて愈々女が承知せず小粒一つ出さず強く向ふが出た時には、若し親分お前さん出てモンカを切てお呉んなせいと懸と私等が云いやすから夫を合圖にお前さんが煩冠を脱て、モシ姉さん大の男が三人來て米搦頭益見たやうに顔を下げて覗ひから



さんが其顔で向ふの女を睨んだ時には素面で嚇しの利くお殿、二兩の者は三兩と金の出るのは知れた事、若旦那をうぞ降けさしてお呉んなせエまし」  
與三郎も面白半分奥夫ぢやア私は分目は入らんから一番然ういふ事に致しませう安、然つア有難エナア、目玉の富家兄イの云ふ通り旦那が然うして呉れれば大きに座頭があつて芝居が宜いや、夫ぢやア若し若旦那致う些と體を下てお呉んなせエ、失禮ながら私ナが衣裳を付ませう、最と胸を開て、夫から腰ツつさがどうも葛西の兄イが茶桶を擔いてオワイイト云いさうだ……夫で宜うげす、乃で手拭をイナせ被りに被つて尻をケルンとまくつて跡の方に座り時々左の手を内懐ろに入れて胸を叩いて、然うかといつて腹の腹鼓見たやうに叩いてばかり居ちやア往かねエ時々で宜いたんだ奥心得ました、又貴方の方の御商賣には色々作法が……高ナニ作法といふ陣でも御座いませんがマア然ういふ鹽梅にして、成丈け凄く見えるやうにか

頼み申します、宜うがすか若旦那」茲で荒まし稽古が済んで先に立たる  
婦安、横く目玉の富家に跡から来る與三郎何れも怪しき風俗にて格子をかりりと明けて編婦安、御免下せエ、お頼う申しやす」婦人はデロリと之を見て去、誰耶……誰耶へエ、私ナでげす、エヘ一兩日メツキお悪くなもやした、御機嫌様で、ヘ……何だエお前さん方は何でも御坐エやせん、人間で御坐エ升、オ、御免蒙つて上りやナ……エ、私ナから一寸申上やすが御新造さんへ、外ぢやア御坐エやせんが是に居る頼冠りをして思る若へ男で御坐エますが是は實は私ナ等の親分の伴で御坐エまして田舎で鐵脚に引掻れ顔から身體を一面に生れもつかない疵だらけ親分の息子だお私ナ等仲間が打寄てどうか湯治にでも遣つたら宜らうと、疵も少しは癒つてもまだ此の二三日の暖氣では耐らねエといふのでどうかマア路用を拵へてやりてエと思ひましても、是は御新さんなどの御存じない事だが此の夏枯で御坐いまして何處にも宜いのが札張り出来ません、破落方は搦つたりと

云ふ御時節、夫ゆるどうも御縁の無い處へ濟ませんが、商人衆や藝者や又  
は揚弓場、宜い御商賣といふぢやアないが、粹な世渡りをして居る方へ無心  
を願ひ、せめて五兩と十兩と金を纏めて息子さんを湯治にやりてゑ私ち等  
の眞實、どうも御當家様などへ来てこんな事を申しちやア濟ませんが、ホ  
の當人の草鞋錢をどうぞ御新造御恵みなすつて御呉んなせいまし私から一  
番序幕を明けまして御座ります」事に馴れたる彼の婦人は莞爾り笑つて  
女「然うで御坐いますか、是は御苦勞様で御坐います、見ず知らずの御方で  
も、假令嘘でも然ういふ事を聞く以上は充分の事は出来ませんが草鞋錢位  
ゐる上げませう」夫はどうも有難う存じます、早速の御承知で有難う存じま  
す、此時婦人は火鉢の引出しから小遣錢を取出して其頃の二百文紙に包ん  
で三人の前に出し、女「少ないけれども草鞋錢、是で宜ければ持てお歸んなさ  
いませ」女「エ有難う御座います」蝙蝠安は手に取て笑ひし御新さん、エ  
モシ姉さん、是は僅か二百餘まり、苛う御座えますよ、マア御返し申しませう

女「何ですとへ、草鞋錢だと言ひだから縁のないか方へ二筋のか丁目を上  
たのに少ないから返すとへ、入らないと云ふなら夫までの事お返しな女「  
エ大分宜いお挨拶で、エー富エイ、シヤ二百の事だ」と言何だシヤだ、返  
しちまへ、乞食や小供ぢやアあるめえし大の男が三人来て其んを歸れ  
錢を貰つて歸れるものか、返しやナ兄貴安、然うだなア、エー朋友にも相談  
しやうだがマアお返しアしやせうよ女「ア、然うですか置てお出でなさい、  
御相談には及びません、明朝のお汁の實だけあるから安ナニヤイ三平二浦  
め、巫山戯やアがるナ女「何だへ大きな聲をして靜かにおしな、家主の  
家ではあるが靜かにおしな、思なれば思で置てお出で、御新さんだの姉さ  
んだのと訝う詔安つて置きながら忽ち變る三平二浦、駝婦と其惡口は何  
事だエ、サアお歸り、一昨日お出で笑はせやがらア人を疑ひだと思  
つてやアがる……と云ふやうなもの、エーもし然んなれば御新造さんマア  
一寸……女「思だよ安マアサ、然う言はずに聞てお呉んなせへ、今時は二百

や其所等の端た錢は初午に子供が稻荷講萬年講と錢を集めて歩行ても子供は珍重やくと言ひやせん、私チ等は乞食ぢやアなし此う見えても此の界限で人に知られた蝙蝠安、次に居るのは目玉の富八、又た傷だらけの彼の親分三人揃つて無心に來たなア此の贅澤の家が附目だ、夫に何たニ二百ばかりの端た錢、貰つて莞爾り笑はれやうか、お前は只の鼠ぢやアあるゆゑ、獲者上りか華魁の果てか、お嬢さんとも見受ねエ、些たア苦勞もしあつたらう、顔に似合はねエ不禮廢れ、サア此う文句を列れば只のお前さんを怒らせるばかりだが乃を一番氣を變へてどうぞ内儀さん惠んでやつてお呉なせエまし去オヤ又た訝しな事を云ふねエ、何だと、妾の事を色々な事を云ふねエ、妾の家は何も怪しい事はしないよ、隠し賣女や色の周旋、奥の坐敷をべ切て博奕の會所に拵へた然んな怪しい家ぢやア無い、清淨潔白の妾の身體、斯う見えても立派の主があるよ、今夜はお留守だが旦那が歸ると言附るから然う思つて言やアがれ、妾エへ、モシ御新さんお見それ

申して居りやした、立派の旦那のあるお前さんに飛だ失禮を申しやした、何もお前さんが隠し賣女や博奕の會所をするよ云ふ弱味を附け込んで來たやうに思召しちやア困りやす、隠し賣女や博奕の拵なら私チ等が言はずとも政府のお役人様か御承知、何も私チ等は然んな事を云つて來たんぢやア御坐エやせん清淨潔白の奥様でありませうが如何だ奥様だと、巫山戯やがつて、妾マアく宜うげすから………妾思だよ然うで御さエやすか、夫ぢやアどうも仕方がねエモシ親分、悴さん、モイどうも仕方が無エ、出てお呉んなせエ」と目配せをする、興三郎は富八に教はつた通り懐ろの中で左りの手で胸をフカく叩きながら奥立う御坐いますか」と是から女の前へ摺り寄つて奥もし奥様、御新さん、御登美さん妾アイヤサ、お登美久しふりたなア」と手拭を取て見交す顔と顔登美ヤ、お前は………興オ一興三郎だ、つがねエ戀も情の仇、どう突きとめたか木更津から廻る月日も三年越し、江戸の親にやア堪當受け、據るなく諸方を食い詰て居た其中に面に

受たる此の創がモツケとなつて結句僥倖、流れて来る玄治店、此くとはし  
らぬ黒屏の格子造りの構い女が、死んだと思つたお登美だアお釋迦様でも  
氣が付くゆえよ、ヤイ安沙等は兎も角乃公ア一分ぢやア動かれねエ」と申  
すは即ち劇場の與三郎、寶録の講談ではまだ與三郎に然んな臺詞は云へま  
せん、是から與三郎お登美はどうするか第九席に説きまする

第九席

此時突然に裏口から這入て来る一人の男、お登美や其處に居るかへ云、ハイ、  
オヤ旦那様で御坐いますか男ア、乃公だよ」と徐かに入り来る人を見れば  
年齢は四十格好、如何にも眞面目の人物で木綿でこそあれ飄張りした單物  
小紋緞の羽織を着て分別有り氣の町人風、火鉢の傍へトツカと座り男お登  
美此の人達ア此ア何だ登、ハイ貴方の御留守へ三人で来て色々威し文句を列  
べお定まりの錢貰ひ、二兩のお錢を遣りましたら少ないからと色々云い柄

の無い所へ柄をすげて妾を女と侮どつて言ひたい儘の悪口雜言、困つて  
居つた處ろであります、併し旦那がお聞き遊ばす程の事でも御坐いません  
男イヤ聞ずに濟めば格別だが來合して見れば仕方が無い、モシ三人の御方、  
最と此方へ御出でなさい、何だか知らないが錢を呉れると御言いださうだ  
が女はつましい者ゆゑ成丈け少く出したいと云ふは人情、何ういふ譯で  
御出でに成たかは知らないが御見受申せば珍らしい御人で御坐いますか私  
郎の御顔の扁融は面白い御纏物、又左りに御出の御方は……ヤア貴様は左  
官の富八ぢやア無いか」と言はれて叱と打詠め爲、サア此つア大變だ、オイ  
く安、兄弟、新兄イ此所の家にやア居られねえ、歸れく」扁融安は何  
氣なく振返つて空何だく、旦那を見て何で然んなに驚ろくんだ爲此の旦那  
那は油町の井筒屋さんと云ふお店の番頭太左衛門さんと云ふお方で親父の  
代から御風員に與かつたお店の一番々頭さんだ、其の御妾宅と知らずに來  
たんだ、歸つて呉れく去待てく」富八、少し待て、此方へ這入れ、乃公

の扣家と知らずに来たといつたな、知て来れば宥さねえ、併し商人の支配人、お店を預かる身分荷且にも女を困つて置て、何う此うと云へばお店に後ろ暗い様だが御店の旦那も御承知で謂は、此家は乃公の自宅、妾と云へど女房も同様、通い勤めの乃公の家へ朋友を連れて来て錢儲けたア可い男だ、けれども知らずに来たといへば、マア此方でも搦辨するが、能く聞け汝の親父の左官の富右衛門は七十になつてお店の飼殺し、家も地面も相應にあり、職人でこそあれ可なりあつた身代も皆な汝の心柄、土蔵倉まで手に渡し、女房には見限られ、七十になる親父を捨て、堅氣の職人の子に生れ三十面をして居ながら其の風體は何だ、悪漢組に仲間入り、宜い事にして強詐騙取、然ういふ汝が身を知らず此間も親父の富右衛門が涙を翻して乃公に言ふには太左衛門さん最う私も七十三不幸の仲の庇陰ゆる我が家土蔵も失して仕舞ひ、居所るにまで迷ひしを御情深い旦那様や貴方の御取なしで土蔵の腰巻さへ塗れぬ私の老込を厚き御不惑掛くれて四季折々のお

仕着せから皮羽織まで昔しに變ら下すつて御臺所で三度共御飯を頂だき此年まで飢へず寒へず居りましたは皆なお店の御高恩、夫に引替へ仲めは親に背いた、罰當り今頃は如何して居かど不幸の子はと親の慈悲、諦らめては居るものゝ旦那様年を経るほど心細くなりましたと昔しは随分勇みの職人、那の富右衛門が愚痴話乃公も宜い程に慰めてマア、爺さん、然んな事を苦愛思はず、お前はお前で落着て靜かに老を養ないなせいと慰さめて置たが老人の涙もろく、手を合せて拜んで居る其の親爺の心も知らず、思へば惜い不所存者、乃公が勤めの其中に聊さか休息しやうと云ふ此家へ能くノメくと來やアがつた為、何うも最う番頭さん、御支配人さん旦那どうも濟ません、何とも申さうやうなく熱い涙が翻れます、どうも濟ません去濟ないと云ふ事を云いあすつたか、最う何とも言はない、歸れ、エ歸りまして御座います、どうぞ親爺を宜しく願ひます、飛だお宅へ参りました、至たく知らずに参つたんですが最うお宅を知りやすれば江戸は火



更津で長脇差の女房となり、根が深川の護者揚り、浮気が常なる此身の行  
 なひ、思へば丁度三年跡興三さんと馴染めたが夫に知れて興三さんは黽殺  
 し、其の苦しみを見るが思さに妾は海へ身を投げて漂よふ浪に夢現、其の  
 木更津の沖中で魚油の仕入に此の江戸から往た船に引揚られ、情深い船主  
 の、介抱受て江戸へ来て、便る知るべも品川の僅かの縁を力草、心にもな  
 い憂き月日、存命て居た其中に遂に貴所の御世話となり、おもきが上の夫  
 重ね、何不自由なく今日が日まで暮して居りましたが貴所の前では言ひ悪  
 いが實は其時木更津で死んだと思つた興三さんの追善佛事は貴所に内々、  
 今日も今日とて薬研堀の金比羅様へ参詣し歸る途中の同朋町、摺れ違つた  
 る一人りの男、顔は見へねど煩冠り、怖いが見たさに規いて見れば顔から  
 掛ての疵だらけ、其の顔を見るに付け、夫れと心は附きません若し興三  
 さんが存生て居たらそんな貌にでもなりはせぬかと基なき事を思ひく  
 へ歸つて休息して貴所のお留守を幸ひに佛間に向つて念佛を唱へて居る中

三人連れ無頼組の銭貰いと弱味を見せしと女だつら言草を言てる最中に  
 だらけの此のお方が手拭脱で妾に向い、興三郎だと只だ一言聞て吃驚り見  
 て驚るき、然んなれば先刻同朋町で遇つたも矢ッ張り此の人か、豈や眞事  
 の興三さんではとまた疑いの晴れぬ中、折よく旦那がお出でになり二人り  
 の奴は庇蔭で歸し、残るお方を喚び留めた旦那の御心、妾に譯ある人とい  
 ふを早くも悟る御發明、何にも隠しは致しません、妾よりも此のお方が此  
 んな妾になつたかと思へば悲しう御坐います」と差俯向たか登美の眞實、  
 太左衛門は涙を拭き興然いふ譯とは知らずして今まで世話もしましたが己  
 れゆゑに此の疵を受けて浮世の廢れ者、興三さんへ對しては飽まで實を盡さ  
 ねば女の道に背きませう、太左衛門は假の夫、また女房と云ふではなし、  
 モシ興三さん知らぬ事とは云いなながら命に掛たお前さんの其の情婦を私が  
 今まで世話をしましたか此う事柄が解つて見れば最う私は是限り改ためて  
 貴郎に上げませう、どうぞ是から二人して苦勞をしあつた夫婦中、中宜く

添ひ、遂げ、親御にも安心させ又た商賈を精出して美事に世界を送つて下さ  
い、今日只今太左衛門が此所の家主に翻つて私の名前に判を抜き此のお  
登美の女主人、誰に遠慮もありませぬから跡は緩くりお登美と相談、宜い  
やうにして下さいまし、お登美先づ話は是まで、若旦那與三さん不思議の  
御縁で御目に懸りましたが今の事は解りましたか」云はれて固より與三郎  
悪漢作りも附焼刃、忽ち其の息子風、兩手を突へて涙を拭し與三太左衛門  
さんの今の御言葉、立派の武士も及ばない奇麗の仰せ有難う存じます、此  
上は虫の宜いやうだがお言葉に甘へます、何と御禮の申さやうも御坐いま  
せん」お登美も傍から兩手を合せ「旦那様死んでも御恩は忘れませぬ去、イ  
ヤ然んなに二人り拜んだり又手を突たり禮を言はれ喜ばれる程器量はな  
い、兎も角も差詰め乃公は媒約役、其の媒約は符の中、お店に用も多いか  
ら、御縁もあれば又重ねて御目に懸ると致しまさう」と羽織引掛け太左衛  
門太お登美餘計の事だが餘まり夜の更けねエ中何ぞ取て一口上たら何うだ

らう」と雪駄チヤヲ／＼路次板鳴らし油町へと立歸る、伯圓曰く「君何と立派の支配人ではありませぬか、此の條りを御愛讀ある世間の御婦  
人方へ伯圓御勤め申す、此の太左衛門のうやな御亭主をどうか撰んで、  
持ち遊ばせ、是は餘計の事、扱て是よりお登美與三郎の痴情は如何に第十  
席のお楽しみ

第十席

於登美與三郎の兩人は太左衛門の俠客氣に感じ入り、當人が歸つた跡は暫  
し言葉も絶えまじしたがおとみは與三郎に向ひ登與三さん那の様子では何も  
彼も承知して居る様だからお前と妾を添はして呉れると云ふ了簡かも知れ  
ないからマア今夜は緩くりと落附て久々で話をしやうでは有りませぬか」  
と云はれて與三も大きに喜こび與實に二人は悪縁とか云ふ者が私は殺され  
て已に命の縁も切れ、お前は海へ飛込んで助かるべうもなかつたを廻り廻



つて三年目、面も江戸の此の土地で再び此うして話の出来るといふは神々  
 様の御引合せか、殊にはお前の當時の旦那太左衛門さんの俠客氣にどうで  
 是からは太左衛門さんに免じて其面目に成てお前と二人り生涯中宜く添  
 ひ送りたいものだ登眞正にお前が其の氣なら妾は命に掛ても失禮ながらお  
 前一人りや其處等は養てよも上ませう、とは云ふ者の何をいふにもお前は  
 居附地主の問屋株伊豆屋の御子息で見るとはどうも妾と夫婦になるとい  
 ふ譯にも往かず、其の譯は持ち崩した妾の身體、眞面目のお方の嫁にもな  
 れず、とあつてお前を婿にも出来ず、乃を思ふと末々が妾は案じられます  
 〇然んな氣の狭い事をいふもソぢやア無エ、堅氣の親爺を脱付けて因縁  
 づくだ仕様がな、お前を家へ貰はうとも又た親父が不承知で然んな女を  
 入れる事は出来ないといはれたら乃公の方から飛出して夫婦になつて何と  
 しても男一疋末々仲宜く暮さうが乃公も昔しの身體と違ひ見る通り此の顔  
 色、化物が七分で人間は三分虫持の兒が乃公の顔を見るとソツと泣き出し、

夫から跡は病氣が起ると云ふ乃公の顔色、鏡に向つたり又は水鏡に寫した  
 時、愚痴のやうだが涙が翻れる、夫ゆる色氣などはスツパリ捨てた此の三年、  
 變り果たる我が妾、おとみお前義理一遍で今のやうに優しく云ふものゝ朝  
 夕見て居たら愛想が盡きやうかと乃公ア夫が案じられる登眞三さん然んな  
 妾は薄情き女ではありません横山町の楽平とも言れたお前は有名の美男、  
 然んな貌にしたのは誰がしたの、皆な妾の横戀慕、今更言ふのも愚痴では  
 あるが恐ろしい長脇差の女房でありながら迷つた故に此身も捨て、お前の  
 姿も然んなにしたは思はく、面目ない、御両親も此事をお聞となすつて  
 妾をお惜みでありませう、與三さん妾は木更津の時分よりは一層お前が慕  
 しくなりましたッ」と嘘か眞事か知らねども眞實見るお登美の言葉、實に  
 女の黒髪にて糾れる繩には大衆も繁とかや、是より與三郎は此の家に始終  
 泊り横山町へとは歸りません、四五日経つと井筒屋の支配人太左衛門よ  
 り表向き人を以てお登美に懸合いまするには今度お店の都合に依て上方へ

行かねばならず然うすると七年程は彼の土地へ足を留めるから長々世話も  
 出来ないうに依て立治店の家は二百五十兩で買つた時に此ういふ事の爲にもと  
 女名前にして置て太左衛門は眞の後見、依て今日家主へ相談をして太左衛  
 門の印形さへ抜けば跡はひとみの物であるから婿を取らうと寧ろ暮さうと  
 何をしやうとも一切太左衛門は關係ない者であるから念の爲り斷るとの口  
 上尙又聊さかの手切金をも思ふが只今手許不如意であるから一切の雜具  
 夜具布團、家は前にいふ通り何も彼も手切代りに進せるから書附一本取  
 来て呉れと斯く太左衛門の頼みを受けて参りた人の言葉、おとみは今さら否  
 やもなく又たことわりやうも御座いませんから登委細承知致しました、何  
 事も被仰らずに旦那のお言葉今更の氣の毒ではありますすが妾の方も然うな  
 ると都合か宜う御座いますから」と仲裁の人に萬事頼んで是からかおとみは  
 跡に關係ないと云ふ書附を出し、仲裁の人が立治店の家主方へ参つて太左  
 衛門後見の判を抜き、奇聞風張り跡はひとみが女主人、與三郎は表向では

ありませんが亭主氣取此所の家に愚圖くして居る、夫は宜が横山町の  
 甲屋伊豆屋に於ては與三郎が夜遊びに出た切り何日経つても歸つて来ない、  
 初めの中は兩親が那んな親色でも女でも出来た者か、其方へでも引取れた  
 者だらう、マア、宜いは、死ぬ所を助かつたのだから些とや少との道  
 樂をしやうとも那んな怖い顔を承知で遊ばして呉れる女があれば打捨て置  
 けと親の慈愛で延々になりましたが指折敷へて見れば早や十日も歸つて来  
 ないから茲に於て俄かに掻き立ち店の番頭出入の職人其他の者へも頼みま  
 して足許から鳥の立つやうに與三郎の行衛を探せといふに番頭や手代は  
 ○イエ若旦那の事で御座いますから神隠しになるといふ然んな古真の事も  
 ありますまい、何でも柳橋か芳原か夫でなければ深川七橋所延びて深川か  
 西の方角なれば内藤新宿か、然んな所を遊んで居るに違ひない、夫では  
 明日から氣を揃へて手分けをして東西南北四里八方探して見ませう、けれ  
 ども子供の事ではなし銅鑼や太鼓を叩いて迷子の迷子の與三郎……さん若

旦那やアイとも言へませんから御兩親の前では申上げ悪いがお貌が看版、日本に二ツとないお創でありますから直に目付りませうから御連れ申して参りますゆゑ御安心下さい」と口々に申すから伊豆屋喜兵衛夫婦も苦笑ひをして至何分どうかお前方骨を折て下さい、入費は何程懸つても厭はないからお頼み申す〇承知致しました」と茲に於て翌日からして面白半分東西南北手分けをして與三郎の行衛を探すといふのを名として中には遊びに耽るもあり又は芝居を見物するもあり其の金主は伊豆屋が就て居るといふのです子に甘い親は然んな者のあらうとは知らず宜い氣になつて金を出しをするけれども一同探しに出た者も頭を揃へて今日も知れませんが昨日も見當りませんと云つては餘まり人を馬鹿にするやうだから些と眞面目に實氣になつて探さねばなるまいと之から暫時遊びを止めて先づ江戸方角往來見たりやうでありませすが丸の内から呉服橋一石橋日本橋江戸橋堺町兩芝居向ふは深川八幡洲崎の辨天十萬坪取返して山の手邊、申の方は赤坂水川マツト

奥の青山邊市ヶ谷牛込、小石川マツト落るはお茶の水、三つて轉ぶは谷中町四里四方を大方探したが影も形ちも見えません、然るに燈臺元附し伊豆屋の番頭善兵衛が或る朝の事所用あつて日本橋邊へ往き其の歸りに丁度小路を取違ひ這入た新道は玄治店善兵衛は獨り言善ア！粹な家ばかり列んで居る、此やア何とか云ふ所であつた、然らう玄治店の道樂新道軒並び困い者だの藝者だの又は藝人役者の類い浮氣の者ばかり居る所だが朝から爪引の歌なども聞え、成程別世界だ哩」と思ひ傍へを見ると云ふと格子造りの粹な家其の傍らには小庭があつて例の赤松に鎌倉箱が二本堀の外から見えてるといふ横手の方に出格子があつて其處に腰を掛け町内の祭りの揃ひの浴衣にて朝顔を見ながら兩房の揚子を使つて居る若い男内には女の聲で、玄與三さん最うお湯が出来たろうからお前朝湯へ往てお出でな、其中には御飯が出来るから男やア止さうまだ今は混んでる、人にヤン／＼面や身體の疵を見られてユツ／＼云はれるのは強勢辛い、湯に往くのは夜る

に限る、井戸端へ往て面を洗ふ方が宜い」といふ聲を聞くと正しく己れが主人の息子與三郎の聲、突然り表てから這入て参り互ひに見交す親と親、善若旦那ぢやア有りませんか與ヤア善兵衛、伊豆屋の御家老職何して此所へ善私しより貴様マア何うして此所に」と善兵衛はキョロ／＼と家の様子を見廻して善若旦那、どうして貴郎此んな處ろにお出なさる、然うとは知らず御両親様も俄かに願立て東西南北手分をして貴郎の行衛を探ねても知れず、燈臺元暗しとやらで此の玄治店に居なさるとは……マア／＼宜かつた／＼御両親も嗚お喜びなさるで御座いませう、サア若旦那何ういふ聲か存じませんが私の目に懸つたが幸ひどうぞ御歸んなすつて下さいまし、其のお扮装でも往れませんからどうか着物をか着換へなすつて歸つて下さい、與歸れと云ふなら歸りもしやうが兎も角善兵衛此方へ上つて呉れき一體是は誰郎の家です與是はマア乃公の家見たやうなもので怪しい譯の者ではないからどうぞ此方へ這入て呉れ」といふ中におとみは下女に臺所の差圖を

してゾロリとした疑衣姿で夫へ出て参りました與三さん此のお方は……與おとみ是れは家の番頭で善兵衛といふ忠義者、乃公の行衛が知れないので親父阿母が氣を揉んで四五日跡から江戸中を探して居るといふ頓馬の話し、併し半月も家へ歸らないから氣を揉むのも尤もだ、一寸挨拶をして呉れ登オヤ然うで御坐いますか、若旦那の行衛の知れないのは皆な妾のした事で御坐います、誠にお氣の毒様でどうぞ番頭さん、善兵衛さんとやら此方へ這入て御繰りと……」善兵衛は女の様子を見ると二十四五、ツツとするほどの美しくしつ實に當世風の藝者上り、素敵の代物でありますから暫らく善兵衛見惚れて居りましたがおとみは家から格子を開けサアどうぞ這入て下さい、決して取て食はうとは云ひませぬ、化物の家では御坐いませぬ善若旦那も恐れ入ります、夫では御免下下さい」と善兵衛は上へ昇りますと與時に善兵衛、不思議に思ふか知らんが是れは此ういふ譯だ長い短かいはい入らないが三年跡上總の災難大方聞ても居るだらうが其時長脇差の女

房か登美見兼て海へ飛込んだが廻り廻つた三年目死んだと思つた其の女が此の玄治店に居て而も半月ばかり跡に不圖した事で廻り合ひ夫から此所にするくへツたり、此う見えても此所に居る此の年増は元深川七橋所で鳴らした横櫓か登美といふ一枚給にまで出た婦人、と乃公の口から云ふと大層惚言るやうだが不仕合せから上總の方へ流れ込み心に染まぬ快客の女房となつても面白からず月日を送つて居た内に不圖した縁で乃公と馴染め阿漕か浦に引く綱も度重なれば現はれにけり」遂には亭主の耳に入り夫から跡は云ふまでもない知つての通り疵だらけ互いに死んだと思つたが廻り廻つて江戸で遇ひ焼ぼつ杭に火が附て今さら引くにも引れぬ譯勿論かともも相當の一人の旦那があつたけれど乃公との中を知つた故奇麗災限り呉れて仕舞ひ今では天下晴れての寡女、何處から尻も何も来ない此所の家であるからにツイ面白さに浮々と家へ歸るが遅くなつた、通常の藝者買や女郎買とは違ふからどうか乃公も家へ歸り此の因縁話を親父にしたら何ほ石部

金吉の野暮の親父も其情といふ事を察して可哀想だと大目に見て置て呉れるかも知れねエから乃で親父が承知なければ此の女を大きな丸函にして眉毛を落して齒を染めて立派の御新造風に紋付の着物を着せてお輿入れし夫とも親父が不祥で承知をしなければどうも仕様か無エから乃公の身體を一ツ捨て賃はなければならねエ、乃公が決心をした以上は雷が鳴つても此女には離れねエ、善兵衛ぜん然う思つて呉れ」一伍一什の長話し、善兵衛は大きに呆れ返つたが女の手前もありますから何事も知らぬ振にて思案をして居るとお登美は傍らから登誠にお氣の毒でありますけれども今大方は興三さんから話した通りの妻の身體、切るに切られぬ興三さんと妻の間でありますからどうぞ御両親にも能く貴郎から此の事を被仰つて且つは御説を申上て下さいまし、強て生木の杖を裂かうと遊ばしては却つて幹も根も枯れて仕舞ふやうな事になりますから此道ばかりは、チ一番願さんオホ、ハ、ハ、ハ、ハ、御尤もで御坐います、宜しう御坐います、何にも申ません、御両親

は何と被仰るか知りませんけれども一通り申上て見ませうと然して下さいまし奥時に番頭殿の家へ来て口を濡らさずには歸る者ではなり、一盃やつて往くが宜い筈どう仕りまして商人の手代が朝から赤い顔をして歩行ては宜く御坐いません、殊に私しが左様の事を致しては若い者の示しにもなりませんから夫だけは御免を蒙ります、奥然な野暮を云はねエで茶の代りに一盃飲ても宜いだらう筈何う仕りまして、夫よりも一刻も早く歸つて今お兩人のお言葉をお兩親様へ申上げませうと然らば善兵衛さん誠にお父にお大鼓を叩いて呉れるやうに頼みますと番頭さん誠に濟ませんがどうぞ御兩親様へ宜しく、御目通りは致しませんが、定めし御憎しみも御坐いませうなれども是も前世の約束事で御坐いませうと云へたうも結構で御坐います」と番頭善兵衛は何事も言はず横山町の主人の家へ立歸り右の話をすると主人喜兵衛を初めとして女房其外一番々頭手代親類残らず寄り集まりまして相談を致しましたたが如何にも女の云ふ通り生木の枝を無理に

裂けば幹も根も枯らして仕舞ふといふ是は何うしても仕方がないから少し熱度の冷めるまで打捨て置た方が宜らうと野賤が決したから知つて知らぬ顔をして其の儘籠甲屋の方では捨て置きますと奥三郎も野暮の家へ歸るよりは彼の美くしいおとみの傍に居る方が遙かに氣樂でありますから一日二日と何にもせず暮して居りますが固より何にも爲す事もけなれば坐して食へば山をも盡す、毎日贅澤をして旨い物好みをして居る中倏忽小遣ひにも差支へるやうになり太左衛門に拵へて貰つた衣類打もボナ／＼と質入をしたたが夫も大體失して仕舞つて今更らおとみは氣が付きまして又奥三さん妾はお前さんのお宅へ若し無心でもするやうでも女が慾に憑つたと云れるのが悔しいゆゑ今日が日までお前の耳にも入れないやうにして居たがお前さんも顔こそ今は怖くなつたが何處までも處兒ゆる暮し向きの事は知るまいが實は少し不都合になつて來たワ、夫に追々秋風も吹く時分になるし是から一枚宛も綿の這入た物を支度せねばならず近所の人に蓋被を出して笑は

れるのも悔しいが何か一つお金になる事を工風したい者だね。興然うサ：  
 ……ヤおとみ乃公も茫然として居るやうだが疾から乃へ氣が付て居る、け  
 れども今さらどうも天秤棒を肩に當て、胡蘿蔔牛蒡を賣て歩行く譯にも往  
 かず登馬鹿くしい然んな事をさせやうと思つて妾が言ふのではない、妾  
 もまたお前と云ふ者があるから今になつて藝者に出るのも思ひだし、然して  
 昔しとは違つて藝は二の次、今の藝者は年が若くつて座敷の取廻しでも宜  
 くなくツちやア逆もお客の氣には入らず、引込時分に「イ今晚はと今ツか  
 ら左り襦で現はれる氣もないし、どうしたら宜らうね」興、ユウお登美、抑  
 くお前の處るへ乃公が實證を見届けに這入つた晚といふ者は蝙蝠安に目  
 玉の富、那の二人アリの破落戸が時々機嫌を開きに來て、何んと若旦那  
 うもおとみさんの處るに此うして遊んでお出なさるなら少々ツ、小遣ひ取  
 をなすつては何うでせう、私等では仕様がなすが極宜い旦那方が、堅氣  
 のお店の番頭さんで慰み事をしてたいが靜かの處るで人の氣の付ない處るは

ないかと探して居るが然ういふ連中があつたらばお連れ申て來るから其  
 宿をなさいまし他の方から破落戸か飛込んで來れば私等二人りで防ぎま  
 す、夫で若旦那第一か寺と云ふ者が取れ宜いのが出來れば一時五兩や十兩  
 の金は這入て來るし、又た饅飯を取るとか又料理茶屋へ是を誂へて呉れる  
 といへば其ハチが皆な家へ這入るどうせ貴郎方は堅氣の商賣は出來ないか  
 ら然うしたら福々長者になりませうおとみさんとも相談して御覽なさいと、  
 蝙蝠安と目玉の富が乃公を勧めたがお前が然んな事は思はと云へば仕方が  
 ないが、どうだお登美、今のお前の相談で見れば藝者にも出られず何ぞ樂  
 な錢儲けをしたいと云ふが一番安と富に然う云うてどんな物だかやつて見  
 やうか」之を聞ておとみは素人の女なれば然んな事は思はと云ふが當然で  
 ありませすが根が長脇差の女房に三年もなつて居りましたから登然うサね、  
 夫が宜らう、成程此節は諸方で旦那方が内會をするといふ話を聞たが夫も  
 やア興三さんやつて御覽な興、お前が萬端承知して呉れば、搦手で粟の掴み

取り夫ぢやア一番やつて見やう」と茲に於て悪事には染み安い者と見えて  
無頼者の目玉の富に蝙蝠安の兩人に吹込んで興宜い對手があつたら連れて  
来い」と云つたから渡りに船と喜びまして或夜シヨボク雨の降る晩を  
抑も開業式として何處からどう連れて来るか至たく堅氣の商人體の者もあ  
り又はお店風の誤魔化し者もあり又職人の連中などを連れて来て奥の小座  
敷に於て當時流行の花合せとやらを試みるみて居ります、曉方に其の連中は  
退散をして何程か金を置いて往つた是が病み付て後には毎夜のやうになり遂に  
は面白いからおとみ與三郎も此の慰さみ事に手を出し遂には晝夜ともなく  
入込み實に亂暴狼藉に相成て参りました、然るに此の賭博の段々と盛つて  
参る中に最も熱心に参る大門通りの鏡物問屋奥州屋藤八といふが至つて  
道樂者で此の藤八が與三郎を全くお登美の亭主とは知らず矢張り家の食客  
と思つた處ろからおとみに大層慰着いたし、事にかこつけ小當りに當つて  
見ると云ふとおとみも大體の者なら引掛ても仕方がないが名におふ大門通

りの鏡物問屋男振りは悪いが金切が大層奇麗だから與三郎には決して知れ  
んやうに家では正逆と云ふ處ろから近處の殿屋邊りへ引出しまして是から  
旨く御馳走を致しました藤八は魂ひも天外に飛ぶの思ひを爲し愈々おとみ  
くと夢中になつて居るから纏めた金をも送ります後にはおとみも與三  
郎に打明ると初めは少しく嫉妬もやきましたが段々ツツしくなつて終  
には今時然んな野暮の事を云つて一人りや二人りの旦那取りをするのを嫉  
妬をやくやうでは遊び人にはなれぬエとイヤに開けて参りましたから藤八  
が来る度にプイと裏口から遊びに出たり又は戸棚に這入て寝て仕舞つたり  
致すと云ふ、因に依て一寸申上升が劇場で與三郎の狂言をする時には此の  
藤八を太左衛門の次の番頭のやうにして藤八は大層道化役でありまして玄  
治店はこの藤八が持て居ると云ふ位、然れども是は至たく井筒屋の番頭  
ではありませぬ、鏡物問屋奥州屋といふ歴然とした一軒の主人で御坐い升、  
扱て昨日と過ぎ今日と経ます中に此頃は世間が少し八釜敷く、其筋から



致して博徒を狩立てるといふので素人も怖がつて餘り手慰みを致しません、依て玄治店のお登美の家も大ひに淋しくガサツ者の出遣入りも失なり今では藤八一人が金主になつて一切此の家で贅澤の暮しをして居る中薄々與三郎の事も訝しいと藤八も氣が付いたら何となく問ひますると登馬鹿らしい、那ん十怖い人、それは實は妾の従弟で田舎に居て鉄助に顔を引き掻かれ那の通りの貌になり何處へ往つても置く處もない故に可哀想と思つて妾の家へ置てあるので御座います」と口先きでこなされると藤八は固よりテレて居るから「然うか」此方は成丈け返はぬやうにして居る方が金儲けがあると思ふから、與三郎も習はうより馴れるで中々如才なくなつて來ましたから藤八も其後は更に氣も付きません頼りにおとみに溺感して居ります、然るに或る夕暮の事雨がシメボク降り今夜は誰も來ないから宵の中から酒でも飲んで珍らしくもないが娛しまうと此う思つて登與三さん妾は是からお民を連れて此れは下女お湯に往て來るから淋しからうが獨りで待つて居て下

さい、序でに和田平へ少しばかり訊らへて來るから、腰で御飯を喰べやう、與夫は結構、餘まり遅くならない中奇麗に磨いて來なせエ登アイ然しやう、お民や糠袋を包んでお呉れよ、オヤ、雨が又降りさうになつて來た用心に傘を一本持てお出で」是からお登美は下女のお民といふを連れて洗濯と往て仕舞ひ、跡に一人り與三郎は火鉢の傍に茫然として居ると表ての方から這入て來たのは例の鐵物問屋奥州屋藤八流石に與三郎も自分の情面を自由にすると思ふから顔を見るのも快くないゆゑに傍側の戸柵の中に煙草入を持たまゝ這入り込み静かに戸を閉る、とは知らず藤八は腰にお登美やお登美さんや、ヤ是は不用心な、何ぼ取られる物がないとても誰も居ないアハ、ハ、ハ、甚いどうも不締りの話だなア、湯にでも往たんだらう、遠く往たといふ様子もないが一吸喫て往かう」と藤八は上へ昇り込んで「ハ、ア布團がボカ、温たかい處るを見れば今しがた、何處へ往たんだらう、一吸やつてる中には歸るだらう」と獨り言を云ひながら其頃ゆる古風の一

樂の筒から銀の煙管を取り出し薄舞の煙草をバクリ〜映で居る處ろへ表  
 てから又た一人男婦御宅かへ、姉さんお宅で御座いやすか」藤八は藤八だ  
 へ男へエ、是は御免なせひ、お登美さんは……藤八乃公も今お登美に用が  
 あつて來たが遠くへ往た様子もないから湯にでも往たらうと思つてるが、  
 お前さん何を御用で御坐いますかね男へエ、十二近所の者で御坐います  
 藤八「マア〜お待なさい、用があつてお出でなすつたらうから御遠慮に  
 は及ばない待てお出でなさい男へエ有難う御坐り升」と右の男は腕を見て  
 吃驚り驚ろき男、貴方は大門通りの奥州屋の旦那藤八乃公を知つてるか  
 前は……ヤア！お前は何か、確か左官の富八ぢやア無いか男へエどうも飛  
 だ所るでお目に懸りましたお前の藤八親父は左官の棟梁で此の近邊で随分鳴  
 らした男だが其の息子のお前は無難者の仲間入りをして魔障〜して居る  
 といふは心得違ひの男ぢやア無エか富八どうも面目次第も御座いません、毎  
 度お店で其の御意見をも頂戴して其時ばかりは氣をひやうと思つても持た

が病いで矢張り此うして遊んで居りますすが誠に時節が悪くつて……藤八  
 な事を云ふな自分の働らきが無エで時節が悪いだの不景氣だのと世の中を  
 嘲つといふが第一の了簡違ひ己れの働らき次第で時節の悪いの何のと云ふ  
 事があるものか……マア〜夫はどうでも宜いおとみに用があるから一吸  
 すうて居るが宜い」是から目玉の富八か鏡物屋奥州屋に對して何事をいふ  
 か、此れから有名の稻荷畑に於て富八殺しといふ世話講談の三の切りで有  
 り升

第十一席

暫らくあつて目玉の富八漸やくに富八旦那此の家は何の御用で御出でなすつ  
 たので御坐います、餘まり不思議で御坐います藤八「イヤ乃公は此間貴様の友  
 達編融安といふ奴に頼まれて二三人の朋友と花合せをしに來たが……藤八  
 、ア夫ぢやア那の時此家へお出でなさいましたか、此の家の代者の因縁話

を貴方御存じで御坐いますか馬代者と云ふのは、アヤサおとみといふ美しいのを」と云はれて藤八は自分が現在抱寝をする女でありますから何か様子を知りたいゆゑ藤一向知らないが藝者揚りか程の宜い年増だなア、夫は程の宜いのは當然へで御坐いますが旦那か前さん此の家の女に引掛つちやア往ませんせ藤イヤ然んな事はない筈何だか訝しう御坐いますねエ、旦那か前さんが此の家の年増に掛り合がないと云へば何も私が云ふまでのことではないが若しあるれば一寸念を入れて置きてエと思ふ事があるからです」  
 愈々藤八聞き度くなりましたから藤夫は何も仔細はない怪しい譯はないがホンの乃公も浩然の氣を養ふ爲め二三人の朋友と一緒に慰み事をして夫から二三度程の宜い年増だから酒を飲み合つた事があるが是といふ仔細はない筈、そうですか、夫ぢやア止ませう、意味無しに酒を飲み合つた處へ何も然んなに私ちが肩腕を張て然んな事を云ふには及ばねエから、ぢやアア止して置させう藤イヤ富八、けれどもマア、其處には色々蓋もある

が……富モシ旦那白場呉れても往させん、全たく世話をして置くに置くと被仰て呉れよば話まずせ」藤八暫らく考へて居たが藤をうも野郎のやうな人に嘘を吐ても往ないが實は因縁だ、笑つて呉れるな、乃公も外に妾を困つてあるといふ譯でもなし、マア此の位の女の女は近所にないから澤山金が入るぢやアなし月々に十兩か十五兩小遣ひをやれば宜いのだが實は乃公も困ひ者にしたんだ筈然うで御坐いませう、夫ぢやア旦那お止しなさい、悪い事は決して申しませんから藤ウム、止せと云ふのは夫アどう云ふ譯だ筈けれども旦那、私チが此う申したら餘まり下手張と思召しが御坐いませうが、私チの方にも願ひがあるが私チの願ひを聞いて下さいませうか、其の願ひを聞いて下さらなけりやア旦那への話も止しませう藤何だか知らんが云つて見る、筈願ひと云へば大體お解りに……藤金だらう筈夫ア最う御如才ないから皆な言はないでも……藤煽動てるな眞正の事を申し上なければ解りませんが實は今夜大橋向ふの安藤さまの大部屋に宜い賭博が出来たの

で朋友の安の野郎も先へ往て待て居る積り、餘まり一文なしでも往れませんが何ば私十等のやうな者でも三兩や五兩の金は持て往なければ仲間へ入れて呉れませんから色々工風をした上句此の家の年増に頼まうと夫でまじたら年増は留守で旦那が丁度御留守居番、宜い幸いと云へ共何だか變ですが三兩の金をお貸し下さいと云つた所が返す氣遣ないから貸し下されに願ひたい、乃を御承知で御坐エますか馬三兩の金はどうかしても遣らうが乃公の爲を思つて告げて呉れると云ふ事を先へ話して呉れ馬夫はア止しませう、何故なれば話して仕舞つてから何だ然んな事なら三兩は遣られねエと云はれた所が無證據だ、喧嘩をする譯にも往ねエ、旦那の前だが柳原で傳授を賣て居ります、袋るへ確と這入て居て六ヶ敷い事が上に書いて有りますから是はどんな事があるかと其傳授を見せて貰つてから跡で買ふ者はない、乃で確と封じて在て幾らくと高エ錢を拂つて初めて其の傳授書を見て筒棒りエ此ソな事かと云ふ譯で御坐エ升、是と丁度同じ事今かと

みさんの事に就て私チがお前さんのか爲に色々云ふ事もあるが三兩の金を見てからでなければ云ひません、成程夫では三兩先へ遣るから話をして聞して呉れ馬御承知なすつて下されば貴君も宜し私チも宜し」茲に於て八は去はば馬鹿な人ではないが女に掛ると此うなるものかお登美の服歴や何や彼や聞きたいがまゝ懐中から取出だしたる小粒を十二都合三兩富の前差出だすと目玉の富は押頂いてさうも有難う御坐エ升、久しぶりでもかりと光つた物が拜めます、其代り目と出て此方が勝利なればまたお返し申しやす馬イヤ、然んな事は云はんが宜い、餘まり返す風でもあるまい馬へ旦那は御如才がなくつて被爲入い升、有難う御坐い升」と富八は袋留の長い財布を出して三兩の金を入れ此つと巻いて懐中へ仕舞ひまして大さきに有難う存じ升、是から一ツ稻荷畑から大川端へ出て安藤の屋敷へ往てウソと儲けて来やす、御機嫌宜しう」と出て往くから馬待て、貴様は金を懐るに入れて仕舞つて肝心の事を乃公に言はねエぢやア無エか、汝傳

授の事を云つたか傳授料ばかり取て其の傳授を致へずに行く奴があるか  
爲成程、是は濟ません、自分の願ひが叶つたので安心をした者だから肝心  
の事を忘れて仕舞つた最う一番尻を落附け話をします、時に旦那真正に  
貴方此の家の年増を妾にしてお在なさるか爲然うくどく聞ねエでも最う先  
刻白状した通り捨て難い思ひから事に依たら家の女房を出してお登美を女  
房にしやうと思つて居た位な爲成程大層熱くなりましたねエ、世の中に  
は随分馬鹿な人もある者です、ねエ爲何を云つてゐるんだ馬鹿たあ乃公の事だ  
らう爲イエ、ナニ然うぢやアないんです、色では随分伶俐の人も馬鹿のや  
うになる事があると云ふんで……馬鹿計の事は云はねエで早くおとみの身  
の來歴を聞して呉れ爲此の家のお登美といふ年増は何でも以前深川の藝者  
だつたんです、其の藝者も唯の藝者ぢやアない、那の女の爲にはどの位  
人が死んでるか知れませんが、夫ア手こ下さねエが那の美しい顔に或ひ  
那の可愛らしい口に乗て親に捨られ、身上を渡し身を投げて死に首を絞つ

て死んだ者も深山あります、皆なお登美が殺したも同様、夫で選には江戸  
に居られなくなつて上總の木更津へ往て長脇差の妾となり先の喉アを殺し  
て仕舞ひ跡に乗込んで其の長脇差の女房になり、其の亭主でも大事にして  
居る事か江戸から上總の木更津へ何の用があつて来たか知らねエが遊んで  
居た横山町の鼈甲問屋伊豆屋の強り息子の乗平と異名を取た興三郎といふ  
情夫が出来たと思召せ、然うすると其中に亭主に目附つて其の興三郎は不  
ごくに切られ女の方は堪らんから大膽不敵にも木更津の海へ飛込んで仕  
舞つた、其の死んだと思つた奴が何うしたか廻り廻つた處るが其の乗平と云  
はれた男ががつかかり變つて面も身も傷だらけ、了簡までもスツリト變  
つて仕舞ひ、私ナ等の及びもねへ悪黨、切られ興三郎と云ふ者が此の家に  
這入り込んで亭主同様に成てるんで、此の家を拵へたのも井筒屋の番頭で  
太左衛門さんが妾にして此れ丈けに世話をして居たのを興三郎に廻り廻つ  
て以前の事を聞たゆゑ奇麗に家ごと那の女を興三郎に呉れて仕舞ひ夫から

跡が博奕の宿合對面夫筒持せ出刃庖丁でも振廻して詰りが金と来るだらう、何と恐ろしい話ぢやアありませんか、けれども大體様子が訝しいから今まで引掛た者もないがお前さんは能く助兵衛、能く出列助、能くの二本棒………、餘り烈く云ふ少しは遠慮もしろ、是は失禮を申しました、併し旦那悪い事は云はないから止した方が宜う御座いますせう、世馬成程思ひ當る事がある、其與三郎といふは説は怖いが然んな悪黨ぢやアないと思つて居たが夫ぢやア乃公が見違へたか此の家で臺所で香物なんぞ切て居た女に聞たら從弟だと云つたッけが………、爲大違ひで御座います、此ういふ顔色になつたのも皆な妾ゆゑ一層悪いなんて已惚て居てお前さんのやうな方が来ると金を取る爲め手玉に取て訝なア鼻息の一つもしてスツカリ驚かして歸つて仕舞ふ其の跡でペロリと出す處ろへ與三が這入て来ておとみ宜かつたかアと跡は二人少差向い拾つたり食ひ附たり疑しむといふ寸法なんです馬成程、イヤせうも宜い事を知らして呉れた町思ひ切らう、其の

大左衛門といふ人の眞似をして爲然うかしなせエ、悪い事は云ひません、旦那妾を置くなれば最う些と若い可愛らしい悪癖のないのを御世話をしませう、丁度人形町に獨り心當りがあります馬、イヤ乃公も女嗜といふ譯ではない、ツイ一時魔が差したので妾が欲いの何のと云ふ次第ではないから外に世話をして呉れるにも及ばない、旦那言々云ひますせ、又た内証でやつて性悪に引懸つちやア往ませんと追従マラ、滑稽半分三兩の金を貸つて物語り、是から玄治店を立出でる、奥州屋藤八は無念に心ろ張り裂くばかり兎つ角つ思案に暮れて居る處ろへ、オヤ、誰か居るよ、下女一寸眞正に御新造様へ誰處がお出でなさいます」と格子を開けて、オヤ旦那で御座いますか、奥州屋の旦那様、ハ、奥州屋藤八で御座います、御留守居番をして居りました登、何で御座いますねエ、ツイ長湯を致しました夫にお前さん、悪意の人が二三人来て居てベチヤ、鏡舌で居て上らうと思つてもツイ上り悪くなつて例日より半時ばかり長くなりました、旦那今被入いたしましたか

藤、イ、エ先刻参りました登、訝しいちやアありませんか、今夜は大層驚いで被  
爲入る事、内儀さんに何か云はれましたね藤、イヤ然んな事はありませ  
登、然んなら一杯上れ藤、マア少し待て呉れ酒は止さう登、訝しいねエ……藤、お  
登美……ちやアない、さん、お留守番をして居りましたが何も紛失物でも  
ありはしませんか跡で又然んな事があつては面倒だ能く調べて貰つてから  
歸りませう登、アノサ旦那どうしたのねエ、旦那お前さん何うしたんです  
藤、や歸ります、藤八は羽織の紐を結びながら煙草入を差して突然飛出す  
登、アノ旦那、お歸りなさるなら無理に止やアしませんかマアどうした譯で  
す藤、お登美さんどうもお前さん……マア止して置ませう登、アヲ訝しいね  
エ、何を然んかに腹を立てお出でなさるか、お民や旦那がお歸んなさるか  
らお止め申してお呉れ呉、ハイ、旦那様、若し旦那様」と下女のお民が跡を  
追て出たさき歸つて来ない、お登美は火鉢の傍に座つて登、訝しいねエ、マ  
ア何日も目尻を下けて出列くとして居るのが今日に限つてどうしたんだ

らう、誰かに意地でも附られたか、と訝り言を云つて居る途端に戸柵を叩け  
て現はれたる奥三郎、お登美登、オヤ奥三さんお前戸柵に隠れて居たのかへ、  
那の人なら隠れないでもいぢやアないか、奥、お登美、只は置かれねエ」と  
突然、臺所へ往て出刀庖丁を持って飛出さうとするから登、奥三さん何えん  
だへ、然んな物を持って、奥、マア跡で様子分るから黙つて居る登、夫でもお  
前は刀物を持って何處へ往くのサ奥、何處へ往つても宜いから其處を放せ」と  
お登美が留る袖を拂つて奥三郎、縁切の出刀を持って稻荷廻を差して飛出しま  
した、流石のお登美も何だか譯が解りません登、ハテナ、マア訝しいぢやアな  
いか、妾が湯が長いとは云ひながら、其中奥三さんは戸柵に隠れ留守に來  
た旦那は妾の歸りを待て訝しな事を云つて歸つて仕舞ふ間もなく奥三さん  
が吉相變へて出刀庖丁を持って跡を慕つて行た、是には何を仔細がある事だ  
らうが楓張リ譯が解からない、ア、變な晩だ」とお登美も譯は解らず考へ  
て居る其中に小女が歸つて参りました奥、一寸御新造さん登、忌だよ御新造さ

んくとい言ひでない、何處かの武家か何かへ奉公をして居たと見えて御  
 新さんなんて妾やアまだ然んな事を云はれる身分ぢやアないよ、姉さんな  
 ら姉さん内儀さんなら内儀さんとお云ひな御屋敷さん見たやうで、然んな  
 事を云はれると返事が出来ない馬御免なさいまし馬謝まる程の事でもない  
 が……シテ旦那は何うしたへ馬大門通りまで退掛ましたか御宅へまで往つ  
 ても悪いと思ひまして歸つて来ました登宜いよ打捨てお置さく、夫は然ら  
 とお民用があるから宿へ往つて来たいと先刻か言ひだが早くお米の仕掛をし  
 て今の中に往つて来たら何うだへ、雨餘り降り降つて居ないから……馬ハ、  
 有難う御坐い升、夫ぢやア槍物町まで、御坐いますから一寸往つて参ります  
 登ア一成丈け今夜は歸つて来てお呉れ程々話もあるだらうが、尤も九ツ過  
 になつたら戸締りをして仕舞ふから歸らないでも宜いよ馬ハ、成丈け早く  
 歸つて参りますすが萬一遅くなりましたら明日の朝起き抜に歸つて参ります  
 登ア一然うおし、……一寸お待ち、此れは少ないが小遣ひに持てお出で

馬然うで御坐いますか、誠に内儀さんどうも有難う御坐い升登宜う覺えな  
 ね馬オホ、下女は支度をして馬夫では往つて参ります登傘を持てお出で  
 馬有難う存じ升」と十四五になる小女は出で、行く登那の子を連れて仕舞つ  
 ては不自由だが何んだか今夜は變的の晩だからそんな者でもマア聞かせな  
 い方が宜らう」臺所に取つて置たる處の酒を冷で湯呑へついでグツと干し  
 て美しく顔へ八の字を寄せて如輪木の箱火鉢の傍に片膝を立て朱羅袴の  
 煙管を突つて右の手を頬に當て、思案をして居る處へ裏口をがらりと開け  
 まして奥オ、お登美登ア三さん歸つたかへ奥誰も居ねエか登誰も居な  
 い、既足かへ、マア何うぞんだへ、氣相變へて飛出したから何うぞんだの  
 かと氣になつてならないが早く上つて話しを聞してお呉れな登誰も居ねエ  
 か登ア一誰も居ないよ奥水を一抔呉れ登水は其處にあるからお呑な奥エ、  
 此の水ぢやア無エ、酒を一杯呉れ」と冷酒を一杯グツと飲で胸を叩いて  
 奥時にお登美お前の留守に藤八が来やアがつたから遇ふのも何だか面白く



ないゆる戸柵へ一寸隠れたんだ、スルと藤八の布圍が暖たけエとか何とか  
 訝な事を云やアがつて座つて居る間もなく来たのが目玉の富八、夫から富  
 が自分が金を借りてエばかりにか前と乃公の身の上話し七分は嘘で三分は  
 真正十分偷儀を措りながら饒舌で遂々藤八を變な心持にして仕舞つた、其  
 の話を戸柵の中で悉皆りと聞て仕舞つたから那の野郎を助けて置てはまた  
 外へ往てどんな事を云ふかも知れぬエ、乃公の身置も然う何も悪事を働ら  
 いた事もなしお前も人を殺した事もあるゆエ夫を上總の木更津で長脇差の  
 女房を殺したの何のと云つて觸れ廻し、藤八位はどうでも宜いが是から先  
 きお前と乃公の身の爲に害をする奴だから實は今富八の野郎を追掛て稻荷  
 堀でばらして仕舞つた、雨が降てるから往來はなし誰がしたか知れる氣遣  
 へぬエからマア安心して呉んなさい、どうも仕方がない登、オヤ、  
 エ、マア然う、助けて置けない奴だからばらして仕舞つたとは與三さんお  
 前腕が上つたねエ、どうも今夜は間が悪い晩だからお民は宿へ退つて仕舞つ

たし誰も聞く者はなし夫は宜いが與三さんお前如才はあるまいが富八を  
 して留めを刺したらうねエ、留め……富八、留めを刺したかへ、  
 たア留めとは人を殺したら確と取て押へて胸と咽喉の間を刺して息の根  
 を留めるのが留めサ、然うしないと何日何時蘇生るか分らない、  
 んな事は知らなかつた、何しろ今日が手初めだもんだから……何ば手初  
 めだからつて留め位は草々紙を見ても芝居を見ても知つてさうなものぢ  
 やア無いか夫からお前刺した出刀庵丁は何うしたへ、  
 したまゝ置て来た登、  
 假令那奴が蘇生らないまでも若し役人でも通り掛つて其の出刀庵丁と  
 にされ調べられた其時にはお前ばかりか妾の身の上、暗い處へも往ねば  
 らぬ事に依ればお前の身體どうなるものか知れない故、此や斯うしては居  
 られない、御苦勞だが與三さん最う一逼留めを刺し直しに往つて来てお  
 れな、先刻は夢中でやつたけれど最う出直しは下さらぬ

エ、是は御免を蒙りたい雨は益々降て来たし、最う逆も往れない、どーだ  
 少しばかり錢をやつて近所の人を頼んだら馬鹿の事をか言ひでない、人  
 を頼んで留めを刺しに遣る奴がある者か奥夫でも乃公はどうも往れない  
 登どうも安心がならないから失ぢやア妾が一緒に行う然らんならか登美か  
 前一緒に道行と出掛て呉るか登アト然うしやう時が後れて人目に觸れては  
 面倒と茲に於てか登美は悪妻の本體を現はして大黒傘の逢合傘、與三と  
 兩人りで靜かに一目に立んやうに稻荷堀を差して來り、小さな聲で登美は  
 登與三さん此所等かへ興ウム、此所だ登愈々是は出掛て來て宜かつたねエ  
 彼是する中に最早や九月の上洗雨はザツザツと降て參かました、何れの  
 か知らねども鎗々と告げ渡るは四ツ當今の十時往來途絶た稻荷堀右手の處  
 方は大川端岸邊を洗ふ穂の音物凄く向ふに止樹の切てある船が二三艘繋い  
 であるが火の影の見えぬは空船と思ひ、固より前後に往來もない處るだか  
 ら篠つく加くの雨になつたを幸いに、ウーンと富八が苦しき息を吐き

ながら益いて居るを見て登夫ぢやア與三さんやつてか仕舞ひイヤか登美  
 先の荒拵へをして置たから留めたけはか前刺して呉れ互いに身に悪事か  
 つづゝあれば切ても切れないといふ中でそんな事があつても我慢をする  
 云ふ氣になる登臆病だねエ、待てお出で、我興てお出で遣て來るから」與  
 三郎は大黒傘を差して四邊りに目を配つて居るか登美の扮装は一字繁ぎの  
 浴衣の上に縮緬の半天を引掛け白縮緬の湯布を甲斐しくまくり掲げ突  
 然り夫へ往て登ヤイ富、誰でも無エ玄治店のか登美が來たんだ能くも與三  
 さんが蔭で聞て居るとは知らず那の鏡物屋の蔭八にある事ない事偷倭を摺  
 り兩人の者の身の詰りになるやうな事を吐したな、此んな事ぢやア飽き足  
 らねエが生息子の與三さんが腹に据え兼ね初陣の手並には出刃丁を  
 本遣り留めを刺すに歸つたのが半時ばかり己を苦しめた天罰だ、男に代つ  
 て横櫛か登美留めを刺しに來たのだから年増盛りの乃公が手で目出度く往  
 生してか仕舞へ」と血汐のトク／＼出る處るの横腹へ突通したる出刃丁

をば細弱き女の一生懸命クイと引抜く「ウーン」と蠢き苦しむを登美に於ては取て押へて留めをばスプリと突通す、此時遂に息は絶え悪の報いか富八は臨終致しましたに依て、確と見届け男の袖で出刃庖丁の血を拭ひ、腰に挟みし手拭にクル／＼巻いて帯に挟み四邊りにキツと目を配り小聲になつて登「奥三さん奥、オイ、く／＼登何だねエ、お前先刻の手並に似すブル／＼震へずと確乎としよ、誰も見た者はないがへ奥ウム誰も見ない死骸は何をするんだ登、直ぐ下が川だから此川へでも放り込んで往うちやアないか奥夫が宜らう、けれども死んで往く奴は六文あれば澤山だ其奴は先刻藤八から小粒で三兩貰つたから取て置たら宜らう登、成程お前の云ふ通り死人に金を付けてやるのは無益の事香奠代りに取て置う」死んだ奴から香奠を取る奴もないが財布の中から三兩の金を引奪つて富の死骸は川の中へトアーン、四邊りの血沙は後つく雨で洗ひ落し再び元の合々傘仕合宜しと莞爾り突ひ往んとする時、岸邊に繋いだ笠船の内不思議や聲あつて奥三さん奥、オ

ヤお登美誰か呼んだせ登、ナニ氣の故だよ」又も男が登美さん奥ソレの前を呼ぶぢやア無エか登、ホンにねエマア誰だらう」といふ中に奥の兩人さんお待なせエ」と彼れ打分けて立ち出づる是れ何者ぞ……

第十二席

稻荷堀の河端に迷るもやらすお登美奥三郎立止まつて我が名を呼びしは抑も誰ぞと腰に疵持つ二人りが互いに腕を見交す折り傍へに繋ぎし苦船より岸邊に上つた一人りの男奥三さんおとみさん、僅かの中に大層腕が上りやしたねエ奥、ヤア汝は安ぢやア無エか、お登美編蝠安だ」お登美は登、ホンニ安さん何うしてお前此ンな處ろへ……登、エー富の野郎が金算断に往やして其の金が出来たらば二人り一踏に安藤の屋敷の部屋へ押掛やうと此の空船に待て居る中二三日タマンマリ寐ねエから舌を敷寐の舵枕、ツイとろ／＼と寐た中に先刻岡での人殺し、怖々ながら出て見ると突かれた奴は目玉の富、

其の殺人者は與三さんと確かに機子は見て取らぬが今時、時代の朋友の敵討とも出られぬ死ね者貧乏殺し得と不實のやうだが又た元の船に這入て夢の見直し、再びとろりと云ふ處へ、出直して来たか兩人り連れ、御念の入た留めを刺したが、女に似氣ない横櫛のお登美さん其傍から與三さんが目玉の富が貫つて来た三兩の金まで巻上げて往なるとは商賈人も既足で逃出す、今時の素人は油断がならぬ、お二人りさんとも宜い脱だ、其う此う云つて忌に文句を列べたから定めて安が朋友の敵を、討つ爲め来た者とお前さん方思ひませうが今云う通り死ね者貧乏、どうで此の野郎は満足に死ぬ事の出來ぬ奴、此位わの事は當前だ、死骸は此儘上瀬が引て往やア遠州灘か唐天竺の先までも其の往く先は決して知れる氣遣エ御座エやせん、固より無宿者だ、跡腹は病めぬ、只証人は蝠蝠安、お前さん方の出やうで善にもなれば悪にもなる、若し私ナも居込みだから若手の衆には叶はぬ、どうぞ與三さん是からどうか口留めと思つてお二人りして私ナ

を可愛がり樂隠居で遊ばして置て呉れとも云はねエが時々どうか海泊りでもさして間の宜い時に酒の一盃も飲ましてお呉んなせ、然うして下されば今夜の事は假令水責火責に遇をうとも決して白状致しやせん、然んな蝠蝠安ぢやア御座エやせんからどうぞ可愛がつてお呉れねエ」おとひは完爾り笑つて善にも強し悪にも強いは道樂者、與三さんどうせお前も是から理たけの、いつた身體だから一人や二人此ういふ悪黨を味方に使つて置かなけりやア始終都合が悪いから是から安さんを相談相手に、手一安さん賢澤の事は出來ませんが……安宜い方の相談相手にはならぬが悪の方には扱目のない此の安五ア随分力になりやすから姉さん然うしてお呉んね、兎も角今夜はお宅まで御供をして往やせう」と是から惡黨の無頼安に取巻れたが抑も與三郎の身の終り此の惡事の口留めとして五兩又は三兩と屢々無心に參る是を成らんと云へば稻荷廻の一件を其の筋へ恐れがならんと噂舌つて出たらせんものだと言はれ、威しの強嚇文句、一寸逃れにグス」と

早や其年を経て仕舞ひました。今では切られ奥三郎に横槍お登美と浮名が  
 立て宜らぬ風説、遂には玄治店の家も二足三文に賣却なし。横山町の鮫甲屋  
 でも可愛さ餘つて惜さが百倍、親類中にも寄せ付ず一人息子の奥三郎を政  
 府に願つて勘當届け、其頃我子を勘當するといふ事に付て政府へ届けを出  
 せば親子の縁が切れるといふ已に奥三郎の身は當時無宿の遊び人、元の姿  
 は消失せて見るも恐ろしき面相となり一寸先は暗の夜と固より好いた二人  
 り連れ江の島鎌倉函根の湯治、近い所は大師河原、秋の紅葉は鴻の臺、  
 四季折々の遊びを極め遂に愈々身の置き所もあくなりまされたがさうく  
 旅館の飯も食て居られないと彼は相談を致して燈臺元暗し一層繁華の土地  
 で可なりの家を借りてお登美の色香で宜い島を引掛やうと頃しも五月上旬  
 (之は玄治店の翌年の事で御坐います)柳橋の此方同朋町の藝者新道通りです  
 ると二階家で表に格子が立ち六疊が二間に勝手が付き一寸趣きのある家で  
 造作附貸家といたしてあります、お登美は之を見て奥三郎さん中に這入て

見なければ解らないが一寸手頃の住ひではないか奥然うさなア、掛屏は各  
 に負ふ同朋町粹な奴ばかり住つて居る所ろだが一つ中を見てエものだ向ふ  
 の家で聞て見れば解るだらう……御免なさいませし、ハハ何の御用で奥に向  
 ふのアノお貸店の札の貼てある家は那れは何所で御差配をなさいます、家  
 主は何方で御坐います女ハ向ふの家で御坐いますか、直其の四五軒先の  
 格子の立た家で萬兵衛さんと被仰います其所が家主で御坐います奥有難う  
 存じます」是から兩人は最う洒突になつて居りますから遠慮なく萬兵衛と  
 いふ標札の出で居る家へ参つて奥御免なさい」家には今丁度主人と覺しき  
 が公事出入にでも懸つて居たと見え北町奉行から歸つて来て女房を對手に  
 手柄談し家主の萬兵衛が西オ表へ誰か来たぢやア無いか若ハハ隣郎です  
 か奥御免下さい、家主の萬兵衛さんは此方様で御坐いますか女萬兵衛は手  
 前で御坐い升、一寸お前さん何だか伺つて見る女何ぞ御用で……奥へエ  
 外では御坐おしません、アノ二三軒先に二階家の格子の立て居ります御貸家

で御坐いますかどうか中を拜見致し度う御坐いますか……」女房は中へ入  
 て相談をして萬兵衛が出て参り馬然うで御坐いますかお前さん、那の先の  
 空家を見にお出なすつたか、マア一喫お喫り今お目に懸る、種々アノ家は  
 因縁があるから話をしなければならんが兎も角お目に懸やう只左様で御坐  
 いますか、どうも恐れ入ります馬ナニ恐入る事はない、店を借りて呉れ  
 ばお得意だサアお出でなさい」と是から鍵を持って萬兵衛が出掛ながら與三  
 郎の貌を見て叱驚りした様子、與三郎は早くも見て取り與三郎の貌色が怖  
 ろしいので初めて御覽なされると皆さんが膽を潰すが是でも化物では御坐い  
 ません人間で御坐います馬常談云つちやア往ない、飛た事を御仰る、時に  
 表てにお出なされるのは御内儀さんですかね」お登美は小腰を屈めて登不思  
 の御縁で御厄介になります」と是から萬兵衛先に立て兩人を伴ひ二三間先  
 きの空店の格子に懸てある錠を開いて中じきりの障子を明け雨戸をがらく  
 明け馬器用に出來て居る家です、外の長屋と違つて或る隠居さんが念入り

に建てゝ萬年も住うと思つた家で木口も宜し處でも何でも今年一年は取替  
 ないでも宜ひ、此でも造作疊建具、マア二階の障子から表の格子まで附て  
 居る與成程是は結構だが是で何の位で御坐います馬其の造作が十兩とい  
 ふんだが夫はマア御都合に依ては一時でなく、ても宜い、家賃が一月二分  
 でげす、是も御都合で面倒ではあるが日掛でも宜い、交際と云つても向ふ  
 三軒兩隣さう、極世話がない何しろ御存じでもありませんが皆な粹な人は  
 かり住で居る處で理屈張た事はないが亂暴者の方ちやア随分私も引けを取  
 る氣遣ひのない人間與私しも元は若旦那といはれた者ですが不手した事か  
 ら怪我をして今ちやア是といふ稼業もなく暮して居りますがどうぞ何分お  
 願ひ申します馬及ばすながら又御相談も致しませう、私の方でも堅氣よ  
 かは御前さん方のやうな御風體のお方が好む處る、丁度宜い乗込んでお出  
 でなさい與ハイ有難う存じます」と此の家主の萬兵衛と云ふ人は恐ろしい  
 度胸の宜いどんな物に遇つてもヒクともしない町内が靜かでは己れの器置

が現はれないと云つて朝起きて神々を拜むにも町内騒動なさしめ玉へと拜  
むといふ位の大膽の男、飯は自分の家で食て旨くない町奉行の腰掛で飯を  
食はなくては、落附ないと云ふ店子が喧嘩をしたの又は不始末をしたのと  
諸方から尻の来るのをボン／＼と受込まして澤山尻が来なくつては面白く  
ないといふので尻を三ッ合せた酸漿の絞の附た羽織を着て居る、年五  
格好、興三郎を悪い奴、お登美を只の鼠ぢやアないと百も承知で早速歸が  
極つて直に引移るといふ事になりましたが古川に水絶す十兩位ゐる金は貯  
へても居りましたから造作等も買ひ其の頃の事ゆえ別段に店受人も入らず、  
扱此所へ来て形の如く長屋中への蕎麥振舞近附も濟んで、雇ひ婆アを一人  
置き住で居る中に五月六月、最早や兩國の花火も濟み彼是六月末に相成り  
ました、或日お登美は興三さん良の家が目附つて越して来たのも昨日今  
日と思ふ中早や二月三月になり是といふお前の稼業もなし妾も種考へた  
お家主はあの通りの人だから些とや少と妾等の身體に言辭の出来ないうや

な事があつてもどうか誤魔化して呉れるに違ひないから人のしない事を一  
しやうぢやアないか興人のしない事………互相對間男を押初めて金を取るの  
は河うだへ鼻然つア面白い、お前の容貌なれば随分引掛るだらう、シテ何  
ういふ工風にする積りだ登か前忌に甚助を起しちやア往ないよ、お前が何  
處かへ遊びに往てる中に妾がマア鼻の下の長さうな奴を引掛て酒でも飲し  
て何だとか彼だとか持掛て蚊が食ふからと蚊帳でも釣て引張込んだ處へ  
合圖を定めて置いて高い聲では云はれないが去年の九月稻荷堀で的一件の出  
刃庖丁でも臺所から持て来て蚊帳の釣りをボンと切て間男見附た其處動  
くな二人り重ねて四ッにする八ッにする十六にする三十二にする例のヒ  
カリを極るのサ、スルと傍から妾がブル／＼震へながらお前さん早くお逃  
なさい、若し此のお方が悪い人ぢやアありません皆な妾がと云ふと其奴が  
逃やうとする野郎逃して成るものかと捕まへる、乃で掛合となると七兩二  
分と云ふ極りはあるが對手に依ては纏めた金も手に入れるも中には二十兩

三十兩位で負けてやるのもあるが何しろ趣向は然んな事サ」與三郎は手を拍て興成程此つは面白い乃公の顔色でウンと一つ頭張れば口敷利かねエで幾らかづゝにやア屹度成るぞお前は素面で巾の利く男屹度宜い鳥が掛るだらうよ與手初めに誰が宜い登まだ心當りはないが何でも金のありさうな奴でなければ往ないのサ與夫ぢやアお登美旨く遣て呉んね」小人閑居して不善を爲すと茲に夫婦が馴合間夫をしやうと相談をしましたが此の段に掛つた人は不仕合、然るに丁度其の年の七月の事で御坐いましたか話が一才二つに別れるやうだが其頃柳橋の萬八樓、此頃代が代つて日本造りの立派の普請が出来た龜清樓の處ろが元の萬八樓でありました、此の萬八樓に荒物屋の參會が有りました、江戸中の荒物屋が寄つて規則を結ぶ爲の參會凡そ五十人ばかり集まりましたが處ろが參會と云ふものは其頃は規則を結ぶといふはホンの附たり大方は遊びで夫ゆる若い者を出すのは宜くないと堅い家では老人が参りますすが丁度芝田町三丁目の荒物間屋其頃蓬松と之

を稱へ芝では屈指の身代で其の蓬松の屋號松屋當主の名は兵衛といつて年齢は三十格好の人、此人が往て又た仲間で芳原へ往くとか深川へ往つてか云つて餘計の散財をしなければならず、ト云つて實際だから往ないと云ふ事も出来ねばいつと老人が往たら然んな馬鹿の事を云ふ者もあるまいと六十餘になる隠居樂齋といふが乃公が俸の代りに萬八の參會へ往うと云つて當主の代りに隠居が出掛て来た、スルと大分昔し馴染が居りまして里イヤ蓬松の隠居さん、お前さんモ年を老たが私等も最う往ません、當年五十八だ、貴所は年を老ても相變らずお壯健ですなア樂イヤ最う往ません、今年六十三で俸が三十二で孫が二人あります里夫は結構併しまだくツヤクして居ますね、六十三ではお若い頭を下し確として居れば漸と四十格好で……樂モシノ、然う油を掛ても變りませんよ、割前だけしか出しませんせ乙時に御隠居さん老人仲間で一番浮れは何です、堤の茶屋兎角藥舖が拂え切れすと云ふ川柳があるが彼所まで往て戯れないのは野暮だ、隅田の上流



に一葉を浮べ、松亂沈んで梢に乗込む今戸橋、三谷へ上つて堤八丁を鼻明  
 で見返り柳之もん阪大門這入れば仲ノ町野暮の遊びと出掛やうでやアあり  
 ませんが「松屋の隠居樂齋は悴が来て道樂者に誘はれては成らんと自分が  
 代りに来て矢張り遊びに出掛ては何にもならず殊に六十を越えた老人の癖  
 に應遊びも出来まいと勤める人々には宜きやうに云い共に連立て往く積り  
 で下へ降り折詰を拵へて居ては見附ると密と履物を出して買つて柳橋の萬  
 八を抜出した、時に七月頃の氣候でありますから空一面に掻曇りまして夕  
 立模様になつて来たが柳橋を越えるが否やトツト云ふ大降、車軸を流す  
 が如く筑波の方から致して大雷がゴロ／＼／＼跡に亞いて小雷がゴロ  
 ェロ／＼、夕立や法華かけ込む阿彌陀堂と、東西南北に奔走致して濡れじど  
 競ふ往來は織るが如く、松屋の隠居樂齋も兎も角雨宿りをしやうと同朋町  
 の隠者新道へ飛込んで少しく蔭の出で居る軒下に這入て上布の帷子の濡れ  
 たのを最と借さうに打眺めて居る、此時松屋の隠居の姿は縞紗の羽織を懐

ろに入れ茶博多の帯に薩摩上布の帷子、雪駄穿にて老人でこそあれ洒落た  
 隠居、一時の凌ぎに格子の表てに身を寄せて袂を束ねて突くやうな雨を暫  
 時凌いで居りましたスルと内には抜戸が二枚立て六疊二間の氣の利いた住  
 ひで、中には雨の降るのを少しも恐れず一中節の極澁い歌を中音でやつて  
 居る粹な年増が居ります、抜戸が立て居りますから確とは解りませんが隠  
 居の樂齋獨り言樂所拵とは云いながら粹な人が住つて居る、何者の住いで  
 あるか、藝者屋とも見えないやうだが……「と思つて居ると門口に雨宿り  
 のあると云ふのを見て居つた此者は何者ぞ即ち横櫛か登美の家貴方其處  
 にお出でなさると雨が強う御坐いますから矢張り濡れます此方へ這入い  
 んなさいまし樂どう仕りましたか断りも申さず御軒下を拜借して相濟ませ  
 ん、どうぞお構い下さるな登イエ此方へどうぞお掛下さい」隠居も些とや  
 少との散財はあらうと乃は通人、お登美は門口をがらりと開けて登、どうぞ  
 此方へ……オヤ貴方はアノ芝田町の松屋の旦那ぢやア御座いませんか樂へ

エ、松屋安兵衛今は坊主になつて隠居樂齋オヤマア久しくお目に懸りま  
せんねエ、一寸芝の旦那樂オヤオウも見たやうだが年増になつて居なさ  
から……ウムお前は仲町の梅本に居たおとみさんかへ登ハイおとみで御座  
いますよ再何うしてマア此處で、久しい事だのう登、正にまだ妾が年の往  
ない中で、最う七年ばかりになります。旦那貴所は相變らず若う御座いま  
ずねエ樂若い處るか、此通り坊主になつて松屋の家は悴に譲つて今ぢやア  
隠居の身の上サ、時にお登美さん何うして今此處に居るへ登妾も貴方、那  
れから後ち木更津の方へ移ぎに往ましたが不仕合せが續いて今ぢやア獨り  
者で別に便りのない身體、若し旦那」と隠居の顔を睨みに見て時ならぬ紅  
葉を顔に現はせしが是ぞ即ち松屋の隠居樂齋が惡魔に引入られる端緒と  
後にぞ思ひ知られたる

第十二席

女の黒髪にて糾れる網には大衆も驚くと宜なるかな、六十を越えたる松屋  
の隠居樂齋が雨宿が縁と成つて引込れた同朋町の於登美の家、流石昔深川  
で兩三度呼んだ事もありませんから無下にも離れず元より野暮でない隠居の  
事でありますから紙入より致して金壹兩差出しました樂お登美さん登ハイ  
樂是は餘り少ないが實はマア何んぞお土産と云處だが俄の事故何んにも持  
たず其代りと云ふでもないが失禮ながら取つて置いてお呉れ登アマア御  
隠居様何で御座いますねエ妾しは然う云ふ丁見ではありません、何でもか  
年はよつて居るが粹な御方が雨宿りをして居ると存じまして軒下にお在な  
さるも何で御座いますからお招き申したので御座います、斯な御心配では  
か氣の毒で御座います實に貴所はお若くつて在しやいます樂相變らずお前  
は甘い言を云ふが吾儕も今では隠居の身で今日も柳橋の萬八で仲間の参會  
があつて悴が往つて又芳原へでも誘はれては迷惑と吾儕が代りに行た所大  
勢の人に勤められて是から芳原へ行と云ふ悴の代りに親父が来て自分が往

つては何にもならず、殊には最う頭を丸めた老人が廓遊びでも有るまいと程を見て逃げやうと逃げ出す途中で俄雨に思はず走込んだは、格子造りの粹な一構、宅には麗しき屏にて中音に一中節を語つて居るが大分さる人の權妻か、何れ苦勞人の果で有うと心ともなく聞て居た處が親切な言葉に這入た宅はお登美さん、お前の宅とは不思議な奇遇、于時お登美さん何をして居ると云ふのも餘り野暮らしいが、見れば格別家業もない様子……登色々には譯も有りませす事ですがマア待つて下さい」と格子段を半分計り下りて登婆や歸つて来たかへ「雇ひ婆々と見えて婆ハイ、姉さん何ぞ御用で御座へますか」お登美は耳に口を寄せ何ぞ訊へを致すと云ふ様な様子隠居は樂モシくお登美さん構つちやア往ない、今日は用達だから雨が止めば直に出かける、お登美さん且那何も差上やアしませんか歌の宅へ来ても口を濡さずに歸るものぢやアありませんから待つて下さい于時御隠居様昨日今日と思ふ中に深川で貴所の御最負に成つたのも最う五六年に成りませすか

色々妾しも不仕合が續いて亭主見た様の人もありましたが縁が薄く……く離れ最う藝者に成る氣もなく今では近處の藝者屋の下地子扱へ一中節を稽古をして細い煙りを立て居ります、何も御馳走は出来ませんが其の代りにマア御緩りと御遠慮さういからお晝寐でもしてお在なさい」と隠居の方を睨に見やる、彼是する中に此處へ酒肴が出て一寸小酒宴が始まつた隠居樂齋も舊し取つた道樂もの樂今の婆ヤと云ふは何だ登、ナロ彼れは雇ひ婆さんで御坐へます然うかへ聞て置かないと往かんから「懐から金二朱を出して樂是は少いが婆さんに遣てお呉れさう……一寸婆やんお客さまからお前には是を樂……オヤ誠に有難う存じます」云ふ中に日は暮れて仕舞て、筑波の方から致して最前からの雷が又もゴロくくくと再び鳴り出す、雨はザアザツと降つて参りました樂少し晴れて来たが何も未だ六ヶ敷と思たら又やつて来た、吾儕は雷が大嫌ひだ登妾も嫌ひで御座います蚊帳でも釣りませうか樂イヤく最う少し待つたら其内にやむだらう」と云ふ

中に雷は益々強く成り雨は盛りになり酒は半ば宜加減に酔た時分を見てお登美は怖いからと蚊帳を釣り登り婆ヤ一お前は降り強いが今の中お湯に入てお在な跡は宜いから等ハイ、夫では左様致しませう少しお頼み申すと婆々は氣轉を利かして強い降りの中を出て行く登り御隠居さん這入て下さい妾しも怖くつて往けません」松屋の隠居も吾れを忘れて其蚊帳の中に這入つたが徐々禍ひの懸る端緒と成り、此様の事を細かに辯ずると當今は猥褻なりと云ふお叱りもありますから程よく簡單にお話しを致して置ませす、彼是する中に雨も晴れ雷も静まる隠居は思はずとロリと間眠ます折柄、下から致して援足差足上つて来た一人の若い男、此時隠居は人が上つて来ると流石年寄りの事だから目を細目を開て様子を見て居ると云ふと單衣を着て白木の三尺を落ちさうに締め何やら手に携へて居ります若者其影を行燈の灯影に見て驚いた隠居面部から致して身體へ感まして敵ヶ所の疵二目と見られん様なる處の悪相ハテナ賊かと四邊りを見るとお登美は

寝て居る様子寝込んで居らば起さうと思ふ中にソツとか登美は隠居の寢息を伺ひ起き出て蚊帳から首を出して一才お前旨く往つたよ男何んた種は何んた登り種は芝の方の坊さんだよ男ナニ芝の坊さん、増上寺の大僧正か、其んな者ぢやアない、妾が深川で藝者を爲て居る時に忌味はないが二三度呼ばれた事もある蘆松の隠居萬入に參會が有つて歸りの途中雨に降られ妾しの宅の軒下へ雨宿りをしたのを引揚げて酒を呑まして雷の嫌を幸ひ蚊帳を釣り今引込んだ處年寄りの事故酔つて寢込で仕舞た男旨く往たなヨシ押へて居る」と云ふ中に下へトソソと下ると云ふと再び上つて參たが出刀庖丁持つて突然り蚊帳の釣り手を切拂ひます此時迄隠居は何も云はずに居ると云ふと片足を揚げて隠居の横腹を蹴るアツと云ふて逃げ出さうとするを男ヤイ太い坊主だ云ふまでもない間男だ覺悟をしろ隠居何卒御勘辨男御勘辨もア勘辨も在るもソカ切られ與三と異名を取つた無頼者の大將分だ俺れの女房を犯さんで生しやア〜と寐て居るからちやサア坊主覺悟しろ重

ねて置いて四つにするから尼も覺悟の上だらう」と云れてお登美もハツと  
合せ鷲與三さん最う目附つたら仕様が無い逃も隠れも仕ないから存分にし  
てお呉れ此お方は元と妾しが深川に居る時最負に成つた御隠居さま奥喧い  
譬へ昔し何で有らうとも今じやア戸籍迄も這入つて在る俺の女房其女房を  
犯さまれて黙つて居ては俺の名前に理か附くサア隠居手前と斯なるからに  
やア覺悟した事だらう」此時隠居は手を付いて奥先づお陰かに願ひます成  
程何と云はれても仕方がない間男に違ひないよしや淫な事はせぬとも一寢  
床に寝て居れば然う云はれても仕方がないけれど親方亭主も何にもない  
と云ふ處から氣が緩んだが併し年寄の僻に譬へ亭主がないと云つて女はか  
りの處へ這入ると云ふが此方の過り今更願だ處が仕方はない何ふか話しを  
附けませうから荒い言を云はずに神妙の懸合ひを一願度御座へますの共  
に吾俺を殺して仕舞へば最う六十三不足ない身置故夫は何うでも宜けれ  
も其んな荒言をせずと大概話しの附く事なら然うしてお貰ひ申度此年を取

つて間男をして切られたと云はれても餘り外聞が宜かい話し何れを隠さう  
吾儕は芝田町二丁目松屋安兵衛と云ふ荒物問屋の隠居樂齋と云ふもので御  
座へます今では悴に名を譲つて悴の手前如何にも面目ないから何か勘辨し  
て呉れる事なれば然う願ひます奥成程段々譯を聞て見れば一理有るが併し  
自分の女房を煙草一服吸ふ間でも抱寝されては云ひ分が立ない夫ぢやア隠  
居さん道を附けると云ふのかエ樂何うか親方何程でも附けませうが今日は  
參會に參つたので多分の事も持合せが有りませんから何卒斯して下さい明  
朝五ッ過ぎ時に吃度掛合を致して貴所の腹に入る様な話しを致しまするか  
ら今晚の處は無事にお歸しなすつて下さいまし奥何んぞ今夜無事に歸せ明  
日の朝五ッ時分掛合を寄來すと其んな手ぬるい事を承知する奴と思ふか手  
前を押へて置て是から芝田町二丁目に入を遣つて當主に逢つて表向に掛合  
をする積り玉を逃して何うするものか樂御尤もで御座います併し表向き悴  
や見世の若い者に知られては何にも成らず何卒お願ひで有りませうから吾儕

が今晚歸れば明日必ずお話しを附けますから奥夫ぢやア斯うしよ俺が今夜  
芝迄お前を送つて往き確と宅の様子を見届て安心をして宅へ歸れば夫れで  
明日の五ツ時に使ひが来なけりや蓬松の宅へ嗚鳴込ひから夫で宜らう奥夫  
れは宜しう御座います奥けれども嗚鳴込にした處が何も證據が無くちやア  
いけない念の爲めに此單羽織を預つて置くから然う思へ奥如何とも貴所の  
思召次第併し態々お送りに及ばんでも私しは間違ひのものでは御座いませ  
ん奥然うでない頃日は油断のならない親爺が多いから大金持と見せ込んで  
頼だ誤魔化し者が多いから何しろ一所に出掛るところ、女汝は縛つて置  
くんだが縛つたつて縛らないで同じ事歸つて来る迄盜所の隅の方にも座  
つて居る」お登美は此時黙然として居ります内に奥サア支度をしる」と上  
布の帷子に博多の帯を出し樂羽織に紙入は預かつて置くサア徐々出掛様と  
是から隠居は屠所の歩みの羊の如く折しも雨も晴れたが丁度四ツ頃今の十  
時横山町から本町通りへ參つて眞直に大通りを日本橋京橋新橋金杉橋芝田

町二丁目へ來りし頃は最う九ツの鐘が「ン」と鳴つて居ります、左の側  
に大きな土蔵造りにて大層な一構へ親方は私が私しの宅で御座います、  
御安心なすつてお見届け下さい、私は此家の隠居で御座いますから明日掛  
合ひに吃度人を遣し奥ヨシ見届けた、併し乍ら又随分俺の家だと誤魔化す  
者もあるから宜から其處を叩いて確に中に這入り序に家の様子を聞いて奥  
れ樂まア貴所も疑ひ深い、併しもしや宅の者が失禮ながら貴所の其か顔と  
見でもしたら奥イヤ隠れて居るから、其氣違ひない」夫から隠居樂齋が表  
の戸を「ン」と叩き樂ヨソ今歸つたヨ開て奥太助長吉惣太郎店の者は  
皆な寝ちまつたか三之助鶴松ヨソ……「へエ……御隠居様で御座います  
か樂ア一俺だよ」戸を開ける音が「ン」……「マア大層遅く雨が降つて參  
りましたから俄雨では有りますすけれども定めしお困りで有うと存じ先刻傘  
を持佐兵衛をお迎ひに上げましたか最お歸りに成つた跡太分行違に成つた  
らうと思つて居りましたが大層お遅う御座いました樂ツイ雨宿りをして存

外に遅くなつたが定めし心配したで有う」主しも夫へ出て参りまして其阿  
 父さん大層御遅く能く御歸りに成りました」其内退々店の者も起きまして  
 各々にお歸り遊せ。お歸んなさいませと出迎ひの様子隠居は少々な聲で表  
 の方へ向つて樂モシ親方此通り當家の隠居に違ひ有りませんから御安心な  
 さいまし奥能々見届た早く這入んなさい」内からは「何殿かお人が……  
 樂イヤ兩國邊の人を頼んで送られて來ました。さうで御坐へますか夫は御  
 苦勞様貴所お茶でも呑つて在つしやいませし樂此方はお急ぎだから……」と  
 云ふ中に與三郎は隠居の袖を曳て奥隠居確な代物と云ふは俺が承知したが  
 五ツと云ふ約束だが道が遠いから入ッ迄待つて遣る夫迄に掛合を遣され  
 と暴れ込むよ」隠居は小聲で樂宜しう御坐います」と中に這入る締りの戸  
 をガラ／＼、與三郎は是を見届け直に同朋町へ歸つて参つたは彼是最  
 明方近う御坐へます奥か登美今歸つた」お登美は今歸るか／＼と思つて碌  
 々寝ない待つて居る處へ與三郎が歸つて來たから「さやか歸り言へて往つた

手先きは宜かエ奥ウム思つたよりは大きな掛へた袋細様子を見届けて來た  
 から安心して呉れマア言へて往つたナアア、言へて往つたナアア、言へて往つた  
 けば棒に當る、宜い標鳥が引掛つたナアア、言へて往つたナアア、言へて往つた  
 らう登然さ妾したつて思な思ひをして百兩位に成らないでは詰らない奥  
 お登美本當に彼は護者を爲て居る時分からのお客か登ア、二三度河長に尾  
 花屋へ呼れた事が有たつケ原因が有るか登ア、言へて往つたナアア、言へて往つた  
 奥夫はさうと昔しの事は何うでもいゝが前夜己が歸て來る時分に酒に酔つ  
 て居たが昔し馴染で何んとやらで些とは巫山戯た真似もしたらうで登三  
 さん其な事を云ひでない奥夫でも氣に成るから聞くのだ登何だナア三  
 に成る老爺を何するものか登然うでない頃日は年寄りの方が腕が有る若  
 い奴は喰ひ足りあいと云ふ話した登馬鹿ナ事を云ひでない奥何しろ一杯  
 呑んで寐よう」と淫婦登夫の二人が徳利に餘た酒を一抔飲んで明日の掛合  
 を樂みに二人りは床につきました、松屋の隠居樂齋よりの掛合は何

に次第に譲る、

第十四席

話變つて松屋の隠居樂齋は其の晩は寐もやらす致して此事が心に懸ると見え、例日より早く起きました。家の者には決して話されず、寐るなく己れの家の地面内而も奥の長屋に居る懸廻りの手代で金八と云ふ懸合事に馴れたる人物がある、此の金八の處ろへ煙草入を提げてプヨリと出掛て来て樂金八と云ふ家かへ禽被爲入いまし、御隠居様お早う御坐い升」流し元に洗ひ物をして居るは金八の女房、是は品川宿場女郎の上り三十恰好の年増女お上り遊ばせ、大層お早く被爲入いしました。金八は此方へ樂朝顔が開いたね。金八へエ入谷の方から二鉢ばかり貰ひました。朝顔は入谷に限りませぬ。樂然んな事は何うでも宜いが金八と云ふ前に内々で少し話したい事があるが内儀さんが居ては些と極りが悪いから何處かへ一つ使ひに遣て貰ひたい

ものた金へエ宜しう御坐い升、おみつ何だか知らないが御隠居さんが少し話があるがお前が居ちやア極りが悪いと被仰るから一寸使ひに往て来ねエか。女然う、妾が居ては話の邪魔に成ると云ふならば流し元を仕掛て居るが里沙門様へでも参詣をして来やう」と氣轉利かして女房が出で、往く、跡には隠居が四邊りを見て樂金と云ふ奴てどうもお前に予が折入て頼みがある。金何で御座います。樂昨日柳橋の参會で伴を遣ては又道樂者が多から訪らん處へでも引懸つて迷惑をしても成らんと予が伴の代理に出掛けた。金成るほど樂處ろが大勢の者が松屋の隠居入しよりだ氣晴しに吉原へ行かうとか深川へ往くとか予を取巻て隠さない様子、漸との事其の座を外して遊るやうに萬八を出て柳橋を渡つて廣小路の方へ出やうとすると那の雨と雷鳴だ、思はず同朋町の藝者新道へ這入つた、スルと愈々雨は強くなつて来たが傘もなし雪駄穿で仕方がないから四邊りを見ると二階家の格子造りの粹な家があるから暫時其の軒下で雨宿りをして居ると一中節の爪引き音色床



敷く聞ゆるは如何なる人かと思つて居ると其中に二十五六の年増が町摩に  
 其處に居ると矢張り濡れますから此處へ御這入はんなさい、と云ひながら、  
 ヒュツと顔を出して、オヤお久振貴所は松屋の旦那様では有りませんかと  
 云はれて己も能見ると當今では様子が變つて居るから一寸氣が附かなかつ  
 たが元深川の仲町で横櫛のお登美と異名を取つた藝者よ金へ、、、御座  
 居さん申儀ぢやアねエ何うしたんです、未だ朝飯も喰ない前に何だかいつ  
 て頼みが有ると云ふから態々女房を外へ出してお話を聞けば何だつまらな  
 い、年を成さつてのろけちやア困ります、何ば主従の間でも朝ツバラか  
 らひやかしに來ちやアいけません宜加減にしてお歸んなさい、貴所六十を  
 越えて色氣づいちやア困り升樂イヤ、金八どん是からが話しだ是迄聞け  
 ば訝しく思ふだらうが是から先が肝腎だまア其う先くいをしないで聞て  
 呉れ失からお前なまじひ昔し知つた中だから黙つても居られさいから金を  
 堂兩出した、すると其中に酒肴を出して別に亭主もないから決して心配に

は及ない杯と打とけて話しをする中に雷が酷くあつて來る雨は敷くなる處  
 が乃公も雷は思ひ先の婦女も思はれと云つて酒は宜加減にして蚊帳を釣つて  
 寐ると思ひなさい金へ、、モウ宜う御座います、朝飯前から馬鹿々々し  
 い旦那にいひつけますよ樂マアお前終まで聞んから分らない、是からだッ  
 レデ蚊帳の内に這入つて年増と一處に寐た處が乃公も勞れて居るからグッ  
 スリと寐込んだ金勞れましたらう樂マア金八どん然う口を出さないで聞  
 て呉んなさい酒に酔つてトロリとするといふと枕元に突立た奴は顔中疵だ  
 らけの二十四五の野郎で蚊帳の中を覗き込む様子、スルと其婦女がソツと  
 起上つて乃公が寐て居るふりをして居るのを全く寐て居ると思ひ何か内々  
 に囁いた様子此奴變だと思ふ中に其疵だらけの野郎が出刃庖丁を持つて來  
 て蚊帳の釣手を切り拂つてお定りの嚇文句重ねて置いて四ツにするといふさ  
 わぎ其處で乃公も何も譯が有つたではないがヤツとマア謝つて明日の朝迄  
 に掛合を附けるからと云つて紙入と羽織を質に取られて其疵だらけの奴が

乃公を胡魔化者と思つたか昨夜宅の前迄一緒に来て中へ這入のを突留めて  
歸つたが今朝五ツ迄に乃公の方から掛合に往くと約束をして又時刻が遅れ  
たら向ふから遣つて来て悴や店の者に知られては面目ないが就て金八どん  
迷惑だらうが前一つ同朋町へ掛合に往つて相當の話しを付て来ては呉れ  
まいか」金は是を聞いて金成程始めは大分粹な話したつたが中程から大層  
野暮の話しに成つたが何しろ是は困た者ですな問が悪い時にお出成さつ  
たけ樂乃公は今年に誠の間が悪い爲る事成す事黒星ださうで夫に易者が女  
難が有るから氣を附けると云つたが今迄何だ老人に女難が有る杯と馬鹿な  
事を云ふと思つて居たが女難と云ふは是だ愛宕下の先生が女難が有ると云  
つたが全く此事だ金八どん何うか旨い話しには往くまいか金宜う御座いま  
すけれども何も御隠居さん對手は附込た事だから此つはお定りの七兩二分  
ではウムと云ひますまいせ、少くとも何分か纏つた事ではなければウムとは  
云ひますまいが……樂金八どん此處に五十兩持つて来たが是で何とか紙入

と羽織を取つて来て呉れまいか金五十兩ですか宜うがす往つて見せせう  
樂夫では御苦勞だが一つ頼みます、此處に五兩お前の小遣に持つて来たか  
ら小舟でも乗つて往つて呉んなさい金有難う御坐います、御念の入つた事  
で確に五十兩お預り申す樂夫では何分とも頼みます併し店杯へ知れない様  
に金夫は宜う御坐います御隠居安心してお居で成さい」と右の金を納めて  
金八が莞爾り笑つて此奴は殊に因ると五十兩には及ばない何しる往つて見  
なければ分らないが旨く往きやア一寸小遣に有り附けると金八は胸に一物  
朝飯もそこく柳橋同朋町を差して来ると云ふ如何なる掛合に成るか  
同朋町のお登美の家では夫婦朝飯も済して早五ツを打つた時分登美モウ来  
さうな者だねエ與芝から来るんだから餘程暇が掛るだらう何十奴が来るか  
知らないが併し夫婦斯う遣つて仲宜くして居てはサモくなれわひで事を  
した様だからお前は臺處の隅方の處で泣顔でもして擲たれでもしたと云體  
を見せなけりやア話しが爲にくい登美大に然うだねエ最ラッロく仕度

掛ろうかと彼是相談をして居る中に程なく四ツ前に成ると表の格子を開けて男御免なさい奥ハ何様男エー私は芝田町から参りまして御座います男ア一然うですかマア此處へおあがんなさいまし男與三郎さんと云ふは貴所様で奥ハ一與三てエのは私ちでげすまア此處へ御上んなさいと俄に與三郎悪者作り相成つて煙草盆を突出し奥一服召し上れ云はれて此方も中々の悪者で有りますから金先ッお天氣のお世事や時侯の御挨拶は後として早速申上げますが芝田町二丁目松屋芳兵衛隠居樂齋名代として参りましたお見知り置き下さる様に私は松屋の手代金八と云ふ者で御座います奥ハ一然うで御座いますか始めてお目に掛ります、お出成さるからには昨夜からの隠居の不始末何も彼も御承知で金何も彼も承知で使に参りまして扱親方長い短いは云ません何うか相當の事で御辨を願ひます實は隠居も全く心得違ひで御座いまして夫は求めて何も是へ参つて兎や角やと云ふ譯ではなし御内儀の親切で蚊帳の中へ這入はしたのが最う其事を彼是云つた處が詮方が

ないが貴所の方でも表向きにした處が隠居と貴所の御内儀が罪人に成り早い話が貴所の名前が世間に出ても能くならうが何と相當の事で話しをしては呉れますまいか奥御尤でげす其處で貴所の思召と云ふのは金思召と云つて別にも有りませんが失禮ながら此う云ふ事は金と云ふのが極り文句奥成程マア其んな者で夫ぢやアお手代さん私の方でも文句なしに早い話しにさせうが一本お呉んなさいまし汚した面を雪ふ爲に纏めた金の百兩如何で御座いませうか最う縁日で植木を買ふ様にねだられては困りますが出る處へ出て間男の裁判を願ひませうか金然う云つて見ると一も二もない譯處所に居るお内儀さんは定めて對手の方で御座いませうか本来なれば宅へ置くと云ふのも少し私しの方で訝いと疑つて見れば際限の無い事異ヤイ〜おかしな事を云ふナ噂が中に居れば訝いとは何だ……ユウ金八手前は今迄能く似た奴と思つて居たが十年計跡迄横山町の伊豆屋の中に若衆をして離甲職人から仕上た金八ぢやアねエか金エ……何も私ちも名も與三さんと

云ひ似て居るとは思つたが餘りにお顔が違つたから實は不思議に思つて居ました。が貴所は伊豆屋の若旦那與三郎さんぢやア御坐いませんか。與三郎の成れの果だ金八暫く會はねエなア金イヤ何も誠に一別以來一寸十年餘成ります。若旦那貴郎何うしました。與己れの方の謂はれ因縁は話しが長い。が飛だ災難で生も付かない姿となり當時は勘當の身と成つて生れた宅に出這入も出来ねエ此様真似をして居るが金八手前は話しに聞たが己の宅で餘程不都合を働いたとか云ふが今更其様事を云つた處が十年は一昔し己が鬼や角に調べると云ふ譯もねへが其様事は何うでも宜いとして當時は田町の蘆松の手前手代に成つてると金最う色々私も商法を失敗なつて流れくつて松屋芳兵衛の手代となり傍隠居の用も達して居ります。與エー久し振りで手前に逢つたので昔語りや何や彼で肝心の懸合が離れて仕舞たが金八汝も丸切り他人ではなし以前は主従の因も有た者だから此處は手前が心配して旨く話をつけて呉れ」と云はれて金八根が不長の奴で有りませうから此度考へが

へましたには此與三郎は最初は餘程悪黨と思つたが話して見れば元は此屋の獨り息子今ぢやア悪者に成つたと云ふ者の根が堅氣の男だから此奴ア一ツ嚇かして些の金で承知をさせ隠居の方には大な事を云ひ旨く胡魔化して遣うと云腹の中に思案を定めました。が是より何と話しが付か次第に讀る

第拾五席

金八は與三郎よりは根が悪黨でありますから此時俄かに様子が変わつて金モシ與三さん、昔しの若旦那、お前さん方は御夫婦で宜い金儲けをしやうと云ふ積りであつたらうが私が掛合に來たからには金は澤山出されねへ、實はお前方夫婦は云ふまでもない相互間男筒持せ、夫に引掛つたのが隠居の不仕合せ、けれども此つを表して向き町奉行所へ訴へて出れば與三さんお前何うなると思ひなされる、成程亭主があつて見れば知つても知らねへでも夫は間男には違ひなからうが隠居の方が却つて罪は輕くつてお前さん方二人

りは強取詐欺同罪で氣の毒ながら聞い處へも行にやアならねへ、然うして見りや餘まりトツとした話でもありません、主従の名のりはしたのが公然にする氣なら家主へ斷つて預りの一さつを取てお前方夫婦をば私の方から町奉行へ訴へをする積り、私は隠居の委任状を持って來ましたよ、けれども十年跡の主従の昔し話し流石情愛に引かされて然んな荒ッばい事は言ひますまい、與三さん篤と分別をして今度の事は對手が悪いから宜い加減に諦めるか、五十兩の金を出す位なら事を大きくするが思案を定めて挨拶をしませへ、オイおとみさんとやら相互間男の仕損ひだ、御亭主を勤めて無事に事を濟せる方がお前方の爲になるが何うです然うしたら……」お登美も漸く夫へ出て登與三さんお前が餘計の事に主従の名のりなどをするから詰らない事になつて終つたぢやアないか、モシ金八さんとやら夫はお前さんの云ふ通り相互間男持せは濟ないけれども何しろ松屋の隠居さんは地面家作も持た人、握り拳で只だ嚇かして引込せるんではありますまいね金夫

は當然の事、出やうに依つては野暮の事も言はにやアならんが至當の言をして呉れよば隠居も是に引掛つたのが悪いんだから夫だけの道は付る事にしませうが併し隠居も中々強く出て居るから一寸話も纏らないから此の處ろは何と此うしませう、何も彼も言はないで私の懐ろから十兩金を上げませうからマア、其れで御勘辨なさい、今度の事は仕損ない、又た宜い對手もあらうから埋合せは附ませうから此十兩を其方へ取て隠居の紙入と羽織をば返して下さい、夫から跡で間違ひはなくとも念の爲め此事に付て決して此方に異存はないと云ふ書附を一本渡してお呉んなさい、何の中でも隠居に對して私が又た何をしたかと思はれても何だから、夫とも其れが思といへば今も云ふ通り事は好まんが二人を對手に相互間男持せの断をする積り、マア、夫も野暮の事だから十兩で我慢をしなさい」と隠居から今朝受取た五十兩の金の中から金八は十兩の金を懐中で勘定をして夫へ出し金夫では此所へ十兩、是を受取て紙入と羽織を返して下さい「與三郎も今

さら仕様がなから興おとみ何うしやう登何うしやうたつてお前の勝手  
 をしな」金八大口を明いて食アハ、内儀さんにどうしやうといふ様ぢ  
 やア仕様が無い、マア何うも此うも入らない、キリ／＼紙入と羽織をお出  
 しなさい」と云はれて笠等の曳出しから縞紗の羽織と蝦夷錦の紙入を出し  
 奥中を改ためてお持ちなさい」金八は中を捻ため金、是で宜しい、夫では今  
 云つた書附を一本よこしてお呉んなさい」與三郎不承／＼に書附を替て金  
 八に渡す、金八は之を懐ろに入れて食マアお前さん方は御亭主の顔の怖い  
 のと内儀さんの美しくしいので妙な事をおしなさるが然んな不正の事をして  
 長い世渡りは出来ませんせ能く氣をお附なさい、頼馬の事をすると思ひ處  
 るへ打込まれますせ」と金八は一言を残して此の家を出て、行く、跡には  
 二人り登詰らんぢやア無いかねへ、お前何も主従の名のりなぞをするには  
 及ばないぢやアないか興事に據たら味方に引入れやうと思つたからよ登、ヒ  
 ヲツとするとは彼奴に誤魔化されたかも知れないよ、そんなに骨を折て十兩

では詰らないが併し元が切れないから仕方がないと諦めて仕舞ふ方が宜  
 らう興然うよのう、先ア心持が悪いから饑でも取て一盃飲んで芝居でも見  
 て終つた方が思ひ切りが宜いや登然うサ、夫では然うしやう」と不義の金  
 は保ち難し、忽ち驕りの爲に我すは遊び人の常であります、扱金八は鼻高  
 々と致して芝田町へ歸つて参りましたが女房には程能く云つて間で彼の四  
 十兩は賭着し、又た隠居の方へ往て相手が悪いからと云つて二十五兩取り  
 びて六十五兩此の金八が横取をして仕舞つたのを隠居は然んな事は一向知  
 りません、是より致して凡そ半月も経ちました、最う七月の下旬の事で御  
 坐います、未だ残暑の凄き兼る處ろからお登美は相變らず何にもせずには  
 ナリとして隠居から取つた金も使つて仕舞い與三郎は近所の船宿で花めく  
 りばかりして居る然るに或る正午少々過る頃小間物屋が来て小間物の御  
 用は御坐いませんか、みすや針、楊子齒磨、元結は宜しう御坐いますか、  
 小間物の御用は御坐いませんか」と頼りに格子戸の前を呼んで参ります、

次の間にゴロリと寝て人情本を見て居たか登美は登オイ／＼小間物屋さん、一寸……小へ、何ぞ御用でげすか登黄楊の櫛を持つてゐるなら見せてお呉れ小へイ黄楊の櫛、極宜しいのが御坐います、只今御覽に入れます、御免下さい」と小間物屋は大層高い荷を背負い格子を明けて入り来る傍へ前を下して腰を掛け、汚ない手拭で顔を拭きながら小へまだどうも残暑が酷しう御坐います登「どうも暑う御坐いますねへ、狭い物だから餘計に暑苦しくて往ません小へイエ何う致して誠に結構の御仕ひで御坐います」と云ひながら小間物屋は黄楊の櫛を彼是れと出しまして小へ此方は本場で御坐います、此方は色着けで御坐います縁日などで賣てる安い奴で、和女などの御髪には十ト載り兼ます、夏の方を召して下さい登夫は如何程だへ小へ此の方が三匁五分、色着の方三十二文登然んものは往ない、此方も高いねへ小へどういたして、本場でげすから中々夫でもお安いんです、然んなら御新さんばらふにしたら如何で黄楊よりはばらふの方が御格好のがあります」と種々取

出して見せるを女の事ゆゑ那方此方見分けて居ります登此のばらふの櫛が夏いやうだが是ほどの位です左様で御坐います、又た始終お最負を樂りますから三朱と二百に致して置ます登餘まり高いぢやアないか、一朱お負けな二朱と二百に買はう小へ夫は甚う御坐い升、中々元が然ういふ譯に参りません三朱と二百ではお安いので、へい……」と云つてゐる所へ浴衣へ三尺をひいて濡手拭を提げて湯から歸つて来た興三郎、格子をガツツと開て家へ上りながら興オイ暑い／＼登オヤ親方お歸りか興お登美櫛を買ふのか登ア一餘まりひよく成たから髪櫛を一本奢ろうと思ふ興小間物屋さん儲かるかへ」小間物屋は興三郎の顔を見て苦い貌をして小へ何うも近來はお客様の方が御巧手で在つしやるから誠に儲かりませんで困ります登「旨く云ふせ、……何だおとみ黄楊の櫛を買ふのかと思つたらばらふか、トヲ見せお登興三さんは宜いかと思ふが興ウム是は幾らだ登三朱と二百と云ふのを今二朱と二百にねぎつて居たの興最う些と宜いのはないか小へエ誂へ





小私は何を隠しませう芝田町二丁目松屋安兵衛さんの御地面中に居ります  
小間物屋で御坐います奥ハ、ア夫から小私しの隣家に松屋さんの懸け廻り  
の手代の金八といふが居ります奥へエ小其金八からの話に此間雷の鳴つた  
時に松屋の隠居が雨に降られて同朋町の新道へ懸込んで雨宿りをした處ろ  
を其の相互間男の女房と云ふのに引込れて遂に騒動になつた五百兩も遣せ  
といふのを五十兩で乃公が話を附けて来た、大體の者では五十兩では話が  
附ねへのだが乃公が掛合つてやつたと金八が自慢に話しましたが出目  
中々食へる奴ぢやアありませんから五十兩出したといふのも何だか出目  
かも知れせん」と之を聞くと與三郎とおとみは俄かに様子が變り與三  
さん夫れ御覽な、詰らないぢやア無いか與然うして見ると金八の野郎が十  
兩の當がへで四十兩と其上に禮でも取たに違ひない登中に立つ奴に旨いこ  
とをされて眞正に馬鹿くしいぢやアないか、只た十兩ばかりで詰らない  
がねへ、與三さん確乎かしよ與思々しい奴だナア」小間物屋は何だか様子

訝しいと思つたが商賣をした錢を取たからは是も宜いとソユ〜に支度をし  
て歸らうとするを與三郎は奥オ小間物屋今云つた同朋町の新道で相互  
間男を家業にするなア乃公だナヒエ、ととらして御免なすつて……  
與此處に居る年増を餌にして客人を引掛たに違ひない、けれども金八に些  
と割を食てるからは是からキンバリと話を附なけれア成らねへから汝一途に  
往て金八の家へ案内しろ、貴様が證人だ……小ヤア是は大變だ、どうぞ夫  
は御免を蒙りたう御座います、是から他へ逃への品を届けなければなりま  
せんで、また此ンな荷物を持って居りました……與ナニ荷物は乃公の所へ預  
かつて置いてやるから乃公と一途に往け、サア表てへ出る小へエ……」傍き  
からおとみが登小間物屋さん荷は妾の處ろへ預かつて置くから家の人と一  
緒に芝田町へ往て来てお呉れ」とおとみは重たさうに小間物屋の荷を奥の  
方へ持て往く手持不沙汰の小間物屋が據るなく與三郎に尾て芝田町へ参り  
ましたが是より此の小間物屋を證人として與三郎蓬松の家へをどり込むと

いふお話しで御座います

第十六席

人の性は善なりと申せども彼の與三郎の如き今までは家家の息子と云はれ何不自由なく成長いたしましたがおとみ故に木更津で受けたる傷が原に相成り性來臆病の心を去つて入れ變つたる悪黨魂ひ、其上唯勤めて雄時を作るといふ、おとみに勤められさ不良の事を致し、且つ前回に述べたるが如く目玉の富八を切害いたしてより愈々魂が据つて人を脅迫し金を取る事が面白くなつて彼の小間物屋常吉が口走りましたを證として同人を連れて芝田町二丁目の蔭松の家へ白晝に躍り込みました茲に於て松屋の家では上を下へと騒動なし、金八は之を聞て松屋へ對しても濟まんと女房を置き去りにして東海道筋へ逃出し、與三郎は對手を出せと云つて愈々猛り狂ふ主人の由兵衛は表で立ては現在父の耻辱にもなる事ゆゑ中へ立て金百兩の金

を出して先づ此の一條は内済となつた、尤も此一回を詳細に述べても宜しう御坐います之餘り面白くさい筋で且は今日高尚の世の中に斯様の事を長たらしく演ずるは御看客の思召も如何あらんと聊か之を憚りまして茲は一口に陳べ置きます、不義の富貴は浮べる雲、然んな事には氣が附かぬ凡夫の淺間しさ、百兩の金を握つて家へ歸り鼻高々と誇つて居ると同氣求める女房おとみが初めて莞爾笑貌を出來登與三さん大層腕が上つたねへ、併し小間物屋の常八といふ奴が頼馬のやうだけれども此方の爲には福の神、併し此位なら最う些と取れたかも知れないねへ與然う慾張んなさんなマア百兩なれば勘辨して置くが宜い、只だ可笑いのは金八の野郎だ、粟を喰つて逃やがつたのが一番滑稽よ登真正にマアツクしい奴だねへ、那奴は太エ奴だねへ與ウム那の位お太へ奴は無へ」と人の事を太エ奴だといふ己れも随分細い方でもなからうが手前勝手な者で御座います、扱其後らは百兩の金のある中は今日は芝居明日は屋根船にて向島へ虫を聴きに行くのと

費澤三昧、固よりいたして其の金とても残り少なくなつた時弱り目に祟り目、其の年の十月になると江戸中の無宿を刈り取るといふ事になり當時町奉行依田豊前守、有名なる處るの政治家にして江戸市中に押込夜盗又は博徒等追々悪黨が立入りましたから南北町奉行相談の上別て依田豊前守、月番ゆゑ密かに町奉行附屬の同心、手先向は其他の者へも嚴重に沙汰を致し夜怠りなく隠密等をば街に入り込ませ、今日無家業で居る者を先づ一掃拾ひ上げて見ると云ふので是から町内の裏店、又は場末の町へ入り混せ今日稼業なしで居る者を悉く引上げたる何萬といふ數を知らず、夫々詳細に取調べて見ると全く聊かの金があつて其の小金を貸して些かの利分を取て渡世となし又は夜具布團の損料などを貸して居るといふやうな類ひ、此れ等は忽ち放免され賭博其他不頁の事をなす者と認定の附たる者は裁許なしに傳馬町の無宿牢へ入牢と相成りました、淺間敷くも與三郎夫婦に於ては逃る途を失なひまして兼て其の筋の星が附て居た者と見えて與三郎は來

の大半といふへ入牢になり、お登美は女牢へ送られました、扱て順々に取調べて見ると與三郎人殺しを致しましたる事、是は未だ其頃發覺いたしません、又た夫婦も云はず只だ賭博犯で本性なれば入牢の上江戸構ひにある處るで御座いますすが此頃佐渡の金山の人足が拂底其譯如何となれば本年の夏より秋へ懸けまして越後地方から佐渡の島へ疫癘が流行りまして、苦役などを致したものは皆な半瘡といふ者が出來ます、今の懲役場の中の有様とは變つて昔しは餘程囚人の取扱が苛酷でありました、第一不潔であつたから流行病の如きは尙更ら其の感染が早くバツ／＼倒れて仕舞ひました依て江戸表に於ては此度召取ります無宿、追放になります者にて壯健の者を選んで夫を佐渡行といふ事に政府に於て決定いたしましたものと見えます、然るに與三郎の如きは入墨にもあらず追放にもならず依然として獄中の暗い處ろに涙を翻して時節を待て居ります、其年の十一月の上旬かとのみの方は女牢から引出され此の兇狀は相互間男筒持せ、強取騙り數罪俱發、是は

新芳原江戸町二丁目松葉屋半蔵へ奴遊女に上より下すつた、其の年数は三年三月と定めがあります、是は伯圓が此前演じました番町皿屋敷の香阪甚内の娘即ちおさくの妹おゆうが三浦屋へ下されになつて名を大茂と改めたる件り看客諸君もお記憶で御座いませう、凡て其の頃は夜鷹即ち地獄、又はおとみの如き犯罪者は首を斬るほどの事もないから懲戒の爲に容貌美き女は多くは奴女郎に賜はつた者で御座います、扱三年五月の中其の遊女の稼ぎ高の半ばは揚代金として是は官へ納め半ばは樓主と其女の衣類身の廻りの費用に充て官へ納めた方は不浄金の内へ入れ置きまして川浚ひ又は死罪其外總ての處刑者等の費用の方へ用ゆる故に之を不浄金と云ふ然れば今回政府から貰つたる松葉屋半蔵方の奴遊女お登美の様子を見ると盛りは少し過ぎたせれもまだ年齢は二十五才心は悪か知らねども容貌風姿は錦の似き麗かなるに樓主も大ひに悦んで名を錦と改め初めて突出しになると其の日から致して奇を好むは人情彼の錦を慰けに生掘んと致つて来る浮

れ男子 忽ち全盛引手数多の身となつて夜毎に變る枕の敷淺間しい身になつても曉暮思ふは與三郎の事、私しは同じか處刑でお咎め故とは云いながら紅粉を粧ひ、髪飾り衣服の伊達模様、名も錦とは差かしい勤めの身體去れど身に綾羅錦繡を纏ふて居るは勿體なや、與三さんは今ごろ聞くも恐ろしい傳馬町の御牢内で定めし泣て居られやうが此末どうなる事であるか假令遠い島へ遣られるとも命があれば又た再び廻り會ふといふ楽しみもあるけれども萬一役人の見込が悪ければ千住小塚原の草の平と聞て居るが嗚呼淺間しや現在夫と思ふ其の人が生死の程も解らぬに此の身の上は心にもない男の機嫌を取り忌な座敷で憂ひを隠し笑つて其の日を送るといふはマア何といふ情ない身になつた事かと流石のおとみも打嘆ちて涙の溜く日としては御坐いません、扱も名奉行依田豊前守殿の落もない此度の裁許佐渡行きは二十五人と相定まりました與三郎も其の中へ編入いたしました、是は最うザツとした事で御坐いまして先づ一同を町奉行のお白洲へ持出しま

して銘々に罪の次第を陳べ、重きお處刑にも仰せ付べき所る上格別の御慈  
 悲を以て佐渡國金銀山水遣人足仰付らるゝ者なり有難くお受に及ぶべしと  
 是だけの事で御坐います、是から一旦拘留いたして夫より出立の日を定め  
 何れも軍鶏駕籠、役人が附て江戸の土地を離れまする、尤も御府内では其  
 事は出来ませんが板橋の驛へ懸りますれば親子兄弟或は妻其他の親戚共役  
 人の情で對面を免すといふ是は格別の御慈悲であります、其の二十五人の  
 中の與三郎は生れ故郷の花の大江戸を跡に致して見るもいふせき軍鶏駕籠  
 に打乗せられ、身は縛しめの高小手、僅かに駕籠の中から致して往來の  
 見える丈けの穴が明て居るが稍々板橋の宿も通り越し、宿端れへ入り來つ  
 たるは與三郎の乗たる軍鶏駕籠掛りの役人同心手先七八名が附て居ります  
 が兩側の茶屋へズツと駕籠が這入りする、手先が夫へ來つて「兵や、貴様  
 遠は役人へ願つてやらうか、湯茶でも吞てエなら然う云へ」駕籠の中から  
 甲「御慈悲で御座いますと御有難う存じます」どうにかお茶を一杯頂きたう御

坐います手待て〜今順に遣るから」と云つて居る處へ時は最う十二月上  
 旬、甲斐〜しき旅扮へ木綿の半合羽に尻高々と端折り、脚半跗掛、草鞋  
 を履き銅鐵造りを一本帶し、左りの手に管笠を持って年齢四十五六になる職  
 人、棟梁風の男、腰を屈め男、エ一恐れながら佐渡行の囚人をお送りになる  
 お役人様方へ一寸申上たう御坐います申上ましても宜しう御坐いますか  
 役「何だ〜男私しは兩國藥研堀に居ります大工の源八といふ者で御座いま  
 す、此度佐渡行になる囚人の中、當時無宿、元横山町三丁目伊豆屋の伴與  
 三郎といふ者が居ります趣きで御座います、生死も解りません佐渡への  
 送りになるので御座いますから一目面會を致したくお上様格別の御慈悲を  
 以て此事を御免しに相成ますれば有難い仕合せに存じ升、固より職人の事  
 で御座いまして決して不都合の者では御座いしません、只今出入先の息子が  
 零落て勘當され、據なく悪黨の仲間入をいたし首を切られるのをお上の御  
 慈悲で佐渡行になつたと云ふ事ゆへ其の暇乞ひに参りまして御座います、

御慈悲を以て御免しを願います、御慈悲で御座います」此事を聞た一人の役人、どうやら情けありさうな人が登ユレ喜左衛門く「登へエ」是は手先であります、役薬研堀の大工の源八といふ者が慈悲を以て與三郎といふ者に遇はして呉れといふ、能く取調べて會はして遣れ、是は表向きではないが此事は公けでお目翻しになつてゐる、上の御慈悲であるから能く意地の悪い事をしないで會はして遣れ、喜左衛門と云ふ手先の親分「喜エー源八さんとは貴方が源大工源八は私して喜ヤ源八さんといふ話で気が付たが貴方が薬研堀の棟梁で御座いますか、私は真鍋河岸の喜左衛門で御座います喜ヤ是は親分で御座いますか、今度は御苦勞さま、貴所佐渡まで喜イヤ佐渡までは往ません、是から高崎まで参ります、旦那方も高崎まで、那れから先は旦那が變り宿送りで佐渡まで行きます喜左衛門様で御座いますか喜何かへ棟梁、與三郎と云ふは疵だらけの奴かへ、第三番目の惣籠だ……ウム那れがお前さんの出入先さの……喜左衛門様で御座います、最う横山

町三丁目の居附地主、鼈甲問屋伊豆屋といふ富限の息子が女の爲に疵を受け又た其の女ゆゑに遂々此んな事になりました喜夫は氣の毒千萬の事、若し中といふ者は仕様がなない者だ、酷い疵と思つて居たがお前が夫ぢやア出入先の若旦那かへ源左様で御座います、實は親父さん阿母さんから頼まれて参つたので御座います親分少し届け物があるが……喜然んな事は例はせうも知らない、お前の勝手に鼻紙を遣るとも手拭を遣るとも勝手にするが宜い、江戸の内では出来なないが今齋藤さんと云ふ旦那が意地の悪い事をすゝると云ふ事を被仰つた、夫では時の後れない中に會て遣んなさい」と喜左衛門夫へ来て喜コソ當時無宿横山町三丁目の鼈甲問屋の息子で與三郎といふは其方か喜私して御座います喜其方の世にある時に出入りをしたといふ大工の棟梁薬研堀の源八といふ人が遇いに來た上が格別の御慈悲で知己の者にお遇せ下さるから頼みたい事があれば云ふも宜し又た兩親へ暇乞ひを云ひたければ能く其の源八といふ者に云ふが宜い喜有難う存じます喜

ア棟梁源八さん此所へお出でなさい御慈悲で御坐います」と棟梁は手拭  
を掴んで軍鶏籠籠に近附き貌を見るが否や剛毅朴訥は仁に遇し腕力では後  
れを取らぬ江戸ッ子も茲に至つては心もくぢけ、強いやうでも涙が先立ち  
口も聞けぬと氣を取直し涙モシ若旦那、與三さん」といふも盛つた源八の  
聲に同じ思ひの與三郎漸々貌を揚げまして棟梁、面目次第もない、紋じ  
生中生き延びて此んな姿になつてお前に貌を合すのも誠に羞かしいが能く  
来て下さいました見れば涙の種、聞けば愛ひの元だから、哀しや不實の  
奴と思はれても仕方がないから實は知らぬ貌をして居やうと餘ッ程考へま  
したが昨夜急に御店から御用があると呼ばれて大旦那や阿母さんが段々  
のお頼み、私しのやうな者でさへ涙の種になるばかり、何處から聞込に  
なつたか愈々明日は悴めが佐渡へ遣られるとの事板橋の宿でお役人へ嘆願  
をすれば遇はして下さるといふ事だア手代や何か遣ては又九不都合だから  
どうぞ棟梁往て呉れと頼みを受た此の源八若旦那何にも申しませんが佐渡

へ往ても身體を氣をお附なさい、命あつての物種だ、大旦那は三年と聞  
きました、三年と言へば千日た身體さへ達者なら又た此の御目に懸れる  
からどうぞ善心に立返つてお呉んなさいまし、是は阿母さんから御内々  
と包んだ物を窓から膝の上へ落す、目明し喜左衛門は見つて見ぬふり、與三  
郎は小手は箝めて居りますが押頂いて與棟梁身體を大事にしるといふが夫  
は佐渡の事を知らないから然う云ふが私も佐渡へ往た事はないけれども呉  
い間御牢内で囚人の話を聞けば世に恐ろしい佐渡の島、夫はく此の世か  
らなる地獄の境界、其事を云へば毎日何十里といふ道を往たり來たり金銀  
山へ水を運ぶ其の苦しき役人や間頭の氣に入らぬ其時は些細の事かあつて  
も瓢箪責や釣し責、聞くも恐ろしい、阿嚏に遇い生て歸る者としては稀とい  
ふ事、佐渡へ行くのは死に、行くのだから最う速も再び生て父母は勿論お  
前方にも遇ふ事は出來ない、ア、親父さん阿母さん不孝の上、不孝の上  
先立つ罪は宥して下され」源八も之を聞いて然んな氣の弱い事をいふ者

はありませんでうで地獄といふ位の所だから樂の事はあらう筈もないが之を辛抱して勤め上げれば又た三年経つ中には再び娑婆に出られるから何でも與三さん氣と丈夫に持て、成丈け役人衆や間頭の氣に入られるやうにするが肝心でありますぞ與併し源八さん有難い事には傳馬町の御牢内に居た時に品川で道樂者の大將分觀音小僧の久次さんといふお人が今度取締りの爲に此の暮まで名主になつて居なさるが娑婆で無宿の旗頭牢へ這入れは名主役の其の久次さんに大層私は可愛がられ役人へは言い悪いが佐渡の島の顔役へ送る手紙を二三本下すつたから地獄へ往つても少しは樂が出来たらう、源八さん其久次さんと云ふ親方は十二月の中旬には乾度明るい娑婆へ出る人だからどうか其内に品川近邊へでも往つた時には尋ねてやつて與三郎が御世話になつたと禮を云つて呉れるやうに祈宜しう御坐います、確と覺えて居ります、娑婆へ出るまでもなく早速に御牢内へ差入物でもして上ませう、夫ぢやア與三さん、若旦那、何處まで送つて行つても限がない、随分

身體を大切に……與源八さんモ一是がお別れか……どうぞ親父や阿母に不孝の罪はお前から能く説て呉んなさい、お前の内儀さんへもどうか宜しく拜然んな事はどうでも宜い此方の事は心配しないで自分の身體を大切になさいますし」と互に眼蓋を濕はして別れ兼たる其處へ彼の目明し喜左衛門か喜親方際限がないから最う諦めてお歸んなさい喜親方に有難う御座います、旦那様有難う御座います、喜左衛門さん誠に是は少しばかり……喜何だ、イヤ飛でもない、お上のお情で悪むべき罪人だが是が一旦の別れになるか知れねへから親戚の者や知己の者に遇はして下さると云ふは公然では出来ねへが内々お目こぼしに成て居るのだ、能うく齋藤さんにお禮を云つて決して賄賂報酬などゝ然んな汚らはしい物は今の世の中には無エ事だ」と潔白なる喜左衛門の言葉、源八も差入れた様子にて只だ恐入て居るばかり、其中に早や二十五挺の軍鶏駕籠北をさして行く、最早や口を利く事も出来ず、跡見送つて源八も涙を翻す、陰ながら送りに来る一統の者思は



はありませんどうで地獄といふ位の所だから樂の事はあらう筈もないが之を辛抱して勤め上げれば又た三年経つ中には再び娑婆に出られるから何でも與三さん氣を丈夫に持て、成丈け役人衆や間頭の氣に入られるやうにするが肝心でありますぞ與併し源八さん有難い事には傳馬町の御牢内に居た時に品川で道樂者の大將分觀音小僧の久次さんといふお人が今度取締りの爲に此の幕まで名主になつて居なさるが娑婆で無宿の旅頭半へ這入れは名主役の其の久次さんに大層私に可愛がられ役人へは言ひ悪いが佐渡の島の顔役へ送る手紙を二三本下すつたから地獄へ往つても少しは樂が出来たらう、源八さん其久次さんと云ふ親方は十二月の中旬には此度明るい娑婆へ出る人だからどうか其内に品川近邊へでも往つた時には尋ねてやつて與三郎が御世話になつたと禮を云つて呉れるやうに尋宜しう御坐います、確と覺えて居ります、娑婆へ出るまでもなく早速に御牢内へ差入物でもして上ませう、夫ぢやア與三さん、若旦那、何處まで送つて行つても限がない、随分

身體を大切に……與源八さんモ一是がお別れか……どうぞ親父や阿母に不孝の罪はお前から能く説て呉んなさい、お前の内儀さんへもどうか宜しく源然んな事はどうでも宜い此方の事は心配しないで自分の身體を大切になさいます」と互に眼蓋を濕はして別れ兼たる其處へ彼の目明し喜左衛門か喜親方際限がないから最う諦めてお歸んなさい源親方誠に有難う御座います、旦那様有難う御座います、喜左衛門さん誠に是は少しばかり……喜何だ、イヤ飛でもない、お上のお情で悪むべき罪人だが是が一旦の別れになるか知れねへから親戚の者や知己の者に遇はして下さると云ふは公然では出来ねへが内々お目こぼしに成て居るのだ、能う齋藤さんにお禮を云つて決して賄賂報財などゝ然んな汚らはしい物は今の世の中には無エ事だ」と潔白なる喜左衛門の言葉、源八も差入れた様子にて只だ恐入て居るばかり、其中に早や二十五挺の軍鶏駕籠北をさして行く、最早や口を利く事も出来ず、跡見送つて源八も涙を翻す、陰ながら送りに来る一統の者思は

す聲を揚げて別れを悲しむ此處る劇場あれば見物の袖を潤す所ろでありま  
す是より愈々與三郎島破り當講談の大眼目と致します處次第に請ひませう

第十七席

與三郎は愈々佐渡行きの悲しい身と相成りました、中仙道より軍鶏籠籠に  
て信州路へ掛り善光寺より右手へ切れて朝日嶽を経て是より關川關山等の  
諸驛を過ぎ、高田へ來り直江津へ着きまして是から越後の米山峠を越えて  
寺泊から海上三十里、愈々佐渡へ着船いたしました、然るに佐渡の小木津、  
只今は開けて小木町となつて三千餘戸あり新潟縣に屬して居ります、是は  
當時の話し、其頃は相川へ流人船が着きました、相川の役所で檢たれが濟で  
金銀山までは是より八里、此の金銀山の水使に着くといふのが即ち囚人の  
苦役を爲す處ろ、金掘人足は別に工夫と云つて是は職工で御座いまして罪  
人では御座いません、罪人は最些と烈しい業を致します、金山に悪水が

ります、此悪水をかひ出して大いなる桶へ入れ出し所ろまで以て來て之を  
捨てます朝六ツ時から夜七ツ半時まで、往たり來たり水をかい出ては運  
びます中々の困苦で當今の懲役人などから見ると餘程慘酷で、健康の身體  
でさへも三年も此の苦役をすると大體最う息盡て終ひ、然らば佐渡へ往く  
のを地獄へ往くと云ひ知らずに、往けば格別の事佐渡の景況を知つて往く  
罪人は今度が娑婆の名残りぢやぞうを御題目でも唱へて呉れると朋友の者  
へ涙を翻して暇を告げる見送りの者も萬に一つの無事を祝して送り出すと  
云ふ、然れば與三郎初め江戸から差立てになつた二十四人の者夫々の苦役  
に付き此の世からなる地獄の境界、然れども與三郎は幸ひにして慘酷中に  
も少しく情を受けると云ふは彼の半名主なる觀音小僧の久次から貰ひ受た  
る處ろの信書があります、其の信書の宛と云ふ者は當時水使人足の頭をし  
て居る越後國長岡無宿の權十郎、出羽國山形無宿の文吉、此の兩人を宛に  
書面を送りました其の書面に與三郎の義を頼むといふ云々の文句がありま

す辭を揚げて別れを悲しむ此處の劇場あれば見物の袖を潤す所でありま  
す是より愈々興三郎島破り當講談の大眼目と致します處次第に講じませう

第十七席

興三郎は愈々佐渡行きの悲しい身と相成りました、中仙道より軍鶏駕籠に  
て信州路へ掛り善光寺より右手へ切れて朝日嶽を経て是より關川關山等の  
諸驛を過ぎ、高田へ來り直江津へ着きました是から越後の米山峠を越えて  
寺泊から海上三十里、愈々佐渡へ着船いたしました、然るに佐渡の小木津、  
只今は開けて小木町となつて三千餘戸あり新潟縣に屬して居ります、是は  
當時の話し、其頃は相川へ流人船が着きました、相川の役所で檢たれが濟で  
金銀山までは是より八里、此の金銀山の水使に着くといふのが即ち囚人の  
苦役を爲す處る、金掘人足は別に工夫と云つて是は職工で御座いました罪  
人では御座いません、罪人は最些と烈しい業を致します、金山に悪水が書

ります、此悪水をかひ出して大いなる桶へ入れ出し所るまで以て來て之を  
捨てます朝六ツ時から夜七ツ半時まで、往たり來たり水をかい出では通  
びます中々の困苦で當今の懲役人などから見ると餘程慘酷で、健康の身體  
でさへも三年も此の苦役をすると大體最う息盡て終ひ、然らば佐渡へ往く  
のを地獄へ往くと云ひ知らずに、往けば格別の事佐渡の状況を知つて往く  
罪人は今度が娑婆の名残りちやぞうぞ御題目でも唱へて呉れると朋友の者  
へ涙を翻して暇を告げる見送りの者も萬に一つの無事を祝して送り出すと  
云ふ、然れば興三郎初め江戸から差立てになつた二十四人の者夫々の苦役  
に付き此の世からなる地獄の境界、然れども興三郎は幸ひにして慘酷中に  
も少しく情を受けると云ふは彼の半名主なる觀音小僧の久次から貰ひ受た  
る處ろの信書があります、其の信書の宛と云ふ者は當時水使人足の頭をし  
て居る越後國長岡無宿の權十郎、出羽國山形無宿の文吉、此の兩人を宛に  
書面を送りました其の書面に興三郎の義を頼むといふ云々の文句がありま

したから取分けて、勢はりまして成丈け骨の折れる處を外に廻して、與三郎を助けて還る、けれども目立んやうにせぬと外の囚人が中々承知致しませんから陰に心附て居ります、夫が爲に與三郎も外の囚人から見ると幾分快樂をいたして昨日今日と過ぎまするが曉ても暮れても實に樂しき事もない、只だ故郷の空を見ると目に見えまするは暗々たる處の金山の恐ろしい嶮海を望めば漫々渺々として北海の有様物凄き事たとへやうもなし其上、嚴寒に木綿着物の仕着せ一枚三度の食事はもつさう飯、其の間に怠けたとあつては鞭に打たれ、又九時としては囚人仲間にも憎まれると云ふと、黙然くびり、是は八里もある山の奥で役人にも見られないのを幸ひに同囚の中の憎みを受けて居る者の胴中を腰袋でケルケル巻いて遙に高き木の枝へくし付けて一晩も置いて絶命せしと見ると其の死骸を引下して數千丈の谷間に捨て終うといふ當今の如き結構なる世中に在て之を思へば實に身の毛もよだつ様なる恐ろしい話で御座います、現に與三郎等も目前之れを見もし又悲し

き聲を耳に聞き、ア、今日は人の身であるが明日は我が身に此ういふ事もありはせぬかと只權十郎文吉をば大切に慕ひ其の他の囚人にも愛嬌を表に飾つてハイハイと云つて江戸ツ子の如才なく立廻つて居るから小使の方へ廻され與三くと云つて可愛がられて居りました、扱佐渡の艱苦も昨日今日と思ふ中に早くも三年の餘此の金山に經過いたしました、時は寶曆の七年秋九月の事で御座います、或日の事與三郎は勞れ果てたから頭から此りを受るも承知の事で岩の間の目立ない處へ仕着せを着た儘で思はず知らず勞れを休めて高野スルト夢の中に故郷へ往て別れた女房が登美と格子造りの粹な家で酒を飲んで三味線を引き、遊び戯れて居る所を夢に見て思はず莞々笑つて居ると、傍らから權十郎が「ヤイ與三起ろい、汝づるけやがつて何んだ晝の辨當から汝の影が見えねへから多くの奴等が晝はさうした、向ふ晝は何うしたと、願いで居るから小便にでも往らんだらうと此の乃公が取りなして置いたが只一人で此んな所へ來やアがつて宜い氣にな